

Mea Culpa

如月寛一 著

1942－幼少期
1954－少年期
1960－青年期
1965－丸山・雲雀丘中
1971－神大附属明石中
1983－兵庫教育大学
すずかん語録・その他

Mea Culpa

Mea Culpa(メア库尔パ) はラテン語で「私のあやまち」という意味です。自分の半生を思い出して著している内にだんだんと半生ではなく反省の方が高まって来た結果このタイトルが付けられました。

メモや、日記に記録を残すという几帳面なことができなかった彼は以下に記す文をすべてかすかな記憶の底から掘り上げました。

従って思い出せない事の方が多かったのですが、保存されていた写真や品を手にすることで皆様との暖かい思い出を甦らせることができました。

Mea maxima culpa (我が最大の過ち) は日記を書かなかったことです。

2007年春

鈴木寛の反省（半生）
すずかん メアフルバ

誕生から小学校
（1942～）



明治29年2月1日神戸市生まれ。九つ年上の姉美智子と二つ年上の兄肇。画家の父、教育熱心な母という家庭に育った。現在県庁のあるやや西の四宮神社のそばの生家は空襲で全焼。一歳半の時近くの池にはまった記憶は今も鮮明である。終戦は疎開先滋賀県で迎える。戦後は六甲（現高羽町）に引越す。近くの幼稚園の園長先生の第一印象が怖くて入園を拒否。生家の近くの頌栄幼稚園へ1947年入園。六甲から三宮まで阪急で通園。

昭和8年神戸市立高羽小学校入学。一年は三田学級。学校の庭園の紅葉の木から落下。左鎖骨を骨折。学芸会の練習で左手が上がらないことから発覚。担任の通報で病院へ。その頃ハシカを併発。欠席中にほぼ治る。

近所の三木さんの徹チャン（後に神戸新聞社編集局長）というお兄ちゃんから将棋の手ほどきを受け四間飛車しけんひしゃを覚える。二年小西学級。指導要領ができて「學」という字が「学」に変わった。すべての漢字が一年の時より簡単になり、カタカナはとうとう習わずに今に至る。

父親の念願のアトリエ完成で阪急六甲駅の近くに引越す。三年岸本学

引越し(1949年)



級。この先生は給食の時間に忠臣蔵をシリーズでお話してくれた。おかげで忠臣蔵には強い。四年三成学級^{みつなり}。圓次^{えんじ}という名前なのにみんなは「エン爺^{じい}」と呼んで親しんだ。四年生半からピアノをこっそり音楽専科の脇坂修次先生に習う。五年鈴木学級。ダブさんというあだ名の先生だったが放送教育の先駆者。放送劇に嵌められ、神戸放送の放送劇に出演。神戸大学教育学部生が運営していた「児童文化研究会」の劇グループでも活躍。神戸放送(現AM神戸)のコンクールにピアノで出場。結果は忘れた。器楽演奏クラブではアコーディオンを担当。六年入江学級。六年になって受験体制になりピアノから遠ざかる。二期期になり結核を発病。休学するも担任の入江先生による訪問指導は鬼のように続く。「百万人の算数」を全部満点取れるまで五回くらいやらされた。この休学中に「次郎物語」を全巻読んで涙で本を湿らせる。ちなみに母が初めて買ってくれた本は偉人伝で何故か「ジョン万次郎」と「ガンジー」であったがその後「中江藤樹」「ファールブル」と続く。他に読む本が無かったので暗記するほど読んだ。初めてガールフレンドからプレゼントされた本は「モヒカン族の最後」だった。ラジオでは「三太物語」「鐘の鳴る丘」と「鞍馬天狗」を欠かさず聞いた。小学校時代の愛読雑誌は「少年クラブ」であったが、付録がお目当てだった。三学期無事六甲中学を受験し、合格。

中学・高校時代

(1954～1960)



1954年六甲山麓伯母野山にある私立六甲学院中等部に入学。スパルタ教育で有名な男子校である。テニス部に入部するも貧しくてラケットを買ってもらえず一週間で断念。兄の薦めで音楽部に入部。浜中浩一先輩（後にNHK交響楽団主席奏者）からメタルクラリネットを指導される。二年の春カトリックの洗礼を受ける。洗礼名はイグナチオ。サッカーゴールにぶら下がっていて落下。手をつき損なって左手首骨折。右手だけで吹けるアルトホルンでバンドのオーディションに合格。その後アルトサククスに転向。中二の時、数学の先生が優しいのに甘え授業中に様々な遊技^{いたずら}をして遊んでいたら数学がわからなくなってしまう。今でも因数分解までの知識しか無い。

独学少年

中二の夏、家で蛍光灯のスタンドのプラスチックの笠を布で擦っていたらスイッチに触れないのに蛍光灯が光るのを発見。静電気であろうと当たりをつけて下敷きを擦って扇ぐと同じように点く。世紀の大発見と夏休みに宿題でも無いのに実験レポートを書き、物理の先生に提出。コンセントを抜いた状態では起らないので電力の一部はコンセントから供給されていると予想されると書いた部分が評価され、通知票の物理は満点となった。今にして思えばプラズマテレビが光るのと同じ原理ではあるがプラズマという言葉葉が一般に知られていなかっただけに興奮した。このような自学自習の姿勢は

音楽の面でも顕著に表れる。

夏休みの演奏旅行で四国の今治のお土産に買った紫山の竹笛の影響でスペリオパイプというプラスチックでできた縦笛に凝り、今で言うリコーダーアンサンブルを友人と放課後のトイレ（音入れ）で練習したのも先駆的経験である。自宅では専らこのスペリオパイプを吹いて遊んでいた

父親の喘息が悪化。転地療法のため現住所に転居。直後姉が不慮の死。

この頃ミサのオルガンを頼まれて弾くようになったが、自宅には一切の鍵盤楽器が無かったので友人の熊沢君の家にあるオルガンで練習させて貰った。オルガンに開眼したのがこの時である。チューバにあこがれ転向（中三）。

倉沢先生が大好き

落第しないで高一に進級できたが成績順のクラス分けで最下位グループのC組になった。数学以外は結構できたので何とか学校は楽しく行けたし、挫折感は無かった。高一から始まったドイツ語の授業ではすっかり燃えて中岡君と常に学年トップをあらそった。高校時代一番生き生きと授業を受けたのは恐らくこのコンパルト師から習ったスペイン語なまりのドイツ語と、鬼と恐れられた今は故人の倉沢豊治師の古典の授業である。寛はこの倉沢先生が大好きであった。優しいのか厳しいのか解らぬ先生であったが、宿題の無いこの授業のためにはきっちりと予習をし、復習もした。先生を困らせる質問

進路決定 (1959年)



中村茂隆門下となる

をするため一生懸命勉強した。多分寛はこんな先生になりたくて、後に教師の道を歩くことになったのであろう。

高二の保護者面談で母親と担任の倉沢先生が頭を抱えて「数学さえできなかったらどこでも受験できるのに・・・」と話し合った結果、考えても居なかった音楽への道を目指すことになった。妥協の産物とはいえ音楽大学を受験できる財力も学習歴もない。六月のその面談後急遽ピアノを買わなければならなくなってしまった。夏休みは学校の新講堂の椅子の塗装のアルバイトを母に手伝って貰いながら一〇〇脚以上シンナーに酔いながらやった。それだけでは足りないので自衛隊の青野ヶ原演習場の作戦地図（積層模型）を兄と兄の友人谷口君（現在神父）の協力も得て三人で彫刻刀片手に畳4枚分制作。その結果国際楽器で一番安いこのメーカーかわからないピアノが家に届いた。

次はピアノの師匠探しである。学校の音楽の先生である本田周二先生の紹介で当時神戸大学教育学部音楽科の先生だった中村茂隆師の門下に加えていただいた。殆どピアノ譜の読めない、ピアノの基礎のない状態だったので、バイエルからスタートしたが、確かバイエルは一ヶ月半位で終了。バッハのインベンションとソナチネ・アルバムをツエルニー三〇番と並行しながら終了したのは二学期の終わり頃だった。音大受験コースの定番曲であるベ-

トーベンのソナタやバッハの平均律曲集は三学期から始めた。音大進学は経済的に無理なので国立大学受験を目指し、東京芸大以外となると一期校の神戸大学と二期校の大阪学芸大学の特設音楽科にターゲットを決めざるを得なかった。同じ頃ピアニスト故北野健次氏のご子息北野完一君（現大阪芸大教授）もよく似た理由で音楽を目指すことになり、二人は共に刺激し合いながら受験体制に入った。新聞紙上を騒がせた高校の必修履修漏れは彼らの方が先駆者である。受験に必要な人文地理と世界史の先生の所に行き「私たちが授業に出るとみんなに迷惑がかかりますので試験は受けますから授業を免除してください」と頼み込んだのである。他の教科も同じ手段でまんとせしめ、毎日学校の講堂のピアノで何時間も練習に励んだのである。当時の練習は一日五〜八時間というものであった。高二の担任であった倉沢豊治先生は当時古典の先生であったが「鈴木が授業中に何を発言するかがいつも楽しみだった」と言うくらい古文の授業は熱心に受けその成績は常に学年のトップを維持した。学年トップと言えば意外かも知れないが寛は物理も常にトップクラスであった。

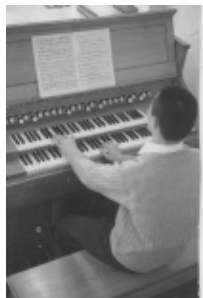
クノール師に氣に入られる

オルガンの方はドイツ人神父のクノール師に氣に入られドイツ製の新しい二段鍵盤足鍵盤付きのオルガンのオルガニストに任命された。寛の唯一のオ

正視できないピアノ



この指とまれ



ルガンの師匠はクノール師であるが、独学が得意な彼はジャン・メロー師やその他の演奏家の演奏をこっそりコピーしていた。当時の彼は生徒達が自主的に発行していたガリ版刷りの「紫陽花^{あじさい}」という同人誌にしばしば投稿し、芸術はかくあらねばならぬとかジャズは官能的すぎるのでいけないとかまるでどこかの国の指導者のような文章を発表していた。当時海星女子学院でその雑誌の愛読者の一人であった国松慶子さんが彼に興味を惹かれることになる。

寛が椅子を塗装して完成した講堂で、映画や演劇の鑑賞会は時々開かれたが「文化祭」がない学校だった。そこで寛は有志を募って実行委員会を立ち上げる。生徒会の無い学校だったので「この指とまれ」方式で実行する。第一回の文化祭の開催は手探りではあったが、即席のグリーククラブも寛が結成し、彼が主演の「まっかつかの長者」の劇は音楽までも担当した。何でも委員会の責任分担型より、責任を持ってやりたい者を中心にする方が好き、というよりあまり民主主義の好きでない寛は今でもこの指とまれ方式が好きである。

高三はあっという間にやってくるが、寛と北野君は相変わらず授業をさ



数学0点 (1960年)

ぼっては講堂のピアノを弾いていた。そんなある日は北野君のふとした思いつきでグランドピアノを押しながらマーチを演奏するというステージを築しんでいたが、止せばよいのに調子に乗ってピアノを分解するという暴挙に出た。引っ張り出したアクションを元に戻すとき一本のハンマーが引っ掛かって根本からポッキリ折れてしまったのである。セメダインでくっつけようとしたが駄目だった。結局楽器店に行き何番のハンマーだけ売ってくださいと言ったら、何と売ってくれたのである。今でもそんなものは売ってくれないと誰も信じないが本当の話である。角度や長さを調節して無事取り付けに成功したが、母校では今でも誰も気づかずそのピアノを演奏している。彼らは母校のピアノを今でも正視できない。

このようにピアノの構造や修理の学習までしたにも拘わらず、数学が零点だったため寛は神戸大学の入試に失敗する。予備校には半年も行かず結局宅浪をしながら彼はピアノのレパトリーを飛躍的に増やしたのである。

一年の浪人生活の後再び寛は神戸大学に挑戦したが、何とその日は受験票を持ってゆくのを忘れたのである。周囲の誰もが競争率が緩和されたと寛に感謝した。仮受験票で受験した彼は演奏中に事もあろうに右足が震えてペダルが踏めなくなってしまっ、おまけにどこを弾いているのかもわからな

神戸大学入学 (1961年)



くなくなってしまふ始末。それでも演奏は中断せず即興的に演奏は続けられた。これは寛に関するエピソードでも本人と試験官しか知らない事実である。この即興演奏は幼少の頃より、耳から入った曲は姉や兄が習っていた曲でもすぐ弾けたという寛の天性であり、ピアノを習う前に既にラジオ体操の曲をその通り弾いて見せて小学校三年生の担任を驚かせたという彼の才能の延長上にあることであつたと推察される。この時の入試は数学は二〇〇点満点で二点だったと後に聞かされたが、数学を除く他の教科の合計点が全受験者のトップクラスであつたので特別審議の末に合格が許されたそうである。

大学に入学してからの事を寛はあまり憶えてない。特に教養課程の一年半は「一週間に10日休む」というくらい大学に行かなかつたようである。ドイツ語は高校で既に学習済みであるし、大部分の教養科目(数学を除いて)は高校の授業のレベル以下であつた。寛はここでも数学概論を落として再履修をする羽目になるが数学の代わりに生物学を取り無事進級した。彼はこの教養課程の時期はオーケストラに入つて活躍した。このオーケストラには兄の肇がチェロで活躍していたので、彼は自動的にオーケストラに入部させられていたのである。入学式の新入生歓迎演奏会で新入生である寛が生まれて初めて触るチェロで「ペルシャの市場にて」のソロ部分を演奏した。その後寛

入院（切腹）



はコントラバスに転向するが、このオーケストラ体験は彼の後の人生に大きく関わってくる。

又この年ヤマハがエレクトーンを試作し、そのデモンストレータを募集していたので応募したところ見事合格し、大阪エレクトーングループの一員として各地に演奏に行くことになる。家庭教師のアルバイトをしながらこのエレクトーンの講師やデモンストレータのギャラで親からの援助は不要になり、奨学資金（月額2000円）と学費免除（年額9000円）も加え長年歯を食いしばって寛を支えて来た両親は一举に扶養義務から解放されることになり、出始めのカラーテレビが自宅にやってきたのもこの頃である。

この1961年6月に寛はバイオリンの伴奏を頼まれて練習をしていた。ビュータンのバイオリン協奏曲であるが難しい曲で中々難儀したようである。それまでも演奏中に時々お腹の激痛に襲われることがあったが、かかりつけの医者は慢性の盲腸かも知れないとの診断。ところが遂に本番の日大阪に向かう電車の中でもう動けない。阪急園田の駅員室で少し休ませて貰ったがどうにもならず六甲に引き返し万国病院（現海星病院）に転がり込んだ。執刀医の阪大小沢先生が到着する前に激痛のために気絶。全身麻酔から覚めたら「石が有りました」とキラキラ光る腎臓結石を三つも見せられる。腹痛

国松慶子さん



のランク第二位（一位は胆石）の激痛だったのである。20 cm 以上も開腹して原因を探すのに大分苦勞したらしく「ついでに盲腸も取っておきました」と言われる有様。10日間の入院中も日曜日の教会のオルガンを弾きに通い、その責任感の強さを見せつける。

この入院中にお見舞いに來たのが今の妻女慶子さんである。当時高校卒業後住友金属のタイピストとして既に社会人であった彼女は、実は寛の小学六年の担任入江康之先生が次の年六年生を受け持った時の生徒であつた。彼女とは学年は違つても同じ担任つながりということになる。先に述べた「紫陽花」の愛読者であつた彼女はもうこの時結婚相手として寛を考へて居たようである。お茶絶ちをし、勤めの合間に作つたクマの刺繡の枕を抱えてお見舞いに來た彼女のインパクトは大きかつた。勿論寛にとつて彼女が初恋の相手ではないが、初恋の彼女は皮肉にも慶子夫人の同窓の一年先輩であり、お互いが片想いだと思ひながら何も起こらなかつた仲である。

寛は男子校で六年間も過ごしたにも拘わらず六年間いゝゆる「下ネタ」の類の会話は誰ともしたことも耳にしたこともないし、純粹な恋愛論は親友とはよく語り合つていたのだが、固有名詞を挙げて話題にすることもなかつた。その純粹培養で育つた彼が初めて結婚を前提とした意識を持つたのがこの国松慶子さんである。

小瓶を半分分け

腎臓結石（彼の場合は輸尿管結石）という病気はその後度々彼を苦しめるがストレスが原因のこの病気の特効薬は「ビール」であると医者に勧められ大酒飲みの父親に対する反発から宴席でもビールを飲まなかった寛がその後ビールを飲むようになる。それでも、慶子さんと二人で小瓶一本を半分ずつという可愛さであった。大学でコンパがあっても彼は決して二次会まで行くことはなく、コップ一杯のビールで盛り上がっていた。どのくらい飲めるのか致死量のわからない今から想像もできない話である。

独学で普通免許 (1963年)



彼女とのデートは専らハイキングが中心であったが、夜のバイト（エレクトーンの生演奏）の会場には仕事帰りの彼女の姿が必ず見られた。当時お兄さんが2万円で手に入れたルノーという750ccの中古車を何とかデートに使いたくなって明石の試験場に飛び込みで運転免許を取りに行き2回目で見事免許を手に入れた。一回の受験料が六〇〇円だったから一二〇〇円で免許がとれたわけである。この時付いてきた大型自動二輪の免許はまったく儲けものであったがハーレーに乗っている彼を見たことがない。

留学断念

オルガンは独学でかなり腕を上げ、足鍵盤も駆使したフランクの名曲やレーメンスなど毎週新しい曲をミサの中で演奏した。クノール師もそんな彼

コンちゃん時代



のためにドイツから珍しい曲を一杯取り寄せてくれた。そんな時、有る縁でイギリスのモーリスという自動車会社の社長の援助でロンドンのロイヤルアカデミーでオルガンの勉強ができるチャンスが与えられた。しかし、このチャンスは慶子さんの涙でかき消されてしまい、演奏家への道はアッサリ諦めた。



大学の方はシニアに進級してからの寛は「1週間に10日行く」くらい熱心に大学に通ったようである。10人の音楽科の同窓生のまとめ役としてお互いの演奏を聴きあう演奏会を毎月企画したり、グループ・ノートの回覧でコミュニケーションを深めたり「コンちゃん」と呼ばれて皆から信頼されていた。夜はデート（門限9時）やバイトに精を出してオーケストラや教会の聖歌隊などにも熱心に参加した。ただピアノの指導教官の小林とし先生には随分ご心配をおかけしたと今でも反省している。というのも、寛は最初に小林先生のレッスンを一度受けて以来二度とレッスンを受けずに卒業したからである。何が原因かということとはここで触れるのは相応しくないので割愛するが、先生の人格を否定したり、先生が嫌いだったわけでは無かったことは仲間皆が知っている。強いて言うなら演奏解釈上の受け入れがたい対立が原因

大学で何を学んだのか



であった。寧ろ寛は小林先生が大好きでしょっちゅう御自宅に押しかけてな
ついていた。今も彼は時々同じ事を言うが、「教育学部音楽科は音大とはち
がう。音大の真似をしても勝てないし我々は教師として彼らと違う勉強をし
よう」と仲間に提案し続けた。その彼のリーダーシップは卒業演奏会で具現
化される。通常卒業演奏会は女子は豪華なドレスを、男子はタキシードを着
て演奏されることが多いが、寛の学年はその演奏内容は勿論音大に匹敵する
が、衣装は男子は金ボタンの学生服。女子は白のブラウスと黒のロングス
カートという出で立ちであった。神戸の一番大きなコンサートホールをほぼ
満席にしてでの話である。学生の卒業演奏会らしい好感の持てる素朴な衣装
に、やたらとケバイ衣装ばかりが目立つ今時の学生とは好対照の演奏会で
あった。

寛は兵庫教育大学に勤めてからもこの言葉を実践し派手な演奏会を戒め
た。大学から学ぶものは少なかった。寧ろ仲間と磨きあった勉強の方が有意
義だったし、バイトで身につけた演奏技術の方が役に立った。後に彼が口に
する「大学とは何ぞや」という問題意識に直面しながら過ごした4年間で
あった。卒業アルバムの受け取りを拒否し、ママさんコーラス化した同窓会
主催の派手な演奏会を批判し続けた彼のポリシーをかいま見る。親の経済的
庇護の元でのんびりと大学院にまで行く時代でも無かったし、行っても何も

新任教師 (1965年)



期待できないとこの時彼は考えていたが皮肉にも後に彼が大学教官になってジレンマを生ずることになる。

1965年4月1日辞令交付式に向かう。その年度神戸市に採用された幼稚園から高校まですべての新教員の総代として寛が誓いの言葉を述べる。式後連れて行かれたのが先日音楽室が燃えた丸山中学校である。今でこそ落ちぶれて新聞紙上を騒がせることも無くなったが、当時は全国紙を賑わした超問題校であった。全校生2500人のマンモス校で、3分の1は同和地区の生徒である。全職員90名職員室が二つという学校でもある。「荒れる中学校」という言葉は京都が発祥の地であるが、最初に荒れたのが音楽の授業である。この丸山中学も先日音楽室に火が付けられ急遽真^{まこと}新しいピアノが届いていた。3人の音楽担当の一人として1年生を受け持つ。又同時に1年3組の学級担任も仰せつかる。43人の生徒達の後ろには43軒の家庭があり何千人の地域連帯がある。その緊張感に身を引き締めながら寛は新任教師として一步を踏み出す。

学級新聞を出そう。生徒の胸に付ける名札を彫ってやろう。ブラスバンドの指導もしよう。生徒達の眼はキラキラと輝き、世間が勝手に付けた問題校や経営困難校というラベルとは無関係なものであった。その子が家や地域で



楽器に化けたガラス



呼ばれている愛称で呼んでやろう。新米教師は生徒を愛する前に自分が愛されるようにしようと一生懸命であった。

土曜日の午後運動場でアコーディオンを担いでフォークダンスをクラスに指導している熱血教師の姿があった。同僚の無関心な眼を感じながら彼は一生懸命だった。方眼ヤスリ以外の美術ヤスリなども買いそろえて遅くまでガリガリと学級新聞の原稿を書いていたのも彼であった。

一方では校務分掌で割り当てられた「ガラス係」というもう一つの仕事が毎日彼を待っていた。平均して10枚くらい毎日ガラスが割られる。ガラス屋さんは月に2度くらいしか来てくれない。一階から順番にガラスを入れて四階まで入れ終わるのは殆どの生徒が居なくなる時間である。それでも一階まで下りてくるともう早速割られている。

寛は校長室に乗り込んだ。「校長先生。もし年間のガラス代120万円が少しでも浮かせたら差額でブラスバンドの楽器を買って下さいますか」「よっしゃよっしゃ」

その日の放課後寛は計画を実行した。わざとガラスを割る一番のワルの前でガラスを入れながら彼に提案した。「次の窓ガラス入れる前に済まんけどその割れた窓ガラス全部上手に割ってくれへんか」その方が手間が省ける



ブラスバンド部楽器贈呈式

し、彼を関係者として引き入れられることを狙ったのである。そのヒビの入った窓ガラスを割りながら彼はままと手伝いをさされてしまったわけである。勿論彼が細かく割ってきれいに後始末された窓にはすぐ新しいガラスが入る。何枚かこの作業をしている間にワルの仲間が集まってきて皆で手伝い始めたのではないか。仕事が無くてガラスを運ぶのを手伝う者、パテを付けてくれる者。この日を境に故意に割られるガラスは殆ど無くなったのである。後に非常用のガラス代として40万円分を残して約束通り80万円を校長から感謝を込めて頂戴し、ブラスバンドのために新しい楽器が買いそろえられた。それを聞きつけた地域のライオンズクラブが楽器とブラスバンド部員のユニフォームを寄付してくれた。寛の周辺で荒れた学校のイメージがすこしづつ消えて行ったのである。フォークダンスは恒例となり毎週土曜日には何重もの輪ができた。学年(800名)に呼びかけてできた合唱団は100名を超えた。遂にその年の秋学年だけの音楽祭を体育館で行って職員バンドや職員コーラスも参加した。例年卒業式には出動するパトカーも来ず、生徒指導の先生は暇そうにタバコを吸っていた。

寛はよく生徒にこう言っていた。「俺にとってこの学校はいくつかこれから行く学校の一つに過ぎん。しかし、お前達にとってこの学校はただ一つの中学校なんや。卒業してから小さな声で丸山中学の卒業ですと言わんならん

結婚・豪邸での 酒とバラの日々

(1966年)



ような学校にしても俺には何の関係も無いけれどお前たちは肩身が狭いんじゃないか？」

そこには自分が愛される教師になろうという姿はなかった。生徒が愛さねばならないものを共に愛するという姿勢であった。寛の教えに従った1年3組の中の男女7人の仲良しは卒業してからも毎年1の3つまり1月3日に彼の家を訪ねお盆休みも含めて年二回は未だに家族のように集まっている。先日は彼らの娘の一人の結婚式に富士市まで招待されて行った。

さて慶子さんはどうなったのか。寛が勤めて二年目、五年の交際の末晴れて国松慶子から鈴木慶子となった。一九六六年のことである。結婚前に運転免許を取ることを条件に設定された結婚式は五月八日の母の日であった。結婚式には丸山中学の生徒がたくさん駆けつけて祝福してくれたことは言うまでもない。その頃は寛が腎臓結石の手術を受けた万国病院が海星病院として移転していたためその建物を改装した六甲会館の屋根裏部屋でささやかな手作りの披露パーティーが催された。

仲人は勿論彼が最も尊敬する倉沢豊治師で、司式はクノール神父である。披露宴のための飲み物は前日彼が自分で屋根裏まで運び、司会は幼なじみで先輩の藤井次郎氏にしてもらい、いっぱい落書きをして空き缶をぶら下げた

転居・手作り新居



空き缶をぶら下げた
セドリック

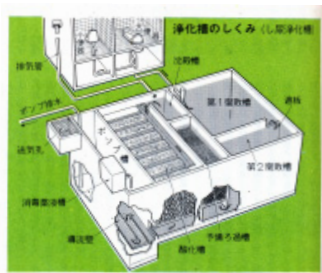
愛車セドリックを運転してくれたのは親友北野完一君であった。新居は新日本山下汽船の柏尾会長の別宅に留守番として入居。茶室まである豪邸での新婚生活が始まった。アサヒ・スタイナー以来のビール修行はこの頃にはサッポロ・ジャイアンツにまで成長していて、新居の掘りごたつは熱燗^{あつくあん}の誘惑にも手を貸した。

祥龍寺という禅寺に隣接するこの豪邸で寛は生まれて初めて除夜の鐘を聞く。それまでの彼は毎日午後10時には世の中の人はずべて寝ていると信じて彼も寝ていたからである。

余談ではあるが、この家は当時丸山中学の熱血教師の秘密の集会所^{アジト}でもあった。部落解放同盟や関係者の目が光る学校周辺では仲間同士の立ち話もできない状態であったため、校門前でこれ見よがしに「さようなら」と別れたあと三々五々篠原北町の新居に集まって作戦会議を行ったのである。丸山中学が荒れた最大の原因は生徒や家庭環境の問題ではなく、解放同盟とそれを悪用する手先が学校を闘争の場にしたことが原因である事を彼らは直感的に知っていた。彼らはこうして見事なチームワークで丸山中学を立ち直らせたのである。

豪邸での新婚生活は一年で終わり、父親のアトリエを改造した十四坪の新

自宅全壊と長女誕生 (1967年)



居に翌年転居した。住宅金融公庫から全額借りて建てた新居は学生時代にバイトで買ったグラランドピアノの部屋と六畳の居間という設計であったが、予算の関係で風呂を諦めるか、水洗便所を諦めるかという状況であった。そこで寛は両方とも実現するため毎日帰宅してから裸電球一個のもとで庭に大きな穴を掘り、鉄筋を組み、コンクリートを打って浄化槽を自分で作ってしまったのである。百科事典で浄化槽の構造を研究したものであったが保健所の検査にも立派に合格した。このとき重いセメント袋を一度に二袋も持ち上げようとしてぎっくり腰でセメント袋を抱いたまま気絶した後遺症は現在では座骨神経痛という持病に育ってしまった。しかし、お陰で風呂と水洗便所は両立したのである。

この新居は僅か二ヶ月後「42年梅雨前線豪雨」のため裏山が崩れ芝居のセットのように南向け一部を残して全壊し家の中から空が見えた。しかもその翌日慶子夫人の出産予定日を控えた七月九日の事であった。神戸でも山沿いの家屋は多くが壊れ、市ヶ原では死者も多数出て自衛隊が救助に当たった。阪急は三宮―六甲間が不通となった。そんな中病院までの道も大きく迂回せざるを得ない状態で身重の慶子夫人は入院した。寝るところのない寛も停電の病院の陣痛室で一晩泊めて貰う。翌日皮肉にも被害がなく繋がって

さいお
 塞翁が馬


これは室内の写真である
 右は難を逃れたピアノ

た電話で長女の誕生を知る。その頃彼は知人のツテでトラックを借りて東部土木事務所からエンジン付きのベルトコンベアを二台借りてきて土砂の撤去作業を一人で開始していた。何とか母子が退院してくる前に住める部屋を確保するためであった。

ベルトコンベアを家の中から二本繋いで外に停めたトラックに土砂を積み、そのトラックを運転して土砂を処分したらまた戻ってきて土砂を出すという作業の繰り返しであったが、電車不通のため三宮からは徒歩で丸山中学の例の男女七人がスコップを担いで手伝いに来てくれた。この時期は短縮授業の期間だったから今は故人となった川村式典先生も毎日のように午後手伝いに来てくれた。大工にも無理を言い、何とか10日で一部屋だけ修復し、体温計をこっそり擦^{こす}って原因不明の熱で産後の入院期間を延長した慶子さんと新生児綾さんが帰宅した。柱の数も多く頑丈に作ってあった風呂とトイレは使用できたため何とか生活には困らなかった。グランドピアノは戸板に押されて玄関脇まで動いていた。奇跡的に無傷で今も健在である。住宅金融公庫で建てた家はその家の価値以上の保険に入らなければならなかったが、たった二回その掛け金七千円を払っただけで全額保険金が入ってきたので家は前より立派に建て直すことができた。人間万事塞翁が馬という彼の哲学はこの時一層確かなものになった。

学級会

南京錠のピアノ

火事で燃えて新しく来たピアノの蓋には嚴重な南京錠が左右に取り付けられていた。寛は又校長室に乗り込む。「校長先生。ピアノの南京錠を外したいと思います」「そんな事をしてまた壊されたり燃えたりしたら、君が責任を取れるのか?」「・・・はい!」

一瞬初任給二四〇〇〇円の青年教師はためらったが胸をはって答えた。「鍵のかかったピアノは拒絶の姿勢があります。管理のための教育があります。そんなもので教育はできません。もっと生徒を信じる姿勢を教師が示すべきです」こんなにうまくは言えなかったと思うが寛は校長を説得するのに成功した。生徒を信頼する姿勢に彼らは敏感に反応した。蓋の開いたピアノの鍵盤を自分のハンカチで拭く生徒もいた。あの黒鍵のエチュードである「猫踏んじやった」をどれだけうまく弾けるかを彼らは競い始めた。その後一度もそのピアノには鍵がかけられることは無かった。これをきっかけに校内至る所に掛けられていた無粋な南京錠はその数を減らして行った。拒絶のシンボルである鍵は一人でも多くの生徒を受け入れなければならぬ学校には似合わないと思っている。

クラス担任の寛はしばしば学級会のテーマを「学級遠足でいつどこへ行くか」を決めさせることに使った。決めたら守れることを議決することを

クラスは大家族

学習させるためである。この国の法律のようにいわゆるきれいな絵に描いた餅を決議したところで誰も守れなければ意味がないからである。

その結果実によく学級遠足に行った。近場の須磨離宮公園や六甲山など実に様々な所に彼らは出沒した。そして、どこでもあのアコーディオンとフォークダンスはもれなく付いてきた。

当時神戸市教育委員会からの通達で夏の行事として「海水浴」は禁じられていた。しかし、皆は連れて行って欲しいと言う。一計を案じた寛は生徒の前でこういった。「学級行事として海水浴には事故防止のため行けないのであきらめて欲しい。」「しかし、個人的に今度の日曜日私と隣の四組の水田先生とその弟さんが朝九時三〇分発の丸正汽船で淡路の浦海岸へ行く。片道三〇〇円かかるし、向こうには食堂もないので弁当を持ってゆかなければならない。」という独り言を大きな声でつぶやいたのである。

さて当日神戸港の丸正汽船乗り場には三組と四組の多くの生徒達が集まっていた。「お前達どうしたんや。保護者もなしにお前達だけで海水浴は絶対禁止やで。」「先生。保護者の代わりになってください」「そうか。水田先生。この子達だけで行かせるわけにも行かんし保護者代理になろうか?」・・・と言うわけで大家族の海水浴は挙行された。保護者の資格なら

書齋机を買う

何人連れて行こうと大家族である。無事故ではあったが、帰りの船が神戸港に着くと朝は来なかった大勢の親が出迎えに来て口々に「先生ありがとうございました!」「いゃー。たまたま一緒に নিয়ে আসতে」親も子も一緒にの八百長行事であった。

いじめや生徒指導、カウンセリング、癒しなどのキーワードは一切存在しない実践優先の理屈嫌いの青年教師であったが、日曜日には決まって校区の中を通るドライブに出かけていた。髪の毛がボウボウの生徒には散髪して来いと言うより手っ取り早くバリカン片手の実力行使があった。大学では読めとも言われず紹介もされなかった音楽教育に関する本をむさぼり読んだ。勉強机というものを持たずに来た二〇数年間と決別し書齋机を生まれて初めて買った。前進ギアとアクセルしか無いような寛のハンドルとブレーキを受け持ってくれたのは多くの仲間の教師と先輩教師それと慶子夫人であった。チョークの持ち方や板書の仕方、試験問題の作り方など本来大学で勉強しているはずのことはすべて先輩教師から学んだ。

そんな寛も勤めて三日目に「辞めたい」。三月目に「もう辞めたい」。三年目に「転勤したい!」と言っていた。教師業が嫌なのではなく、生徒が嫌いなわけでもなく、組合活動や色の付いた教師集団との対立に嫌気がさしたの

雲雀丘中学開校 (1968年)



である。日教組全盛時代である。朝日新聞も嫌いで神戸新聞に変えた。イデオロギーを教育現場に持ち込む奴らに対する怒りで熱くなっていたのである。事実多くの問題生徒はイデオロギー教育に熱心な教師のクラスから発生した。その反動で一層彼は自分の学年やクラスを必死になって面倒を見ていたのかも知れない。

丸山中学のマンモス化解消のため丸山北部山麓の雲雀丘地区に分校ができることになった。丸山中四年目の春、新一年生の内分校校区に居住する生徒二一七名を引率して彼は分校に赴任した。荒木分校主事の下9人の教員と事務員、養護教諭は隣接の雲雀丘小学校の教諭が兼務した。真っ新の安普請校舎の講堂はまだ未完成だったので音楽室が集会所として使われた。丸山中の轍を踏むなを合い言葉に一期生は実によく頑張った。まだ自分は本校在籍なので本校に残った一年生のために授業に通ったがその時の車があの二万円のものである。遂に翌年雲雀丘中学として分校は独立し荒木校長の下二学年を抱える10クラスの学校となった。この年彼は音楽の他に無免許で美術も教える事になる。音楽の授業で聴いた曲のレコードジャケットを描こう等という安易な授業だったらしい。これは彼の父親が画家であったため、校長室に飾る絵を寄付したり、校内写生大会で回りに人垣ができるほど上手に絵を描



音楽室から見える丸山大橋を
彼がクレパスで描いた

神戸市立雲雀丘中学校 校歌

作詞・作曲 鈴木 寛

と ぼ り が お が に ひ は - は え て
 と せ の り ひ こ こ に あ
 み た り の に せ - も き わ や か に
 が り け り け り と こ り
 お お くる ひろが ら ゑ ゆ う あ い の
 の - びる り が ら ゑ ず こ か に
 き すぐ らい かいの - くの て き り ん て
 づ ぐ らい かいの - くの て き り ん て
 つ く らい われ ら の 無 な - び や は
 り も た か - せ ば り が お か ち が く
 な も た か - せ ば り が お か ち が く

一、雲雀丘に陽は映えて
 みどりの風もさわやかに
 おどろくひろがる友愛の
 きずなもかたく心をくんで
 創るわれらの学舎は
 ほこりも高き雲雀丘中学
 二、三年の月日ここに在り
 たかみにみかく身と心
 伸びる力も健全に
 はぐくむ生命のかきりこめて
 つくすわれらの学舎は
 その名も高き雲雀丘中学

いた実績を認められたかららしい。
 新設校の校訓は確か「友愛」と何かあと一つだったような気がするが校歌
 にはそのキーワードを入れて寛が作詞・作曲をした。



地域の丸山文化防犯協会の今井仙三氏から依頼されて丸山教育キャンプ村の歌も作詞作曲したがどこか鉄腕アトムに似ているという評判であった。

丸山教育キャンプ村のうた 作詞(作曲) 鈴木 寛

1. みどりのーがぜーが おひさま かに
2. やーまのーみどりに ニた まし て
3. たーはわーはま けり おひさま かに
4. みずくおーきき わり じ かん た ち
5. お だちにーほしーの タン デリ ア
(Bb) (Dm) (Gm) (C#) (F#) (Bb)

そ っ と ほ ほ え る お か の ろ ん
つ ど う わ れ ら の た た - ん る が
や ま の ち こ う の お - い そ う
あ り と ひ かり た ま - の あ る
さ え ろ お さ え ろ ひ の - に あ げ

さ ょ う の た の し い - い ち に ち - ぎ
お - き く ひ ろ かり あ お を ら - に
さ ょ う の た の し い - お ま い ま - ぎ
み ん な で - つ く る こ の ち ね - ん
さ ょ う の た の し い - い ち に ち - の

ほ くら の え だ お だ だ ち け な い か
し - る い わ た ぐ ち - ぎ - れ ぐ も
ほ くら の か と み ら う ち ぎ ぎ な い け
く - る い お ち が ち ら い しい け な い け
ギ ャ - ン プ ガ イ ヤ の あ - る ほ っ す け る

ま る や ま の ま る や ま の さ ょ う い く キ ャ ン プ 村 ら



この時期は生徒指導や対組合活動から解放され生き生きと音楽教師をし始めた時期でもある。クラブ活動は新聞部とコーラス部の顧問であった。毎週発行を目指した新聞部のために和文タイプライターを自費で提供して活版の学校新聞を発行した。コーラス部は混声三部の編成で五段階で言えば一か二のレベルではあったがコンクールにも参加した。この時の生徒の一人に現在兵庫教育大学教授の河相善雄先生が居る。

この時期の寛は「趣味の家庭訪問」を繰り返して保護者を悩ませた。親から見捨てられた生徒をこっそり自宅に連れ帰り、いっこうに探そうともしない親を怒鳴りつけたり、何日たつても上着のボタンが取れたままの生徒の家に乗り込み「あんたの家はハウスはあるがホームが無い!」と叱りつける有様。マニュアルに無い様々な暴れん坊ぶりであったがいつも荒木校長が後始末してくれた。20代後半の彼は未だ体重は60キロ前半だったのでフットワークも軽かったのかも知れない。

六甲学院から芦屋高校へ転出されていた恩師倉沢先生は、この年さらに新設の川西緑台高校の教頭で転出され、新しい高校の音楽教師にどうかと寛を誘う。しかし、現に新設校でドブプリと教師魂にはまっていた彼はこの申し出を断る。

役所に預けてドンと増やす



黙って歩きなさい

新設校にはブラスバンドの楽器としてユーフォニウムとティムパニーが何故か市から配給された。その後もパラパラとトランペットやシロホンという具合に配給される。だからといってブラスバンド部ができるほど揃うには何年かかるかも予想できない。そこで寛はまた校長室に乗り込んだ。「ご好意は有り難いのですが、楽器の配給をお断りします。車を買うのに今年はタイヤ、来年はエンジンというような買い方はしなないと思います。ドンとまとめて揃うまで役所に預けておきます。」校長がこの通り馬鹿正直に役所に伝えてくれたおかげで配給はピタツと止まったが、三年後にフルバンドの楽器が到着した。普通ならそれだけそろえるには10年以上かかるものである。

このナイナイ尽くしの新設校でもアコーディオンだけはバッチリ確保され土曜日の放課後には隣接の小学生も引き入れてフォークダンスの輪を作った。家庭で死蔵されているギターの提供を父兄に求めスチールギターやハワイアンギターまでも含めてたくさんさんのギターを使った授業にも取り組んだ。二人羽織方式と名付けたこのギターの授業は大好評でその後彼の研究活動の基礎になるものであった。

森、庄田、家島、平田、青木、山本のユニークな同僚先輩の先生から彼は多くの事を学んだ。大阪万博（一九七〇年）に引率した時の事である。いく

大型免許取得 (1971年)

ら注意してもすぐに列が乱れ道いっぱいに広がってしまう。並んで歩きなさいとか二列にならなさいとかいくら注意しても無意味であった。そんな時庄田先生の「黙って歩きなさい」の一言で行列はみごと整然たるものになったのである。結果の行動に悩む前に行動の原因を考えるとという大学の講義では一度も聞いたことも無い話に彼は目から鱗がおちる。この庄田氏は後に郷里の家島の中学の校長で退職されるが、彼には多くの教師学を学んだ。調査書を学校に残って徹夜で書いている時それとなく交わした音楽談義にも造詣が深く感服したものである。明け方職員室の窓を外からトントんと叩く音がするので窓を開けると風呂敷に包んだ鍋に暖かい味噌汁とおにぎりが添えられたものを「先生ご苦労様」と言って差し出す生徒の姿。最近ついぞ聞かない「ご苦労さま」に支えられてつい内申点が甘くなることもなく楽しい日々であった。

三年生の受験もたけなわ酣の頃。「明日の試験頑張つてこい」と生徒を励ます。「先生は好いよな。試験がないもん」この一言に愕然とした寛は「よし。俺も試験を受ける」といつて受けたのが大型一種運転免許。明石まで受けに行き見事八〇〇円で取ってきた。それを見せながら「さあ俺も試験に受かった。お前達も頑張ればこの免許を使ってバスでクラス旅行に連れて行ってやる」



国家公務員となる

(1971年)

クラス全員とはゆかなかったが卒業旅行は敢行され蒜山高原一泊旅行のバス運転手はその後もこの免許を生徒のために使う。

そんな学年末のある日荒木校長に呼び出され「鈴木君。神戸大学附属明石中学から君に来て欲しいと言われている。行くか？」と打診される。唐突な話で吃驚するが、人事と縁談は請われて行くのが一番という先輩の言葉を思い出し、行きますと即答する。思えばこの時断っていたら彼は全然違う人生を歩んだであろう。

★

★

★

丸山中、雲雀丘中の合わせて六年間を神戸市の教職員として過ごした寛は昭和46年（一九七一年）明石にある神戸大学教育学部附属明石中学に赴任する。自分は文部教官教諭であるが早い話給料がガクンと下がる。神戸市ではやっと一〇万円に手が届いたのが何も悪いことをした覚えも無いのに六万円台に下がったのである。これは今ではかなり緩和されたがラスパイレース指数の違いでそうなる。

配属された学年は25回生の一年D組である。C組で相棒の熊野先生と二年二組半分の24名を預かる。面白い分け方だと思ったが人なつっこい四十八の瞳に身が引き締まる。上級学年の24、23回生は随分大人に見えた。この年兵庫県は高校の総合選抜を開始し、23回生にいた当時の県教育長のご息女が残

班分けは教師の仕事

統合コース

念ながら犠牲者になる。その後今日に至るまで附属校は内申点重視のこの兵庫方式に泣かされることになるがそれでも父兄は明石附属に入れたがる。教官と呼ばれる教諭は職員室ではなく教官室に学年ごとの机を持ち、さらに教科ごとの準備室を研究室として利用させてもらっていた。

広い研究室を与えられ、いきなりその年から開始された「統合コース」という研究プロジェクトに参加する。後に学年の枠も超えたものになったが当初は新一年生だけを対象にプロジェクトは実施された。今日的な総合の時間によく似ているが、学級や教科の枠を超えたテーマを設定しそこに生徒が集まるというものだった。合科でもなく総合でもないこの統合コースは目標に向けて持てる教科能力をインテグレートするという哲学で、一人の生徒に複数の教官が関わる。ゆとり教育ではなく学力の基になる「学ぶ力」に焦点を当てたこの明石プランは後に「探求」と名前を変えたが全国から参観者があった。このコースでは本物のパイプオルガンに触れるため大阪の玉造の教会までバスを運転したり相変わらずの熱血教師であった寛はよく一日に36時間働くと言っていたが授業、研究、実習指導とフルパワーで働いていた。

行事は行事であって節目となるお祭りであるという佐守信男校長の意に沿って、下手に○○学習と銘打たない斬新な企画を打ち出し、形式的な今ま

発
泡
茶

での伝統をぶっ壊し、校内でできない本物の野外活動を中心にしたものに転換する。二年生になった春の遠足は対岸の岩屋海岸で飯ごう炊さん。夏は蒜山高原のキャンプ。秋は明日香のサイクリング一泊旅行。この明日香サイクリング旅行はその後各旅行社が企画をパクって現在は一般の修学旅行の定番となってしまうた。このような班行動を伴う場合にやっかいなのはグループ分けであるが、寛はこのグループ分け、いわば人事に一切の民主主義を排除した。よく仲良しばかりがグループを作って、はみ出した生徒をその中に無理矢理押し込むグループ分けを、学級会などで決める場合があるが、彼は担任が熟慮したと言うメッセージを沿えてグループピングを一方的に発表する。決められた仲間と連帯することが班分けの一つの目的であることを理解させるためである。確かに仲良しと枕を並べて寝ることはできないかも知れないが、みんなが少しづつ辛抱して満足を得る方が少数のいじめられっ子一人に辛抱を押しつける多数決の民主主義より教育的であることを実感させるためである。万一不満が残っても不満の対象は仲間ではなく、担任に向けられることで収まる。

蒜山^{ひるぜん}にキャンプに行った時の事である。昼間の登山にくたびれて夜のバーベキューではビールを一杯やりたかったが、生徒と一緒にの手前そうも行かな

さりげない行為が



いと諦めていた。「先生。冷えたお茶をどうぞ」I子たちが持ってきたヤカンから注がれたお茶からは泡が盛り上がった。グループでお金を出し合って寛のためにビールをこっそりヤカンに用意してくれていたのである。その時の泡の出るお茶のおいしかったこと。

授業中にそんなことをしたら大問題であろうが、行事という想い出作りの場面ではこんなことがあっても好いと思う。ビールを強要されて傷ついたり被害に遭う生徒でも居れば別であるが、生徒の思いつきであれ、先生がビールを飲んだと目くじらを立てるPTAママや委員会・マスコミには言葉で説明するのも面倒くさいが、教育現場ではこんなことも大切な心の触れ合いの手段でもある。そんなことが問題になるのは余程こどもや親との接点が無い、か、親から満足されていない教師の都合だけを押しつけている管理センターの学校である。

丸山中学時代の遠足で公園で弁当を食べた時の事である。教員用の弁当は業者のものが配給される。しかし、お茶までの気配りがない。

隣に座ったM子に「お茶ちょっとくれる？」と聞いた。一瞬回りの空気が凍ったように感じたが喜んで差し出す彼女のお茶を「ありがとう」といっておいしくいただいた。その次の日から寛は同和地区のすべての親から親しみ

と尊敬のこもった挨拶をされることになる。同和問題を机の上で論じ、何と言えば差別で、何をしたらいけない。等という机上の空論が今日のセクハラ定義にもよくなされるが、同和教育とはM子が同和地区のこどもであることを念頭に行えばもはや同和教育にならない事を身をもって知る。言葉狩りや形式的制限を同和学习や、ハラスメント学習に結びつけるのは大学ではうんざりするほど見てきたが、現場はもっと流動的でもっと自然で血の通った臨機応変な行動が要求されるものである。同和教育の専門家の講演会の何と綱領主義的でテンプレート的だったことか。

そもそも教育研究と教育実践は、医学で言う病理と臨床の関係であり、互いに密接な関係で有りながら不可侵の関係でもある。病理が縦系なら臨床は横系である。両者のバランスは織り上がりの結果を左右する。それまで横系だけであった寛の実践に研究という縦系が加わろうしている。横系の教師は客商売である。縦系の教師は経営者である。営業理念のない商売は潰れるし、接客技術の無い商売も潰れる。営業理念と接客技術の調和こそが理想の客商売である。

寛が静岡大学の附属浜松中学の研究発表会に行ったとき、来賓がこんな挨拶をした。

農学栄えて農業滅ぶ

生涯幸せであることを 願って

曰く「農学栄えて農業滅ぶという言葉がありますが、今日の研究発表会ではどちらを見せていただけるのでしょうか」

来賓の挨拶である。余程附属の研究に批判的な来賓だったのだろうが、彼はこの挨拶を聞いて慄然とする。

後に寛は学部長（教育学専門）に対して面と向かってこう言う。「私は長らく教育という仕事をしてきましたが、一つの結論を得ました。それは、およそ人間を対象とした学問で『学』と言える科学的なものは医学くらいのもので、教育学と雖も所詮『教育論』か『教育術』にしか過ぎないと思うのですが・・」。『学で有る以上一定の原理と法則に基づき条件の変化や対象の違いに対して客観的で一定の結果が常に得られなければならないのに、夫婦関係一つ取ってみても一定の原理や法則による行動予測は不可能なように、教育というもつと広範で複雑な人間関係や価値観を科学的に説明できるまで『教育学』なんてのは所詮あいつはこう言った程度の事じゃないんですか？」

相好を崩して学部長が膝を打ってこういった。「そうなんだよ。だからいつか『学』にしようと頑張っているのが教育学研究なんだ。」

励みになったようなならなかったような学者の答えであった。もし育児学が絶対的な学問でスポック博士の言う通り育てなければろくな人間に育たな

いのならばスポック博士以前の人間は全部失敗作と言うことになる。

やたらと健康の定義を狭くし、病名をたくさん作り病院の専門分野を細分化し病人を増やしてきた今の医学の二の舞を教育学は目指しているのか？ ○児、○○症候群・・・LD・・・確かに教育学は分類項目の細分化には成功した。しかし、「健康」の定義が医学でも曖昧なように、分類項目に当てはまらないこどもは教育学の対象ではないのか？

昔は「生涯働ける」ことを目標にしていたが、今は「生涯学び続ける」事を目標としている。なぜ「生涯幸せである」ことを直接目標としないのか。働けなくなっても、呆けても幸せであることを教育することが教育学の目標だと思ふのだが。

そんな疑問が日夜寛を悩ませる。

大学に行けば研究が深まり良い教師になれると信じた自分の愚かさを知り、ガムシヤラな行動と熱意さえあれば立派な教師になれると信じた自分に気がつく。

音楽を好きにさせる

入学してきた新一年生に常に寛はこう言う。

「これから三年間諸君の音楽の授業を受け持つ鈴木寛です。三年後に楽譜が読めるようになる、楽器が弾けるようになるという保証はできません。しか

し、音楽がもつと好きになる事を約束します。」

そして多くの生徒がこの約束が果たされたことを実感するように授業は展開される。

この国では小学校の低学年で一番人気があるのが音楽の授業なのに、専科教員が受け持つ高学年では一番人気が無いのが音楽であるという実態を踏まえて彼はこう言うのである。

およそ192ある国連加盟国の中で、音楽を義務教育における必修教科としている国は約一割である。音楽教育が人間形成に必要な不可欠なものならば、残り九割の国民は人間形成に失敗した無茶苦茶な国民や国と言う事になる。その中にはアメリカやフランス等の先進国が含まれる。確かにブッシュ大統領やアメリカ人は人間としておかしいと思うなら別であるが、音楽教育の有無でそれ程国際的な、或いは人種的な差違は見られない。寧ろ音楽教育を学校以外の社会が行っているフランスやイタリアの方が音楽的にも素晴らしいような気もする。彼は音楽教育が義務教育に必要であるという前提にも疑問を持つ。また、音楽の授業時間削減反対運動にも敢えて署名をしなかった。日本の音楽教育はフルオプシオンであり、戦前は「唱歌」しか無かったのに戦後は領域を拡大し最も肥大化した教科の一つである。

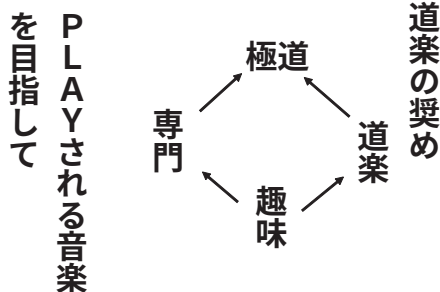
それでどうなる？

附属中学に来て彼はこれらの疑問や課題に初めて直面する。しかし、9年間も音楽の授業を受けて楽譜の一つも読めなく良いのだろうか？歌の一つも歌えなくて良いのだろうか？

学習指導要領の目標は「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。」とある。

「育てる」「豊かにする」「伸ばす」「養う」、小学校では「培う」を加えるが、音楽以外の教科に見られる「高める」「深める」「親しむ」「知る」「習得する」は見あたらない。まして「広げる」という表現はどの教科の目標にも無い。音楽の基礎的な能力という定義がこの国を支配している人々をみてもどの程度の能力かもわからない。音楽の能力に優れた国の指導者はノルウェーのグリークとスペインのシャブリエ以外にはあまり知らない。

音楽は音学ではないというのは彼の持論である。古来中国大学経に示された**六芸**「**礼**（礼記）・**楽**（音楽）・**射**（弓術）・**御**（馬術）・**書**（書法）・**数**（科学）」で孔子が示した身分の有る者の基本教養の前から二番に必要とされたのが音楽である。ギリシャ哲学における「真・善・美」とは異なる分類であり、あくまでも「芸」であり「修身」である。というのは理解できるが、中学校の音楽科の目標とはし難い。

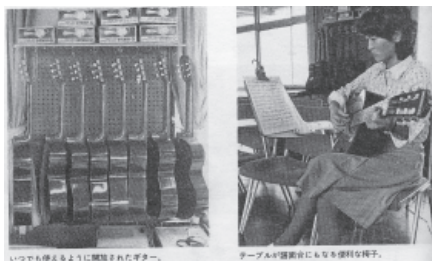


又一部の教師は自分が音楽が好きなのでその道を選び、趣味と実益を兼ねた日々の授業をする。望ましい音楽教師は己の趣味ではなく、生徒の能力形成のために授業をするのであり、お金が好きだから銀行員になるようなことでは困るのである。

寛の語録にこんな言葉がある。「音楽に対する接し方に次の四つの段階が有ると思うのです。①趣味、その先は二つに分かれて②専門か③道楽。そしてその先は④極道ですが、私は極道を目指しません」多くの音楽教師が①の趣味の段階で自らの欲求を満たし、多くの演奏家が②の専門性を重視する。音楽は専門家のためにあるのでは無く、一般人のために存在するわけだから、寛は利害や名誉に拘らない③の道楽の道を奨めるが、ベートーベンのような道を究めるためには家庭をも顧みない④鬼の道である極道を目指すことになる。

そこで寛が研究テーマに選んだのが「PLAYされる音楽」であった。音楽の表現にパフォームという動詞とプレイという動詞が有ることに拘り、パフォームは見せる、聞かせるための対象者を意識した行為であるのに対して、プレイの方は自己実現のための対象者は自分である行為であると定義づけ、日本の音楽教育は結果としてのパフォーマン스에こだわらず、プロセスの

幻の36本のギター



プレイという行為がなおざりにされているという仮説を立てた。まさしく道楽的発想である。多くの黒人ジャズ奏者が楽譜も読めないのに即興的に演奏できるプロセスを教育の中に組み込みたいというのが目標である。オルフやコダーイのシステムに同じ目標を見つけた人も多いが、現代音楽的なものではなく、オーソドックスな音楽での展開を目指した彼とは異なる。「創造的」という言葉はこの頃から教育研究のはやりであったが、最近聞かなくなった「創造的音楽学習」や「つくって表現する」とは違う研究が開始された。

最初の研究論文は「楽譜に縛られない音楽活動」であった。読譜を語学教育に置き換えると「読み・書き」であるが、「聞く・話す」に重点を置く。今の英語教育のように耳から入る音楽教育システムをギターを使ったシステムで考案する。このギターであるが当時の設備基準では48人学級では最大12本と決められていたが予算に制限は無かった。そこで、寛は1本7800円のギターを48本購入するが、設備台帳の上では31200円のギターが12本あるように記載し、監査があれば残り36本のギターを隠す覚悟で全員にギターが行き渡るようにした。この48本のギターは教室の周囲にカーテンレールでつり下げられ常にチューニングが正しく保てるように工夫された。彼は1本のギターのチューニングを10秒でやってしまう特技をこの時身につけた。しかし、48人全員がギターを構えると足踏みデスクオルガンの入った音楽教室は



アイデアの泉

かなり狭くなる。このデスクオルガンは既に風袋を動かすベルトが切れていたり、鳴らない音があったりで満足に稼働していなかったし、机の代わりになるオルガンは、机の要らない授業では無用のものであった。そこで、寛はすべての使えるオルガンを普通教室に配置換えし、残りを廃棄処分した。代わりに彼が導入したのは右側に跳ね上げ式の小テーブルのついた椅子であった。このテーブルを跳ね上げて裏にクリップで楽譜を留めると譜面台にもなるし、ギターを構えるのに邪魔にもならないアイデアは大成功であった。

しかし、まだ問題はあった。48人全員がギターを鳴らすと大騒音となりあの繊細な響きはかき消されたしまう。そこで彼は個々のギターにコンタクトマイクを取り付けミキサーでミックスされた音をヘッドホンで聴くと言うギターMLを考案する。通常の鍵盤楽器を使ったML装置なら数百万円もかかるものがこれなら60万円の予算で完成する。6人が一組のこのギターによる閉回路システムは八台のキッチンワゴンで構成され、ワゴンのテーブルにはレコードとカセットが聴ける装置を置きその下の段にはミキサーとヘッドホンブランチヤーと六人分のヘッドホンが入った箱があり、キャスターで移動できるものであった。この装置は画期的な効果をもたらし、他人の音に煩わわづらされない良好な音楽環境を生徒に提供した。



全附連での発表 (1973年)

昼休みにはこのギターは全部出払ってしまいう人気で、放課後やちょっとした時間にも生徒達は好んでギターを弾いていた。折しもPPM（ピータ・ポール＆マリ）のフォークブームとも重なりギターは生徒間で大ブームとなった。特にピアノなどを習う機会の少なかった男子生徒は好んでギターを弾き、上達も早かった。

2年生になると1年かけて「禁じられた遊び」を弾けるように自主練習をさせた。一年間というノルマで最後はカセットテープで提出というものであったが全員弾けるようになった。ギターは何故か第5弦の第2フレットでよく切れる。そんな弦の切れたギターを放置しておくで連鎖反応で次々と傷む。彼は毎朝すべてのギターをチェックし切れた弦を張り替えた。「壊れたものをそのままにすると連鎖反応が起こる」という彼の経験がそうさせたのである。

この装置についての研究発表は全附連（全国附属学校連盟）音楽部会の発表会や研究紀要で全国に紹介された。この全附連こそ彼の研究の発表の場であると同時に勉強の場であった。多くの仲間がその後大学教官となって再会するが、彼らとの出会いが無ければ彼の研究は誰からも理解されないものになっっていたかも知れない。



このギターMLは閉回路であるからギター以外の楽器でもマイクやライン入力でアンサンブルが可能であった。丁度その頃姫路モノレールの社長からエレクトーンの寄贈を受け、その出力を加えることで持続音の苦手なギターアンサンブルに大きな味方となった。これはさらにシンセサイザーへと進化するのである。

ローランドのSH1000というモデルのシンセサイザーを寛が眼にしたのが一九七三年だったが、神戸の楽器店で初めて紹介されたその楽器は見かけは電子オルガンのもようであった。フルートとかトランペットという名前のタブレットが並んだその楽器は寛には難なく弾けそうなものだった。だが電源を入れ格闘すること10分以上ウンともスンとも言わない。焦った。そして遂に「ピー」と鳴るには鳴ったが止まらない。怪訝そうに周りに寄ってくる他のお客。電源コンセントを抜いてやっと鳴りやんだ。担当社員の津野啓三氏がニヤリと笑いながら「音が出たのは先生が初めてですよ。一週間ほど学校で触ってみませんか」

エレクトーン講師の資格もある寛のプライドはかなり傷ついたようであるが、翌日研究室にシンセサイザーは届けられた。説明書も何もないこの電子楽器はちょっとした設定の調節でどんな楽器の音も出る。彼は興奮して夢中



意見が合わないこともあったが、良き理解者であり、素晴らしい上司であった中島副校長。

ミニミニコンサート

で研究した。そして遂に中島幸男副校長の部屋にゆく。「シンセサイザーを買って下さい」附属の研究の中心的存在であり何でも知っている知恵袋でもあった中島師はこの時シンセサイザーという聞き慣れないものを何か薬の名前か小さな装置の部品だろうと思ったらしいが、シンセサイザーって何だ？とも聞き返せずうっかり「よろしい」と言ってしまった。和音の出せない単音楽器だったので三台購入した。ギターのMLの実績もあったので買ってもらえたが、着任以来ブラスバンドには一銭もお金をかけず、クラリネットに至っては附属の前身である明石女子師範学校時代のアルバート式という代物で楽器を総替える必要に迫られていたが、寛は課外活動のためにかけるお金を全校生の音楽教育のために使う決意であったので可哀相ではあったが泣いて馬謖^{ばじく}を斬った。

寛は「ミニミニ・コンサート」というユニークな企画を音楽の授業の最初に置いて生徒の評判が良かった。音楽の教科系の生徒がマネージして年間50回ほどある授業の頭の5分間で個人やグループで演奏やその他を発表するというもので、ピアノの発表会が近いから度胸試しにピアノを弾く生徒や、最近気に入っているレコードを紹介する生徒、全員を立たせて合唱の指揮をする生徒。そのような教師の助言や介入のない（従って評価の対象としない）コンサートは半年先まで予約が入る人気であったがギターアンサンブル以外

世界初の電子オーケストラ (1974年)



にシンセサイザーを加えたアンサンブルがだんだん増え、遂にシンセサイザーとエレクトーンという電子アンサンブルまで登場した。ギターアンサンブルがシンセアンサンブルに変わるきっかけとなった。附属幼稚園の遊戯室を借り切ってミニミニ・コンサートの総集編のような音楽会も恒例行事とした。

初めてこの電子アンサンブルが発表されたのは明石市の連合音楽会である。三台のシンセと電子ピアノ、電子リズム楽器を加えてたった5人の生徒が演奏したのは、コダーイのハリーヤードノシュから「ウィーン音楽時計」とヘンリーマンシーニの「ひまわり」であった。

ブラスバンドで出演する他校に対して、辛島、山下、井ノ口、井上、加地の5生徒による世界初の電子オーケストラの発表であった。後に「電子音楽部」というクラブに昇格し、ブラスバンド部は消滅した。この消滅したブラスバンド部に対して寛は今でも心が痛むが、その頃の彼はアンチコンクール派の急先鋒で、授業をなおざりにして部活の指導にうつつを抜かす教師に批判的であった。自分がそうになってしまいうつで避けていたのかも知れないが、意地でも潰さないと涙で頑張った生徒がいたことを思い出すと心が痛む。

ムーグ博士に会いたい

日頃から仕事は家庭に持ち込まない主義の寛であったが、ある日慶子夫人に不審がられる。

「あなた、何か心配事でもあるの？」

「えっ！ 別に・・・」

「でも、さつきからずっと何も言わずに考えてる」

「・・・実はシンセサイザーのことを考えてたんやけど。どうしてもわからない事がある」

「どうしたらわかるの？」

「そら、アメリカへ行ってムーグ博士に会わんとわからん」

「図書館ではあかんの？」

「日本語でも英語でも図書館にはない」

「そしたら、行ってきたら」

1ドルが360円で航空運賃だけでも往復40万円。手元の貯金はあと35万円足りない。何も食わずに、ホテルにも泊まらなくての話である。しかし、又「塞翁が馬」がそそのかす。

翌日増田先生の紹介で富士海外旅行社の小川さんと会う。その日の内に話がまとまり日程が決まった。

家に帰って慶子夫人に「決めてきた！」と話すと、彼女が差し出すものが

生まれて初めて海外へ

(1975年)



ニューヨーク

ある。Electronic Music(Elliott Schwarz) と言う本で、彼女が大阪のアメリカ文化センターで借りて来てくれたものであった。その時初めてシンセサイザーの綴りがSynthesizer であることを知った。

飛行機と言えばあの百貨店の屋上にあったクルクル廻るやつさえも乗ったことのない寛が生まれて初めて羽田から海外に発ったのは75年3月25日(木)の19:15発のエアーサイアム(タイ航空) ホノルル行きであった。添乗員も友人も居ない機内で最初に気がついたのは辞書や会話集の入ったスーツケースは貨物室にあるということと機内では一切の日本語が通じないと言ったことだった。不安は的中し、最初の機内食はメニューを見ただけではイメージできないものばかりであった。さりげなく周囲を見渡して食えそうなものを食べている客を指差し「Same one please」とスチュワードに注文する。夜出て同じ日の朝7:05 ホノルルに着き、9:00にはロスに向けて国内便に乗り換える。アメリカンエアーラインのシャンペン飲み放題でふらつく足どりで16:04ロスに降りる。さらに21:30には深夜便に乗り換え翌朝6:00にニューヨークJFK空港に到着。朝新幹線で家を出てから乗り換えばかりでやっと生まれて初めての海外旅行は最初の目的地ニューヨークに着く。早朝にも拘わらず出迎えて下さったのは、その数ヶ月前転勤でニューヨークに



やってきた附中生の熊巳典子くまみ（現竹内綾野）さんのお父さんであった。郊外のラッチモントのご自宅まで送っていただく。時差ぼけでしかも機内食ばかり五回も食べてもう食事は何もいらぬ状態でちよつと休ませていただく。午後には典子さんと弟君が地元の小中学校から帰ってくる。その後夕食まで彼らの案内で氷点下10度の町となり駅のママロネックまで案内して貰う。困いのない芝生の中にポツンとある彼らの学校にも連れて行って貰う。これが生涯最初の外国の学校参観である。その夜は熊巳さん宅で泊めていただき、翌日は「ヴオー！」と牛のような汽笛を鳴らして走る汽車でニューヨークのグランドセントラル駅まで、そこからラガーディア空港へ向かい、朝二時にワシントンDCに到着した。すこしづつ英語に慣れては来たがその夜ホテルで見た夢は、手術台に寝かされた彼を手術着を着た数名の医者がノコギリやトンカチを持って手術しようとする光景だった。彼らの話す英語はチンプンカンプンで自分は何処も悪くないという英語はどういえば良いのかも判らない。どんな叫び声をあげたのか知らないが自分の叫び声で目が覚める。それほど英語に対する恐怖感があったのであろう。

寛の英語歴は中学高校とアメリカ人R・フリン師（あの有名なプログレス・イン・イングリッシュの著者）に六年間英作文と文法を習ったのみであり、駅前やその他では勉強したことは無い。強いて言うなら本物の英語を常



ワシントン

に耳にしていた事ぐらいで基本単語三〇〇くらいのボキャブラリーで今アメリカに単身でいる。要するに have、get、take を基本動詞にして名詞と形容詞は身振り手振り、表情で相手の目に訴えるという体当たり英語である。

ワシントンに着いて最初にしたことはこの目に訴えることができない「電話」であった。公衆電話にコインを入れると決まって話し終わった後交換手が出てきて「お釣りはどうするか」と尋ねられるのでいつも電話機にチップをはずんでしまったが、電話に出た当時のフォード大統領の薬事関係の顧問をしていたオルセン氏が、今手が離せないで、娘のメアリーが研修で働いている議事堂に行って彼女に会うようにとのこと。それまでの時間つぶしはホワイトハウスの見物やミュージアムにでも行けばとのこと。適当に時間を潰して議事堂でメアリー・オルセンさんに会いたいというと腰に拳銃を着けたガードマンに案内されて研修生室のメアリーの所に案内してくれる。そもそものオルセン氏とは何者かというと、世界的にネットのある「フォンテス・グループ」という相互宿泊システムで世界旅行をしてきた両親が今度は日本に来たオルセン氏夫妻を泊めたことでできた関係であるが、私がオルセン氏宅でご厄介になることで貸し借り無しになる便利なシステムであり、旅行社も知らない国際的組織である。今もこのシステムがあるかどうか知らない



メアリーと友人

雪のバッファロー



いがフォントス神父が創設の組織でもある。

メアリーとそのボーイフレンドに案内されてワシントン観光をしたその夜、イースター前の聖金曜日のミサに町の高校の体育館に連れて行ってもらった。ワシントンには今も工事が続いている壮大なナショナル・カテドラルもあるがそこではなく体育館で行われるミサは説教はOHPで、聖歌は消防士の演奏するギターと高校生の女の子のフルート伴奏という、最近の日本のカトリック教会では珍しくもないものであったが、まさしく異文化であった。

翌29日はいよいよ今回の旅行の本来の目的地であるバッファローのウイリアムスビルにむけてワシントンDCを6.5hに発つ。約一時間でバッファロー空港に着き、到着ロビーには写真片手のレオ・フリン氏が初対面の彼を見つけて手を振ってくれた。このレオ・フリン氏はウイリアムスビルで税理士を営み、日本での英語教師ロバート・フリン師の弟である。

1989年にハリー・オルソンによって発明されたシンセサイザーは60年代に入ってロバート・A・ムーグ博士によって実用化され市販され始めた。日本でも富田勲氏のレコーディングで急に脚光を浴びてきた人である。そのムーグ博士に会うためには、このバッファローのウイリアムスビルまで来なければならぬ。ニューヨークでタクシーに乗ったとき運転手に何をしにアメリ



ここに泊めてもらった

カに來たのかと訊かれ、ムーグ博士に会いに來たと言ったら急ブレーキを踏んで吃驚していた。それほどアメリカでは有名人だったのである。

ところが、そのバツファローのウイリアムスビルと言うのが何処にあるのか判らない。そこでアメリカ人のロバート・フリン師に尋ねたところ、何と彼の弟がそのちっぽけな町に住んでいることが判ったのである。ホテルもないこの町でレオの家に泊めてもらえることになり、兄フリンが送った手紙に入っていたのが寛の写真だったというわけである。看護婦をしている奥さんにはすぐには会えなかったが、長女メアリーを先頭にモリーン、アンの3姉妹にマイケルという一番下のやんちゃ坊主が出迎えてくれ、三日間ではあるがホームステイが開始された。その日は近くのナイアガラの滝（カナダ側）や聖土曜日のミサなどに連れて行って貰ったが、翌日家族全員がパリッと着飾って復活祭のミサに行ってクリスマス以上の復活祭の行事に参加することができた。午後イースターの休暇中ではあったが、ムーグ博士がフリン家までわざわざ雪の中を迎えに來てくれたのには感激した。

ムーグ博士は当時48歳だったと記憶するが、残念ながら2005年8月に逝去された。その彼とのインタビューは次のようであった

《生徒の演奏（コダーイのハリー・ヤーノシュ）のテープをを聴いて》



寛「これを聴いてどう思われましたか？」

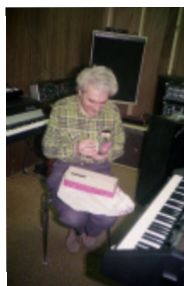
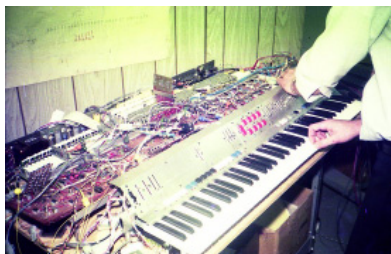
ムーグ「驚きましたねえ、誰もここまでやってませんよ」

寛「えっ？誰もですって」

ムーグ「はい。誰もです。この国でも多くの公立学校にはマイクロ・ムーグと呼ばれるローランドのようなシンセサイザーが1台か2台はあります。教師はチャンスに恵まれた生徒につきつきりてや々と伝統的楽器と共演するところまでは指導するのですが、それもごく僅かです。この国には音楽的経験というものに対してバイオリンやフルートのような伝統的な楽器の練習を熱心にしてこそ身につくものだという保守的な考え方があるように思います。私は音楽教育者ではありませんが、とにかくあなたの生徒は、フルートやリコーダーの練習をしている私たちの子供達以上に音楽的経験を身につけているように思います。私はどんな音楽も音楽だと思いますし、グループサウンズにしろそうだと思います。集団の中でも子供達は音楽的経験を味わっているでしょう、ねえ、そう思いませんか？」

寛「はいそうですね。」―以下略（研究の目的と意義を述べる）―

ムーグ「中学の大きなバンドでフルートを演奏している12才になる娘が私には居ますが、そのバンドは中学校にしてはかなり出来はよいと思うのですが、その指導教師が私に、卒業後も生徒達が楽器を手にし続けることを期



待していないと言っているのを聞いて、ショックを受けました。これでは学校の音楽教育が一体どうなっているのかと思わざるを得ません。この国では生徒達は先生を捜すのにお金や時間をかけなければならぬ状況です。あなたがやっていることは習ったことが（学校外で）生かされるということにつながっていますね。――以下略――

余談ではあるが、ムーグ博士はシンセサイザーの普及を願ってVCFとよぶものの以外は一切の特許を放棄した。その彼が普及の一つのビジョンに学校での教育的利用というのは視野になかったと告白。

一日目はそのような話やシステム55という帰国後寛が買うはめになったものを色々と説明される。パッチングシステムという電話の交換台のようなモジュールの概念が手で実際に触れることで実感され、理解できた有意義な半日であった。夜はバッファローまでホッケーの試合を観に行ったが、気温は〇度以下に下がってきた。

翌日再び雪の中ムーグ博士を訪ね、今開発中のポリ・ムーグを色々と試奏させて貰う。今日では当たり前になっているポリフォニック・シンセサイザーに大いなる希望が湧いてきた。また、電圧制御の原理やコントローラの有効利用についても彼からレクチャーを受け、やはり来て良かったと思う一

エプリルフル



日であった。この一年後彼からの誘いで生徒達を連れての全米ツアーも計画されたが、諸般の事情（ムーグ社がビッグブライヤー社に買収された）で残念ながら実現しなかった。その夜レオは奥さんが夜勤だとボヤキながら彼にタマネギのみじん切りにコンビーフと小エビのボイルしたものをマヨネーズで和えてポテトチップスで掬^{すく}って食べる「男の料理」を作って盛り上げてくれた。この時の「男の料理」は今でも鈴木家の伝統で寛とその生徒たちのお気に入りである。

四月一日（火）はエプリルフルである。10:32にバッファローを飛び立った飛行機が着いたカナダのトロント空港の時計は30分バックの10:00だった。ちよつと早かったが Four seasons sheraton hotel にアーリーチェックインを申し込むとOKだった。さて、フロントに鈴木宛のメッセージか手紙は来ていないか尋ねると首を横に振る。差し迫っていたので返事を待たずに日本を出発したが、着いているはずの手紙は郵便のストライキのせいであまり配達すらされて居なかったのだ。（やっぱり郵政民営化には反対だ）ピールカウンティの音楽教育が面白いと眞篠将先生の本に書いてあったのでピールカウンティの教育委員会に視察の申し込みをしていたのである。

じゃあ彼は寛をしにこの雪の中カナダのトロントまで来たのだらう。途方



に暮れた彼は電話帳を繰った。日本領事館はすぐ見つかった。事情を話すと同情してくれてホテルで待機するように言われる。一時間後「ル・ル・ル」と電話が鳴る。ノーストロント・カレッジイト・インスティチュートのフォード先生とトロント大学のシマガ教授の研究室のアポイントがとれたから自分で電話しなさいとのこと。喜んでお礼を言って電話を入れる。さすがに車で迎えが来る待遇じゃないのでタクシーでノーストロント・カレッジイト・インスティチュートに向かう。日本で言う中高一貫教育のような学校で、五〇〇人の生徒が四つのジュニア、六つのシニアの授業で音楽は金管、木管、そしてオーケストラ、合唱の授業などの授業を受けるそうだ。たまたまフォード先生の弦楽合奏の授業を見せて貰ったが、驚いたのはバイオリンからコントラバスまで全員がユニゾンでしかも同じボウイングでゆつくりと音階練習をしているのである。日本ならそれぞれの楽器の練習曲をやるのに、ここでは全員が同じ練習曲というわけである。その見事なピッチの正確さとタップリとしたボウイングからはプロのサウンドが発せられていたが、全員初心者とのこと。毎年卒業記念に出すレコードをお土産に頂戴して今度は歩いてホテルに帰る。

明くる日はトロント大学に向かう。方角も距離も判らないので前から歩い



てきたヒマそうなおじいさんに道を尋ねる。

「How can I go to The Toronto University?」

おじいさんはキョトンとしてこう答えた。

「Oh! You can go there on your foot!」

もっともである。大体トロント大学に行くにはどうしたら良いのですか?と訊いているわけだから、「歩いて行ける」は正解である。

そうだ。得意のHave Get Takeで訊かなくっちゃ。

「No, I ask you how can I get there」これが多分正解だったと見えておじいさんはある一角を指さして約一キロだと教えてくれる。それどころかくるっと向きを変えてその方向へと一緒に歩いてくれたのである。ただ一つ、そのじいさんが別れ際にお前の国は韓国かと尋ねたのが残念ではあったが、とんだ国際親善であった。

国際親善とは言えないがこのトロントで彼は無銭飲食をやった。と言うのも、15分待たされてやっと席に着いたレストランでのこと。メインの食事（何だったかはもう忘れた）を食べ終わってウェイターに食後のコーヒーを注文した。これがまた15分以上経つのにやってこない。まあこの国では何処でもみんな黙って並んでいるからそんなものだろうと思っていたが、それに



色々説明してくれるペニー
カックさんとは93年に再会



しても遅い。すると相席で寛の向かいに座っていた紳士が寛に尋ねる。

「あなたは確か食後のコーヒーを随分前に頼みましたね」

「はい。そうですがこの国ではこんなものと待って居るんです」

おもむろにロイターの記者の名刺を差し出した彼は

「この国ではサービスに対してチップも含めてお金を払う。悪いサービスに対してはビタ一文払う必要が無い。私はこの国の人間としてあなたが正しい待遇を受けていないのをみて恥ずかしく悲しい。」

「ムッシュー」とウェイターを呼んだ彼は気の毒な東洋人に謝るよう要求した。

何だか口の中でつぶやいていたウェイターに業を煮やした彼は気の毒な東洋人に、金は払わずにそのまま店を出なさいと言ったのである。

また韓国人と間違えられたのかなと思いつつ店を後にしたが誰も追って来なかった。

トロント大学は意外と近かった。つきあってくれたおじいさんに礼を言って別れる。構内は広々としていて案内された建物の2階にシマガ教授のラボはあった。二人の院生が待っていた。シマガ教授は急にバンクーバに出かけたとのこと。代わりに若い二人といろいろ話すことができ、メロトロンの原型や正弦波合成機などの最新の技術に触れることもできた。大きな番狂わせ

空港で徹夜

で始まったトロントであったが、結果的には思いも寄らぬ収穫があった。よほど韓国人が多いのか、その日の夕食のレストランでも東洋人ウエイトレスが親しげに「アンニョンハセオ」。

翌朝は北米一帯に前線が通過し、大吹雪であった。午前11時に着いたトロント空港ではカナダ出国とアメリカ入国の手続きが同時にできる。雪が気にはなっていたがどんどん離陸してゆく機影に安心していると、電光掲示板から到着便の取り消しが次々と表示される。と言うことは間もなく空港は空になるということか・・・と考えていると、何やらフランス語でアナウンスが流れる。実は寛が乗るはずの機が無いので出発が取り消され、さらに代わりになる便も無いので、今日の便は一切無い。ホテルを用意したので希望者は差し回しのバスに乗って欲しいという航空会社からのアナウンスであった。電光掲示板はすべて表示をやめ真っ黒である。ホテルに行っても明日の便に乘れる保証はないと考えた彼は空港で徹夜することに決めた。そうと決めたら彼はその辺りにあるソファアを集めて一人分のホームレス基地を完成。後は食料と水さえ確保すれば暖房の行き届いた空港ロビーは快適なホテルとなる。周りの客も寛の真似をして基地を作り始めた。しかし、用心のため一晩中荷物から手を離す事はできなかった。



翌朝雪も少し収まり到着便が一機飛来した。それとばかりに寛はチケットカウンターに行き搭乗手続きを開始した。その時の係員がニッコリ微笑んで寛のチケットにサインペンで「All night at airport」と書いてくれたおかげで一番最初のニューヨーク便に乗ることができた。眼下に白波の立つ大西洋を見ながら機はニューヨークに近づいたが激しい揺れに一度もベルト着用のサインは消える事はなかった。すべての先のとがったものをポケットから取り出して枕を抱えて丸くなるように指示が出たときかなり状況は悪いと悟ったが、何とか着陸した。乗客全員が歓声を上げて無事を喜び合った。

マンハッタンを歩いて見物し、楽譜店で色々な楽譜や本、レコードを買い込んで一杯の荷物と共にグランドセントラル駅から電車でラッチモンドまで行き、また熊巳さん宅で一晩ご厄介になることになった。というのも大きな荷物を持って移動するのは大変なのでトランクは最初の日に熊巳さん宅に預けたままになっていたからである。ここで勉強のための渡米目的は終了したが、せっかく来たついでなので知人や友人を訪ねてから帰ろうというわけである。ブルックリンに住むローデさん宅に電話を入れ明日の訪問のポイントを確認する。

翌日は土曜日で日本人の子女のための補習校へ典子ちゃんたちが行く車に同乗させてもらってマンハッタン島の中心部セントラルパークを抜ける。ブ



ルックリンはガーシュインの故郷である。ブロンクスの貧民街を抜けて川岸にたどり着いたところがローデさん宅。ノルウェー系のアメリカ人ローデさんとは数年前奥さんと世界一周の船旅の最中に健康を害し神戸港で下船し海星病院に入院中に知り合った仲である。当時海星病院の看護婦さんたちから「ママ」と慕われていた寛の母親の元に折角日本に來たからと看護婦達が連れてきたのが患者のローデ夫妻であった。着物を着せて写真を撮ったり、和食をご馳走したりと外人接待が好きな彼の母親は2006年8月14日94才で亡くなるまで英語会話ができたハイカラ・ママであった。

ローデ夫妻の末っ子の息子エディが接待してくれたが、夜のニューヨークをカプタービルの展望階から見せて貰ったりシアターオルガンのある劇場に連れて行って貰ったりしたが、その夜エディの友人達が集まったパーティーは圧巻であった。イタリア系、ヒスパニック系、北欧系の若いカップル達、それに彼を加えた国際色豊かなパーティーは明け方まで続いたが、何語でしゃべったかは殆ど記憶がないほど飲んだ。「マンジャ！」と言われれば食い、「ムジカ」と言われれば歌い、英語だけで無かったことだけは確かであったが、楽しく朝まで過ごした。翌日は船会社の重役で引退したローデさんの下に色々な人が集まってまたパーティーであった。招かれたお客は全部夫婦で、パーティーが始まる前に宅配のピザを食べながら男性は政治や経済

ドアホー



の話、女性是谁々さんの犬が子犬を生んだとか、このネックスレスはどこで幾らだったといった話題であった。お国が変わっても同じだなあと思ったものである。

ローデ夫妻とお別れの抱擁の後、寛は小学校以来の友人の徳大寺輝磨君（百人一首に出てくる後徳大寺朝臣の末裔）の住むロスへと国内便で大陸を横断。ロスは暖かく、先週のトロントの大雪は何だったのだろうと思った。ホテルから徳大寺君に電話をしようと頭にゼロを付けて電話をすると交換嬢が出てき来て「ドアホー」と言う。まさか大阪弁で怒られるとは思わなかったが謝ってまた電話すると再び「ドアホー！」である。何がおかしいのかも一度備え付けの電話のかけ方のカードを読む。「?!?!?!」。何と市街にかけるとは「4番」を頭に付けなければならないと書いてある。ドアホーはダイヤルフォー（Dial four）との聞き間違いであった。もう何日も英語漬けの毎日であったがまだこんな初歩的なミスが多い。そんなこんなでやっとサンタモニカに住む徳大寺君の家に招かれ夕食をご馳走になる。大きな荷物は徳大寺君が船便で送ってくれることになり随分身軽になった。

あとはまっすぐ帰れば良いものを時差調整のため、帰路もハワイで一泊する。このハワイのホテルでくたくたに疲れていた寛が電話帳で調べてマッサージを呼んだら、グラマーな金髪のお姉ちゃんが部屋をノックする。「ス



電子音楽部スタート (1975年)



ペシャル・マッサージュね？」の一言でピンときた彼は「もう私は十分疲れている。これ以上疲れることはしたくない」とドアのところで断わった。結局そのホテルのマッサージルームの日系のお兄さんに気持ちよく寝てしまうくらい上手に揉んで貰って眠りにつく。翌朝迎えの車の運転手がこのお兄ちゃんだったのは吃驚したがその車で空港まで値切り倒して送ってもらった。

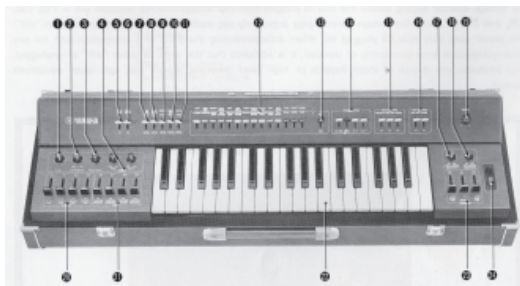
久しぶりの日本ではもう担任の居ない新学期の始業式は済んでいた。ワシントンでも、しだれ桜が満開だったが日本も桜が満開だった。三年（27回生）へ持ち上がる。

同好会であった組織を電子音楽部と改め部活動としてスタートする。さらにヤマハの伊藤博昭氏を神戸店の津野啓三氏より紹介され、浜松に赴きSYI IIという海外向けモデルの提供を受けられることになる。

当時のヤマハはエレクトーン営業部が片手間でシンセサイザーの開発をやっていたのであるが、研究開発のトップであった松浦氏や営業の関氏らともこの時期に懇意になる。

実はその一年前に彼はヤマハに直接電話を入れ自分のアイデアを告げたところ、本社から2名の方が来られ、「良いですね、是非当社にやらせてください」ときた。しめたと思っていると、「ところでご予算の方は？」という

筑波大学での一ヶ月
(1976年)



ことでこの話は流れてしまったのである。性善説の彼は好い話には必ず人の好意が期待できるという甘い考えが間違いであったことを思い知らされていたので、やはり手順を踏むことの大切さを知ったのであった。

十数台のSY-IIは彼の希望通りに改造され明石中学にやってきた。世界の何処にもないカスタムメイドのシンセサイザーである。それからの電子音楽部の活躍はすごいものになり、NHKのテレビで紹介されり、全附連の研究会で発表（六甲山で）したりと大成を遂げていった。

レパートリーもガーシュインの「パリのアメリカ人」をはじめカバレフスキー「道化師」、レスピーギと増やしていった。

翌76年寛は筑波大学で行われる指導主事・管理職研修に一ヶ月派遣されることになる。

この研修は親の死に目にも会えないというくらい厳しいものと聞いていたが、神戸大の附属からは彼と住吉小学校の竹添先生、住吉中学校の米山先生の3人が選ばれる。前日は神田の伯母の家に一泊して、向かった筑波研修センター（今は無い）は土浦駅から6キロくらいの筑波大学の入り口（今はここまで鉄道が来ている）にある建物である。ここからさらに徒歩で2キロ先の第3学群の教室まで毎日往復することになる。この研修で否応なしに出席



しなければならぬ退屈な授業の毎日に生徒の気持ちがよくわかる。カレーと言えどビーフが定番の関西と違ってこちらでは鶏肉か豚である。朝夕の研修センターの食事也不必ず納豆や豆腐が出たがこれは寛には全然問題はなかった。と言うのも彼は「豆類」「イモ類」が大好物であったからである。研修センターの周りは全部ピーナッツ畑であったのでビールのあては当然この自然の恵みで済ませた。

将来指導主事にも教頭にもなりたくなかった寛は、殆どの講義は興味の無いものであったが、一つだけKJ法の実習は大変役に立ってその後の授業や研究に役立てた。当時プロ野球に殆ど興味が無いどころか、夜電気を付けてまでゲームをするという野球は彼に言わせれば亡国の遊技であった。（ちなみに現在の寛は熱狂的なタイガースファンである）麻雀をはじめとしパチンコや競馬競輪はすべて亡国の遊技であると考えていた彼がどんな人物であったかは想像に難くない。そんな彼が、もっと大ばくちになるシンセサイザーを音楽教育に導入するという事を真剣に考えたのはこの研修の間であった。

周りの皆が日本シリーズに向けて盛り上がっていた毎夜遅くまで彼はシンセサイザーの本の原稿を書き続けていた。原稿用紙ではなくカードに書いて前後関係や構成を考えながらの執筆はコンピュータを使わないでシステムティックに本を書くという彼独自のアイデアであった。一ヶ月の研修期間中

出版したいのですが

一度だけ週末にこっそり神戸に帰った彼は執筆に必要な資料を持って再び土浦に戻る。最後の週末には神楽坂にある音楽の友社をこっそり下見する。というのも出版するからには音楽之友社からと彼は固く心に決めていたからである。

研修が無事に終わりのよい出版に向けて彼は毎日遅くまで書齋にこもる。挿絵はかつての雲雀丘中の教え子糸永久美さんをお願いする。このようにして完成した原稿を風呂敷に包んで上京したのは研修が終わって僅か一ヶ月であった。何のアポイントメントもとらず音楽の友社を訪れた彼は、受付嬢に「本を出版したいのですが・・・」と言う。

「どなたかとお約束でしょうか？」

「・・・いいえ」

「しばらく、お待ち下さい」というわけでどのくらい待ったかは忘れたが、お茶も出ない受付で待っていると、

「とりあえず、原稿はお預かりいたしますので今日の所はお帰り下さい」

シンセサイザー入門
出版（1977年）

2週間ほど経ったとき電話があった。出版することに決まりましたので担当者とお話し下さいとのこと。当時の山里亘部長から編集の坂田隆司氏を紹



介され、坂田氏もあきれる異例づくめであったと告げられる。何のアポイントも無い「持ち込み原稿」に対して検討の末ゴーサインを出したのが山里亘部長だった。当時の音楽の友社の出版物には伝統的な楽器や音楽に対するものはあっても、先進的なしかも他に比べようのないこの種のもものは極めて大きな賭けであったと後に知る。本の題も「シンセサイザー入門」として決定し初版1000部で契約した。

通常このような出版は500部くらいで様子を見るものらしいが、いきなり1000部で買い取り義務無しと言う条件は異例とも言える。ゲラの段階から坂田隆司氏の明確な編集方針は寛の希望以上のものであり、一年あまりで5校まで終校し1977年11月15日 遂に初版の出版にこぎ着けた。

この出版記念パーティは当時神戸で一番高いビル貿易センターの最上階のレストラン「ブーン」を借り切って楽しく行われた。この時の招待客の当時文部省の伊波久雄先生、最初のピアノの先生である脇坂先生は故人となられたが各界からの祝辞も多く寄せられた。その後この「シンセサイザー入門」は五版まで版を重ね二万部以上売れアメリカ行きに要した借金は全部返済できた。やはり塞翁が馬である。

(明石市山下町の神戸大付属明石中学校で)

[illegible][illegible]

シンセサイザー教育。?

電子楽器 高まる関心

自由な演奏がいい
プレーする生徒に大人気

最も中学の音楽教育機関

楽器オンチもう一歩

この学生は音楽家

「シンセサイザー」は、電子楽器の一種で、鍵盤を押すと、あらかじめ設定された音が出る。音の高低、強弱、音色など、自由に設定できる。そのため、音楽の授業で、生徒の関心が高まっている。特に、自由な演奏ができる点が、生徒に大人気だ。

いま若ものはシンセサイザー

授業が楽しい
音域広くて演奏・音づくりが簡単

ロックも主要楽器に

モイセーフ・パレ
大塚 文雄

シンセサイザーは、電子楽器の一種で、鍵盤を押すと、あらかじめ設定された音が出る。音の高低、強弱、音色など、自由に設定できる。そのため、音楽の授業で、生徒の関心が高まっている。特に、自由な演奏ができる点が、生徒に大人気だ。

(21) 第2兵庫 (神戸) 1978年(昭和53年)1月15日 日曜日 享月

登場

音楽のすそ野を広げる

シンセサイザーを音楽教育に取り入れた鈴木寛さん

「シンセサイザー」は、電子楽器の一種で、鍵盤を押すと、あらかじめ設定された音が出る。音の高低、強弱、音色など、自由に設定できる。そのため、音楽の授業で、生徒の関心が高まっている。特に、自由な演奏ができる点が、生徒に大人気だ。

鈴木寛さんは、神戸市立中央高等学校の音楽教員です。彼は、シンセサイザーを音楽教育に取り入れることで、生徒の音楽のすそ野を広げたいと考えています。彼は、シンセサイザーの音域が広く、演奏や音づくりが簡単であることが、生徒の関心を引き出す要因の一つだと考えています。

鈴木さんは、シンセサイザーの音域が広く、演奏や音づくりが簡単であることが、生徒の関心を引き出す要因の一つだと考えています。彼は、シンセサイザーの音域が広く、演奏や音づくりが簡単であることが、生徒の関心を引き出す要因の一つだと考えています。

鈴木さんは、シンセサイザーの音域が広く、演奏や音づくりが簡単であることが、生徒の関心を引き出す要因の一つだと考えています。彼は、シンセサイザーの音域が広く、演奏や音づくりが簡単であることが、生徒の関心を引き出す要因の一つだと考えています。

Moog システム55購入
(1978年)



雪が好き 愛車フロンテ

この頃の寛の生活を長女綾さんが10才の父の日の文集に記したものを紹介しよう。

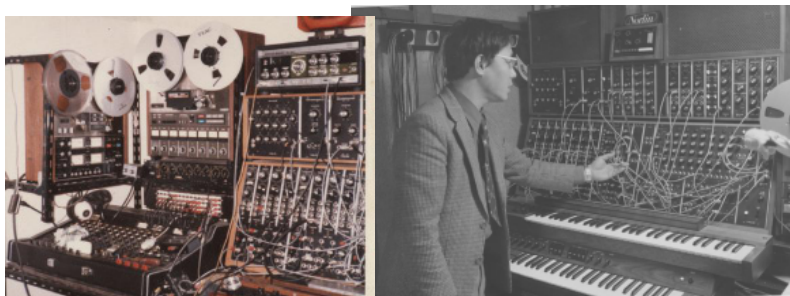
私のおとうさん 昭和52年6月9日

鈴木綾

私のおとうさんは、朝早く起きて夜遅く帰る。

帰ってくるなり横になったり、私たちがまだ勉強している時には、見てくれる。おとうさんは、火曜日には、神戸大学行く。だから、火曜日は、私たちが家をでる時でもまだ寝ている。日曜日は、六甲カトリック教会で全インドオルガンで歌のばんそうをひいています。だから、日曜日もお休みではありません。家帰って少ししてから昼食。それがすむと、少し休けい。でも夕方からこんどはピアノのおけい。それでも第五の日はお休みだからドライヴ時々行く。おとうさんは雪がすきだから冬は、いろいろな所行く。私はそこが自分とあっているから、お父さんがすき。でも、お父さんは「ヨ」やゆうれいの話がすきだからそんなテレビがあると見る。そこがきらい。おとうさんの半分はすき。もう半分はきらい。でもすきなほうが多い。お父さん大すき。お仕事がんばって。いつもありがとつ。

1978年（出版の翌年）道志郎氏の企画でCBS・ソニーから同名のLPレコードが出版されることになりその音源に必要なため Moog システム55を購入す



ることになる。勿論当時のマンション一軒分の支出が必要になったが、慶子夫人の「あなたがライフワークにするものだったら買っちゃいなさいよ」の一声に又塞翁が馬は嘶く。一ドルは依然として200円とやや円安であったが15000ドルで輸入、周辺の多重録音用のテープレコーダやPAなど総額500万円は大和銀行から信用を担保に無担保で融資を受けた。

また、この三年前自宅の南側に今の法律なら絶対に建てられない違法な六階建てのマンションが建設され、日照権や眺望権を一挙に奪われ子供が三人で家が手狭になったこともあり少しでも日当たりを回復するため二階部分を増築していたので、新しいMoogは元のキッチンの場所に設置された。このスタジオの完成でレコードはすべてこの部屋でマスターテープまで完成させることができた。

その時のレコードジャケットに記載された使用機器リストは以下の通り。

モーグシンセサイザー システム55

ポリモーグ

ヤマハCS-30

Korg ポリフォニックアンサンブル

ソニー 8チャンネル 1インチ テープデッキ



Teac A-3340S (4ch) × 2

ソニー ノイズリダクション

ヤマハ 8ch ミキサー PHL-400

Teac AX20 × 2

ローランド フェイズファイブ

エコーチェンバー

DC-50

今日なら パソコン一台とDTMソフト一本で済むものを最小限でもこれだけ用意しなければならなかったわけであるから隔世の感がある。この今日の卓上システムを彼はデスクトップ・パブリッシングのDTPを文字ってDTM（デスクトップミュージック）と名付け、以後世界中でこのDTMという和製英語は使われることになった。

76年から寛は神戸大学教育学部の非常勤講師も務めていたが、その時設置したDTMシステムがその後20年以上も神戸大学教育学部音楽棟に保存（使用されていたかは不明）されている。

1980年、神戸で開催されたポートピア博覧会のイベントとして全楽協主催

マイコン・ブーム



のコンサートでは、リムスキー・コルサコフのシェヘラザード他を電音部が演奏し大喝采を浴びる。この演奏だけのために新しいシンセサイザーが設計され使用された。ただしその楽器は演奏終了後回収廃棄され、ヤマハからスクールモデル・シンセサイザーとして装いも新たに登場する。この取材を始めとして地元サンテレビ、関西テレビなどでその活動が紹介され、今や電音部は日本中に知れ渡る存在となっていた。

そのノウハウも最初の電子キーボードアンサンブル時代からすれば大きく変わり、ハードウェアもモノフォニックからポリフォニックへと進化を遂げてきた。しかし、そんな中でもオーケストラにおける殆どの楽器がモノフォニックであることを踏まえ依然として主要なパートにはモノフォニックシンセサイザーを使用した。ホルンや弦楽器群のようなパートには上図のようなポリフォニック・タイプを活用した。楽譜はオーケストラの総譜をそのまま使用し、パート譜というモノは存在しなかった。また、指揮も生徒が行いレコードやテープと共演する練習方法も定着させた。

その最後の三年間、彼は34回生の学年主任として附属明石中学での教師生活を締めくくるが、この三年間彼には新しい波が押し寄せる。

今でこそパソコンという言葉は幼稚園児でも知っているが、その当時はマイ



クロ・コンピュータを略したマイコンが普通の通称であった。コンピュータ時代を予見した中島幸男副校長はいち早くもモドール社製の「PET」と呼ぶモノクロの小型コンピュータを購入して職員に触れるように言われた。職員全員で神戸大学の電算機室でBASICの講習を受けたが関心はいまいちであった。そこで中島副校長は一番早くものにした者に賞金を出すという懸賞をかけたのである。

今と違いコンピュータには一切のソフトが載ってなくて、あらゆるプログラムは自分で作らなければならなかった時代である。必要とされたのは成績処理のシステムであった。この処理プログラムはSP表も含めて偏差値なども自動計算して生徒の指導に役立てようというものであった。岐阜の川島小学校などの例を参考にしながら、SP表は熊野先生（技術科）と合作で完成した。夜遅くまで教官室でやっている最中に中島副校長がねぎらいの言葉をかけに側まできて、立ち去り際にコードをひっかけて電源が落ち全部パーになるなど色々想い出はあるが、この時このプログラミングの経験で彼はコンピュータと数学の関係は殆ど無いことを知る。アルゴリズムは論理学であり、ある目的のための厳密な手順のことであることに気付き、自己の研究テーマにも「アルゴリズム・メソッド」というキーワードを用いるようになる。このプログラミングの能力は誰から学んだものでもなく、全く彼の得意



の独学である。

この頃彼は音楽のテストをマークカードを用いた方法で採点するようになる。このマークカードはテスト以外に生徒の個人学習の進捗度合いを正確に把握するのに用いられ当時の明石附属の研究テーマ「診断・処方のシステム化」のために大いに貢献した。

マークカードはその頃から始まった大学入試の共通一次試験で一般的になっていたので生徒にも違和感はなかったが、返却されたテストには赤鉛筆の後も赤い○×もないものでそれぞれの生徒の間違い回答に対する診断とコメントがびっしりとプリントアウトされるといいうものであった。これら一連のプログラムをすべて自作した彼は約束の懸賞を金一封と記念品の電気スタンドと共に副校長から授与される。

神戸大学の情報処理センターと電話回線で結ぶ実験も試み、横尾教授や朝井センター長とともに科研費申請して受理される。

ヤマハのミュージック・コンピュータ（後にピアノプレーヤーの駆動部分となる）も試作品を提供されアナログ一辺倒であった彼のスタジオ環境は次第にデジタル化してゆく。彼の自宅にもコモドール社製のコンピュータが

海外視察研修

(1981年)

9月16日～10月15日

あったが、6502という素晴らしいCPUに惚れ込んだ彼は当時そろそろ一般化してきたNEC社製のPCにはあまり興味が無かった。この頃東芝が日本語ワープロを開発していたが、それをいち早く商品化した富士通のワープロはすぐ教官室に設置された。写植という方法で印刷してきた研究紀要などの出版物がこのワープロ原稿になっていったのもこの頃である。後藤多佳子という一年生の女子生徒がいた。彼女は当時まだ漢字プリンターに対応するクリーンフォントの無い頃、全校生の氏名データをCHROMでコーディングするという作業を手伝ってくれた極めて優秀な生徒であった。まるで中国の電報交換手のようにあらゆる氏名漢字をあっという間にコーディングしてくれたすごい才能の持ち主である。今彼女はどんな生活をしているのか知りたいものである。

1981年9月、彼は文部省の長期海外視察研修に選ばれる。しかも、第1回の試みとして全国の附属校園教諭グループの24名に加えられた。

コースはアメリカ(サンフランシスコ↓ボストン)↓オランダ(アムステルダム↓ロッテルダム)↓フランス(パリ↓ダンケルク)↓イギリス(ロンドン、オックスフォード)↓帰国というものでそれぞれの地に最高で4泊するという豪華なものであった。JTB久米添乗員、文部省澤田道也団長に率い

られ一ヶ月にわたり外国の秋を満喫した。一人当たり100万円の予算は全額国が負担してくれたが、食費は別でこれは個人負担であった。この旅行で一ヶ月空いた授業は卒業生の森ゆかりさんが埋めてくれて助かった。アメリカの小学校では給食指導の場面で食堂に生徒を引率してきた教師が15分でピーと笛を吹く。すると食べ終わってなくてもかたづけるというまるで軍隊みたいな学校や、腰に拳銃を着けたスクールポリスのいる学校を視たり、オランダでは昼休みに職員室でワインを飲んでいる先生、放課後広い校舎のワンフロアをたった二人で掃除している（罰ではなく）生徒達や、教師共働きの場合妻の報酬が半額になるイギリスの学校制度など日本では知り得ない状況を色々と視察できてよい研修であった。

このボストンからオランダに向かう大西洋横断の夜行便で、彼の隣に座ったアメリカ人の女性が紹介してくれた「Why Johnnie can not read^ㇿ」という本についてのレクチャーは中々面白い話であった。しかもこのアメリカの教育改革批判の本には続編があつて、その題名も「Why Johnnie can not read yet^ㇿ」^ㇿと紹介してくれたが、日本ではベストセラーにはならなかったこの本は、ゆとり教育を何とか改善しようとする日本の識者たちにも読んで貰いたいものである。この女性は機長の機内アナウンスの英語がテキサス訛りでさっぱり判らんとぼやいたり、上映されている西部劇でどんな



撃ち合いの場面でも馬には弾が当たらないのはおかしいとぼやいたりしていたが結構ボヤキストではあった。

この研修旅行を楽しいものにしてくれたのは1ヶ月の間ずっとペアで行動、宿泊に付き合ってくださった大阪教育大附属天王寺高校の武田和生先生の存在であった。どのホテルでもこの武田先生とツインルームだったし、自由行動もいつもそうだった。ボストンでチャールズ河の写生(上図)をしている間も黙って付き合ってくれ、靴をすり減らしてパリの街を歩き回ったときもタクシーに乗りうとは決して言わなかったし、足が長くない二人は結局同じサイズのママチャリを借りたオランダでの貸し自転車車の想い出。

そうそう、ボストンでどうしてもカレーライスが食べたくなって食わしてくれる店をさんざん探したが無かった時にもう諦めて飛び込んだ中華料理店の日本食メニューでそれを見つけて大喜びしたっけ。カレーと言えばロンドンのピカデリーサーカスの近くのインド人のカレー店に入ったらカレーライス? って感じでやはりここにもメニューが無かった。そこで、カレーライスのレシピを教えて作ってもらったっけ。食べ物にまつわる想い出はスラスラと思い出せる。

パリのホテルの朝食で出るジャムやチーズのパックをポケットに詰め込んで500円くらいのワインを部屋で飲みながらそのジャムを嘗^なめたっけ。あち



らではハムもチーズも量り売りだったから必要なだけ買って食べた。グリニッジ天文台にある高浜虚子の「我ここに立ちて日本を見れり」のような碑文をみて同感だったのも思い出す。

サンフランシスコのホテルで、フィッシャーマンズワーフで旨いものを食べようと出かける二人に若い二人の日本人ギャルの眼がすがって来る。聞くともう三日もホテルから一步も出ていないとか。治安の悪い街だから仕方がないが、団体ツアーでない女性の旅は危ないよと言いつつ残して無情にも出かける。でなきゃ教育者じゃないでしょう（でも男じゃなかった）。

この附属中学最後（本人はまだそのことに気がついていなかったが）の年、眞篠先生の紹介でドイツのマインツのアカデミーから見学があり、彼の業績はドイツ語になって全ドイツに紹介される。後に（90年）彼はこのマインツのアカデミーでツインマーシート教授と再会することになるとはつゆ知らなかった。

Heft 4 April 1982 15 EURO

Musik und Bildung

Zeitschrift für Musikerziehung

Musikerziehung in Japan Musiklehrausbildung in Japan Der Synthesizer in der japanischen Musikerziehung



SCHOTT

6. Es geht heute nicht um Vererbung zwischen Instrumenten und Synthesizer.
7. Der Synthesizer ist teuer und die Bedienung schwierig.
8. Synthesizer und Improvisation sind nicht miteinander vereinbar.
9. Die Form des Instrumentes deckt sich nicht mit seiner Klangfarbe.

Für alle diese Einwände sind nicht aus wirklicher Erfahrung herausgegangen. Da ich so die Einbildungen und Vorurteile nicht beseitigen kann, gebe ich nachfolgend eine Liste von Gründen an, die die Einwände zu widerlegen.

1. Synthesizer-Schulungsprogramme können unterschiedlich sein. Ich habe schon viele Programme gesehen, die auf einem Synthesizer basieren, aber nicht auf einem Synthesizer. Diese sind nicht nur in der Bedienung, sondern auch in der Klangfarbe unterschiedlich. Ich habe schon viele Programme gesehen, die auf einem Synthesizer basieren, aber nicht auf einem Synthesizer. Diese sind nicht nur in der Bedienung, sondern auch in der Klangfarbe unterschiedlich.
2. Ich habe schon viele Programme gesehen, die auf einem Synthesizer basieren, aber nicht auf einem Synthesizer. Diese sind nicht nur in der Bedienung, sondern auch in der Klangfarbe unterschiedlich.
3. Ich habe schon viele Programme gesehen, die auf einem Synthesizer basieren, aber nicht auf einem Synthesizer. Diese sind nicht nur in der Bedienung, sondern auch in der Klangfarbe unterschiedlich.
4. Ich habe schon viele Programme gesehen, die auf einem Synthesizer basieren, aber nicht auf einem Synthesizer. Diese sind nicht nur in der Bedienung, sondern auch in der Klangfarbe unterschiedlich.

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Fazit

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Der Synthesizer in der japanischen Musikerziehung

Hiroshi Suzuki

Mit diesem Aufsatz soll der westliche deutsche Kollege einen Einblick in die japanische Musikerziehung gewinnen. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Die Situation der japanischen Musikerziehung

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Der Einsatz des Synthesizers in der Musikerziehung ist nicht ohne Folgen. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

1. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
2. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
3. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
4. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
5. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
6. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
7. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
8. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
9. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
10. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

1. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
2. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
3. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
4. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
5. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
6. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
7. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
8. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
9. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.
10. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.

Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken. Ich möchte mich nicht zu weit auslassen, sondern mich auf das Wesentliche beschränken.



Ein Foto aus der Zeit, als ich meine erste Synthesizer-Arbeitsgruppe in der Schule der Stadt Hiroshima leitete.

1982年この附属最後の年、石田先生を始め多くの神戸大学の先生が彼を神戸大学教官に迎えようと苦心していた。しかし、修士の資格のない彼はアツサリ教授会で否決されもう二度と神戸大学に登用される見通しはなくなつた。それならいっそのこと転出しようとして新構想大学の兵庫教育大学へ学生として出してくださいと副校長に願い出る。その兵庫教育大学の眞篠將教授はその年度の明石附属中の研究会の指導講師でもあつた。石田純一先生を通じてその眞篠先生から兵庫教育大学の附属中学の音楽の先生として来て貰えないか？という打診があつたと言われる。新構想による教員養成大学院大学の附属ならまた新しい勉強もできると大喜びで返事をした。そうしたらしばらくしてその話は流れたと言われがっかりする。そうこうしていると今度は兵庫教育大学の教官として来てくれませんかときた。実はあの後石田先生が教大協の全国大会で道後温泉に浸かりながら眞篠先生からおたくの鈴木先生を大学教官にくれませんかという打診があつたからだそうだ。

兵庫教育大学へ (1983年)

1983年亥の年。寛は大学教官としてのスタートを切る。勿論それまでも78年以来彼は神戸大学で非常勤講師はやっていたが、常勤は初めてでしかも「助教授」である。今と違いこの頃の辞令は大学設置審の審議で採用された



通勤貧乏始まる 一日4300円の通勤赤字

関係で文部大臣の名前で交付されたが、修士の学位が無いことについては、それ以上の現場での実績が評価され、著書も単著であり、論文も附属時代に20編以上書いていたので審査上何ら問題は無かったらしい。

まつさらの建物。まつさらの研究室。まつさらのピアノ。まつさらづくめの大学であったが、社は交通の便から言うときまさに神戸から言えばチベットのあった。バスは一日数本。それも片道2時間半。最終は6時台。それをマイカーで行くと片道ワンマラソン（42キロ）で50分。選択の余地は無い。それでも年間約2万km走って24年間。何と地球を12周以上廻った計算になる。使ったガソリン代は25万5千円。六甲山を抜けるトンネルの有料道路料金、オイル、車検、車本体価格（七台乗りつぶし）、保険料となれば全部で三三〇〇万円以上は使った勘定になる。通勤手当は24年間で通算七〇〇万円くらいだから差し引きは二六〇〇万円で年間108万円の赤字である。丁度この赤字分くらいの研究費（私用には使えない）が年間使えたので差し引きはゼロとなるかとも思わないとやってられないが、何のことはない。自腹で研究費を捻出して国に寄付していたのと同じ事である。

この計算は今振り返っての話で、その時は毎年きっちり108万円の赤字だったのであるが殆ど気にもしていなかった。



当時眞篠^{ましの}先生は毎週末東京に帰られ、月曜の朝こちらに來られていた。ついでにこれも計算してみると、回数券を使ったとしても年間90万円近い持ち出しになり、当然東京からの通勤手当など出ないわけだからこれも大変だったんだなあとと思う次第である。しかも、東京や神戸に勤務していると支給される調整手当(〇〇〇)は都市圏でない兵庫教育大学には支給されないので泣き面に蜂である。実際に大都市は物価が高いつか生活費がかかるというので支給される調整手当は、居住地ではなく勤務地を基準に支給されるので寛のうに神戸に住んで社に通うというのはアクセス単価が高い分は何処からも支給されないのである。これが逆で社に住んで同じ距離走って神戸大学に勤務すると神戸で生活していなくて調整手当は支給される。これはきつと勤務地の近くの官舎にでも住んでいる人が考えた制度なんだろうが、彼も社に勤めて最初の三年間だけは神戸の名残でこれが支給された。東京から転勤してくるキャリアの事務官は皆三年でまた戻るのはそのためである。

のつけからお金の話になったが、彼はこの転勤で最初給料の号俸が上がったが、長男聡の小学校入学で児童手当の打ち切り、調整手当の打ち切り、と給料は上がることなく足踏み状態であった。やがてバブルがはじけて民間が調子が悪くなると、人事院勧告はゼロやマイナスが続ぎ、三月に支給されていた期末手当も世間の非難を受け廃止されてしまう。55才から昇級は停止さ

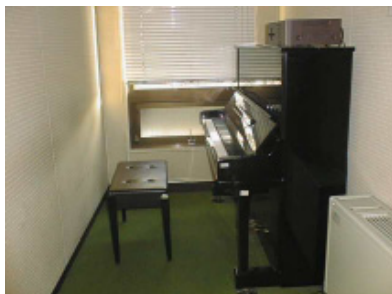


実技教育研究指導センター

れ、附属時代には四年に一度はあった特別昇給も無く55才の給料のまま今日に至った。この上給料も下がり、年金や退職金下がると言うのなら勤勞意欲も下がるというものであるがその方向に進みつつある。船が沈む前に陸に上がろうというわけで定年退職を受け入れる。

暗い話題になったが、当時そんなことは予想すらしていなかった41才の大学助教授一年生の寛は大張り切りで毎日社町^{やしろ}まで通った。大学での職務は「学校教育学部附属実技教育研究指導センター」という長い名前のセンターである。上越教育大学、鳴門教育大学と合わせて三大学だけに設置された新構想の目玉でもある。寛の仕事は全学部生に小学校教員としての十分なピアノの演奏能力を身につけさせるというもので、講座にも属さずセンター独自のグレード・テストによる学生の自学自習の支援が大きな任務であった。通常1〜2単位の初等音楽とかそんな名前の授業を半年受けて、バイエルか何か一曲だけ弾ければ単位がとれるという現状に対して、4年間を通して月謝の要らないピアノの先生が常駐するセンターは単位の問題ではなく本当の実力を付けさせる目的で設置された。しかし、自学自習というのは放っておくと何もしない大部分の学生にとっては絵に描いた餅に過ぎなかった。そこで、初代センター長の眞篠^{まの}先生の発案で、グレードというものを実施した。

自動ピアノに着目



寛が就任したとき学部生は既に一期生は2回生になっていたが、その彼らが最初の試金石となるグレードはA〜Eまで5段階あり、C以上を要求される。バイエルの88番程度かブルグミュラーの数曲程度を要求するこのグレードCは今では殆どの学生が取得して卒業してゆく。

ある日眞篠センター長に呼ばれ、特別設備費が付きそうだから何か考えるように言われる。既に音楽棟には63台のアップライトピアノとそれを収容する個人練習室がある。しかし、教える教師の数は圧倒的に足りない。そこで、彼は、自学自習のお手本演奏を生教師ではなく、コンピュータで演奏データを鳴らす自動ピアノのアイデアを思いつく。この自動ピアノはホーム・コンピュータのコンセプトでヤマハの伊藤博明氏の研究開発チーム（故檜山氏）がMS（ワイズコンピュータシステム）の一部として既に実用化の一手手前まで来ていたものがあった。

150万の予算であったが、新設校には優先的に配分されるものなので、思い切って眞篠教授にそれを提案する。63台すべてのピアノに一台あたり24万円の改造を加えて自動ピアノ化するというアイデアであったが見事採用され実現に向けて歩みを進める。

自動ピアノの歴史はオルゴールの延長上にある「街頭オルガン」というヨーロッパの街角で屋台に積んだポジティーフ・オルガンを手回しで空気が



街頭オルガン

とパンチカードを使って演奏するものが昔からある。戦前にはこのシステムとよく似たロールペーパーにパンチしたものを使う自動ピアノが既に金持ちの家にはあった。ガーシュインの演奏なども記録されたものが残っているが、悲しいかなパンチ穴はオンとオフしか表現できない。で、せっかくの強弱表現ができるピアノという楽器の特性が残せないものであった。

マランツという会社がこれらの演奏データを買収って、テープレコーダーにデータとして記録し直し、自動ピアノに演奏させるという所まで当時の技術はきていたがとてもじゃないが非音楽的でおもちゃにすらならない。

そんな自動ピアノの鍵盤の底に感圧センサーを仕込んで演奏データを探り、こんどは鍵盤の支点を挟んだ反対側にソレノイドコイル（電磁石）を取り付けて演奏させるという自動ピアノをヤマハが開発していたのである。但しこれにはピアノリストなら理解できる重大な欠点があった。それは、ピアノは必ずしも鍵盤を底まで打鍵しなくてもハンマーは動き、音が鳴ることもよくあり、その場合は底のセンサーが感知しないので記録が採れないということである。言い換えれば上手い人が弾けばそれなりに、下手が弾けば一層下手に再現されるというものであった。

そこで、寛は鍵盤ではなくハンマーの動きからデータを採る方式を採用。ハンマーが打弦する時途中中の二点間をどんなスピードで通過するのかという

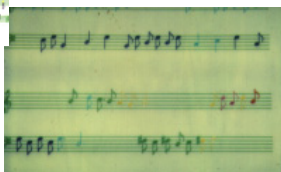
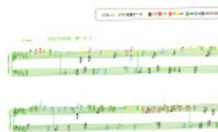
CAPIS誕生 (1985年)

のを非接触のレーザー・センサーで検知し、それをデータとするこの新方式ではハンマーが打弦して音が鳴ったものは必ず記録が残るので「音抜け」というそれまでの方式の最大の欠点は克服された。さらにアップライトピアノの宿命である同じキーを続けて連打すると時々空打ちして音が抜けるという欠点をも、ハンマーが戻ってきた時強制的に反撥を止めるショックアブソーバーをハンマーレールの代わりに取り付け、見事グランドピアノなみの連打ができるように改造して克服したのである。

予算が付いてから納品までの短い期間の工事をヤマハ社員は滝野町の旅館に寝泊まりしながら寒風吹きすさぶ大学の現場でこれらの作業を黙々とやってくれた。この時のプロトタイプは彼の研究室にまだ現役で残っている

できあがった63台の装置の型式には兵庫教育大学の頭文字Hが頭に付けられたオーダーメイド・カスタムモデルのピアノプレーヤーであった。もはや見ることもない5インチの単密度記録のフロップीडィスクとMIDI規格誕生前のDPモードという今の規格と比べると水洗便所とくみ取り式便所の違いほどはあったが用は足せた。

さらにこの演奏データ（5インチフロップीडィに記録されたデジタルデータ）を解析して、演奏分析や自動評価まで可能にさせたのがYIS（ワイズコ



ンピュータシステム）である。最後の8ビットシステムの名機とも言われるこの幻のコンピュータに、お手本演奏と学生の演奏データを比較させるオンラインシステムではあったが、今までなら5分の曲を評価するのに5分以上の実時間を要したのに比べると数秒で済むので、評価も少人数の教師で済むと言うわけである。

これら一連の自動演奏・演奏分析評価システムは**CAPIIS** (Computer assisted piano instruction system) と彼が命名し、これも各界から注目されることとなった。後にMIDI規格になってから鳴門教育大学や他の大学もこのシステムを導入し、関心を持つ大学は海外にも及びカナダやオーストラリアなどからも音楽教育者が見学に訪れた。このシステムはクローズアップ現代という番組でも取り上げられ放映されたが、三原山の噴火と重なり視聴率は上がらなかった。

振り返れば寛が兵庫教育大学で最初に手がけたこの研究開発は今なら大脚光を浴びるものになったであろうが、学内でも寛がシンセサイザーをはじめこのこのCAPIISを世界で最初に開発したことを知る者は少ない。たまに知っている者がいても「どうして特許を取らなかったの？」程度のコメントしか返ってこない。常に近未来に眼を据え、過去に徒に固執しない彼の生き方は、学会で何回発表したとか、何ページの論文を書いたと言う計数主義的

鈴木寛助^{かんすけ}
教授

評価が中心の大学という職場では「ノーカウント」であった。それはモーグ博士がシンセサイザーの普及を願って一切の特許を取らなかったことや、尊敬するクノール師（82年帰天）が名声より実質を大切にした生き方とよく似ている。「何回発表したかも大事だが何を発表したかの方がもっと大切だ」というのが彼の持論だからである。その意味で回数より中身を重視する実業界や教育現場からのアプローチや評価は大変高く、彼は年間20回を超す講演会に各地へ招聘される。恐らく北方領土と対馬、佐渡島、それと小島を除けば彼が足を踏み入れなかった県は無いというくらいであった。

富山県で講演をした時である。演題を書いた垂れ看板に講演者の名前として兵庫教育大学「鈴木寛助教授」と書いてあったのを、緊張した司会者が区切る場所を間違えて「鈴木寛助^{かんすけ} 教授」とやってしまった。まさか偉い先生なんだから助教授のはずは無いと考えての善意の教授昇任であったと思う。

寛の講演会は主としてそれぞれの県や市の音楽教育研究会主催の研究會や、いわゆるマル文（文部省研究指定校）の研究発表会、それに21世紀の會が後援する研究会などであったが、丁度ヤマハがアンサンブル・オルガ



ンを開発、発売し始めた時期とも一致し、また学習指導要領の改訂が「個を生かす」というのをキーワードにして集団学習から個別化への流れもあり、ヘッドホンを使う電子楽器が脚光を浴び始めたことも追い風になっていた。全日音研という全国規模の研究会ではもれなくこのアンサンブル・オルガンやシンセサイザーの活用が発表され、全国的に電子楽器による音楽授業の展開が行われた。

しかし、現実的に予算が付いたからといっても教師の研修が追いつかないと言うのが実態であった。各地での研修会には数十台のアンサンブル・オルガンやシンセサイザーが持ち込まれ多いときは数百人の先生で会場はあふれた。

これも富山県での研修であったが、シンセサイザーを演奏するときには用いるフットペダル（エクスプレッション・ペダル）をこういう風に使ってくださいと、踏んだり上げたりして見せた。それぞれのグループの演奏を発表する段になって、どうも音がフワフワする。よく見ると一人の先生が足踏みオルガンのペダルと勘違いして、ペタペタと足でこいでいたのである。今なら笑い話であるが当時はそれくらいのレベルであった。

北海道の札幌での研修の後、月寒での懇親会の席上でマドンナと呼ばれていた熱心な若い女性教師が、後に兵教大の鈴木ゼミに入学してきた畠山なよ

海外の音楽授業

子先生である。このような研修をきっかけとして大学に内地留学され、ゼミに入った先生は数名いらっしゃるし、入学しなくてもゼミの研究同人となられた先生も多い。その中にはあの阪本九の元マネジャーで、日航機事故をきっかけに教師に転身された札幌の山本登志一先生や、横須賀のモーツァルト富山洋一先生や、揖保小学校の先生などもおられる。

このように、学外での寛の活動は北海道から沖縄までに及び、ついにはシンガポールやマレーシアでも研修会を行うこととなった。この研修会のマネージャーをしてくださったのは神戸大学時代のオーケストラで当時ビオラを弾いておられたコンサートマスターで先輩の長谷川昌治氏である。アメリカでの生活が長く英語の堪能な長谷川氏は、辛抱強く寛に付き合い各地での講習会を成功に導いて下さった。この長谷川氏の御陰で後で述べるカナダやアメリカでの研究も成功したと言える。

シンガポールは淡路島くらいの大きさであるが、人口の七割は中国系である。従って英語が公用語ではあるが、随所に中国語が混じる。「OKR」のように最後にらの付く英語は完了を意味する中国語「了」である。「○○センター」は「○○中心」と書かれている。この中心の一つで行われた講習会に参加した現地の先生方は、日本の音楽教育にすごく興味を持っており、東洋一の大きさを誇る地元のシンガポール大学出身者が多かったが、そこでは

学ばなかった新鮮なものに触れる眼の輝きがあつた。レクチュアよりハンズオンの方が言葉の壁が無いのでよく判つてもらえた。シンガポールの小学校は終戦直後の日本と同じ午前と午後の二部授業のところが多い。従つて授業の能率を上げるというのが絶対使命のようでノンストップで次から次へと歌が続く。そのバックに用いられるのがやはり電子キーボードのオートリズムで、この流れはドイツのマインツにあるアカデミーでも同じで、リコーダー一辺倒のドイツの音楽教育を80年代にキーボードに転換してしまった。ヨーロッパで最もリコーダーが盛んなのはハンガリーやルーマニアなどの旧東欧諸国である。電子キーボードはさらにその豊富な音色から、アンサンブル学習に用いられるのは必至であるが、まだ世界中でその方向を實踐している国は日本以外ではドイツくらいである。シンガポールは授業の能率化のために導入しているが、寛の目的とする世界はシンセサイザーによるすべての伝統的楽器の置換ではなく、伝統的楽器の習得に義務教育の音楽の授業を使わず、模擬体験として「音楽のしくみ」や「音楽の楽しみ」を「すべての児童生徒に体験させる」ということであり、シンセサイザー演奏を目的としないことはどこでも理解してもらえた。しかし、多くの音楽教師は寛のこの動きに危機感を募らせるか軽蔑するかの反応を示し、書道家がワープロを排斥するがごとき態度で迎える。人口調味料が本だしの世界を脅かしているわ

秋田インターハイ (1984年)



けでは無いのと同じで、シンセサイザーはあくまでも模擬体験の道具として捉えている。よほどの物好きか真にその音を求めている人以外は当然何千年もかけて人類が練り上げた伝統的な楽器音を好むのは当然である。

それでもシンセサイザーでないと困るという事態が1984年に起った。この年のインターハイは秋田県が主催県である。会場は市街から外れた郊外と言うより新秋田空港（山の中）の近くである。開会式の最中でも離発着の爆音で何も聞こえなくなる可能性があった。それならいつそのこと毒をもって毒を制するじゃないけれど、音量をコントロールできるシンセサイザーで開会式の音楽を全部やってはどうかというわけで、平部弥生さんがそのために作曲した音楽で開会式を行うことになった。演奏を受け持ったのは秋田西高校の生徒さん達である。佐藤先生を慕う生徒達が選ばれ準備にいそしんだ。寛は数回にわたって秋田に飛びこの指導に当たったが、本番はやはり離発着機があり見事その問題を解決できた。ただ、暑い太陽の直射でアナログシンセのピッチが不安定になったのは計算外だった。

この年初めての学部ゼミ生二人が鈴木ゼミ第一号として入った。当時助手だった草野先生を除けば最年少の寛の下に来たのが濱野和基君と長尾美和さ

一五〇台の生シンセ (1985年)



のである。その学年（一期生）のクラス担任でもあった寛は「集まる練習」と称してしばしばコンパを行った。中学校教諭にはない新しいゼミという指導形態は新鮮で家族的であった。すべてが手探りであったが、既製の大学と異なり伝統がないだけに斬新な企画がいろいろと計画できた。その一つは実地教育ⅣだかⅤだか忘れたが、県外研修というのがあった。そこで一期生の音楽コース全員を連れて豊田市の井上小学校の根岸校長の指導を受けるべく出かけた二泊三日の旅行（今ではもうそんな行事は無い）は明治村やヤマハの工場見学を含め、豊田市の奥座敷笹戸温泉（勇屋旅館）に泊まり、根岸校長からの素晴らしい指導も受け修学旅行のような行事だった。もうそんな想い出を作れるチャンスはないが好い制度だったような気がする。翌年の学年（田原先生のクラス）は同じコースであったが、寛がマイクローバスを運転して浜松まで往復した。帰りの名神高速は雪だった。

その年はつくばで科学博覧会が催されることとなる。ポルトピアの実績と、前年にロスアンゼルスで行われたオリンピック開会式の八〇台のピアノ生演奏の向こうをはって、一五〇台のシンセで開会式の生演奏が計画された。演奏するのは茨城大学附属小学校の六年生全員である。音楽科教諭の仁田悦朗先生の指揮のもと本当に人類史上まだ例のないギネスものの一五〇台の生シンセは着々と計画が実行に移された。一五〇台のシンセには一五〇個の電源



が必要で、スピーカを持たない当時のシンセはそれを一度ミキサーに入れてアンプに流すという大変な装置が必要だった。土浦市内のビルのワンフロアを借り切った練習であった。作曲は愛知県立芸大の寺井尚行先生で監督が寛ということで、寒い中数回に及ぶ現地指導を行った。皇太子夫妻も臨席される本番は殆どぶっつけで、最初は生徒を乗せたフロートが動かなかったり、演奏以外のトラブルにも見舞われたが外山雄三の三田交響楽団や西城秀樹の演奏などのコラボレーションは大成であった。結局一五〇台のシンセの音は一つのミキサーに集められ会場のPAから音を流したので生の一五〇台の迫力というものは判らずじまいだったが・・・。春休みに入ったばかりだったので息子の聡が一人で羽田まで飛行機でやってきて、一緒に博覧会を楽しんだっけ。この年ゼミの二期生として岩戸淳君と和田依子さんが入ってきた。

翌1986年は三期生として徳永都さん、馬場美直子さん、沖玲子さん、橋本里美さんを迎え鈴木ゼミは院生の木下美華さんを加え七名の大所帯となった。この年は宇都宮大学での学会に全員で参加し、日光見物もして帰った。今はあまり聞かないが、この学会ゼミ旅行は前年の静岡大学にも全員で行き、発表のマナーや論文の書き方を勉強した。

富士通のオアシスを始めとする親指シフトによるワープロを一番に導入し

【因子分析】ゼミ

五箇条の研究訓



全員の卒論や修論を芸術系では初めてワープロ仕上げとした。今では常識であるが当時はワープロは筆跡が特定できないので誰が書いたのか判らないから認められないみたいなき意見もあったが、常に時代を先取りする寛は全員のためにワープロを用意した。

さらに馬場美直子さんはBASICのコンピュータ言語をマスターして、音楽能力診断プログラムを書き上げて卒論とした。その後誰一人としてこの偉業は成し遂げていない。論文の形式は色々あると思うが寛の研究室には研究訓と称して以下の五箇条が学生の目に付くところに貼ってある。

一、新しい事実を発見する

一、仮説に基づいて新しい論を検証する

一、既知の事実新たな検証を加え真偽を明らかにする

一、一見無関係に見えるふつふつな事柄の新たな関係を見出す

一、未定義の事柄を定義する

ここにはよくある「詳しく」とか「広く」というキーワードはない。多くの学生は参考文献や資料の山に埋もれながら、「誰がどう言った」「何に何と書いてあった」の類をこれでもかといばかり詳しく調べ、挙げ句の果てに「それで？」と聞かれると自分の意見が無い。

寛のゼミ生の論文の大きな特徴は必ず【仮説】を掲げていることである。

受験数学と実用数学

仮説無き論文はただの冗長な随筆か作文に過ぎないと常々学生を指導しており、この仮説↓検証というルールは一貫してすべての学生論文で実行され高く評価されてきた。検証のためにはコンピュータを使ってカイ二乗検定や χ^2 検定を行い多変量解析を行う。よく何がパーセントであるから〇〇であるといえるという類の検証が見られるが、有意差検定なしでは語れないことを最初に教えてくれたのは全附連の研究発表での田中正先生であった。何がパーセントであってもたまたまその集団がそうであっただけかも知れないわけで、内閣支持率の調査でも調査時期や対象の違いでかなり各紙で相違が見られるように誤差を小さくする必要がある。そのための基本的な方法が皮肉なことにも数学零点の寛のゼミの特徴となったのである。コンピュータが以前から関数電卓でそれを実行していた寛にとってコンピュータの使用は極めて大きな武器となった。【因子分析】は多分すべての彼のゼミ生がゼミで初体験した。寛は受験数学は零点でも、実用数学には滅法強いようである。暗記と技術の数Ⅰよりも論理の数Ⅲの方が良く理解できたからである。

1984年着任の翌年に出版したアナログ図解による「FM音源シンセサイザーDX7徹底研究」という本ではベッセル関数を駆使してコンピュータ上でFM音源シンセサイザーDX7のシミュレーション・プログラムを書い



て、開発したヤマハの技術者をあつと言わせた大変な代物である。この331ページにわたる殆どの部分はベッセル関数で出力した波形を丁寧に分析解説したのであるが、この本は富士通のOASYSという当時100万円もしたワープロで書き上げた。5インチのフロッピーを2枚使ってガチャガチャと音を立てながらの作業であったが、いきなり版下原稿を送つての出版であったので、校正は無しであった。このワープロは半額に値切つて印税で支払った。それでも50万円だったのである。またこのシミュレーションに使用したのはYIS（ヤマハ製）の究極の8ビットコンピュータである。画像処理にも優れ、当時始めていた16ビットの国産マシーン以上の性能であったが、漢字対応が無理だったのでその後引退したがCAPISの中核となるものであった。当時中曽根首相が音楽をやる人には数学は不要であると発言したことに対して音楽通信と言う雑誌の三月号で「音楽を志す人に数学は不要か」という反論を載せた。

1986年にはリットーミュージック社から「コンピュータ・ミュージック最新技法」を出版し、大学に転勤してから二冊目の本が出るまで三年であった。

1987年遂に北海道から畠山なよ子先生が兵教大にやってきた。鹿児島出身



昭和から平成に
(1989年)



の岩戸君はそのまま大学院に進学して引き続き鈴木ゼミに残った。学部はイラストの得意な愛媛出身の土居由香さんと加古川出身の中村めぐみさんと揃いこれで、北海道、本州、四国、九州と全国からの学生が揃った。

1988年講堂が未完成のため体育館での最後の卒業式では雪が降った。つくば博で知り合った仁田悦朗先生が、兵教大鈴木ゼミに入るためにやってこられた。学部は広島から井上恵美さん地元の大西小百合さんが入ゼミ。

1989年1月昭和天皇御崩御。昭和から平成に年号が変わる。講堂が落成。これから落としての諸行事は自粛という状況ではあったが、記念音楽会は強行された。この年愛媛大の学生時代に田辺研究室から当時学生として附属明石中へ視察に来た井上洋一先生、兵庫県立高校教諭の植村幸市先生、同じく矢野研一郎先生に加え学部は少林寺拳法の川口陽子さんが長崎五島から、佐世保の永柄孝知君、神戸出身の津守由加さんが加わる。この頃のゼミコンパは大学の近くの東条町に両親が持っていた別荘（小屋）で行われることが多かった。この小屋は「E」の一株の値上がり分で建てたもので結局コンパばかりで使ったが、室内ではなく玄関先の外で文字通りアウトドアが多かった。

1989年9月1日～1990年8月31日にかけてソウル教育大学の教授で韓国音楽教育研究会の会長もされた張昌煥教授が寛の下で勉強するため来日。これを機に美術も一緒に日韓共同研究も行った。同じ時期に自宅を大改築す



ISMEの下見でヘルシンキへ (1990年)

るために近くの篠原台へ仮住まい移転。張先生も一緒に観に行った新城市の庭野小学校の研究発表では、張先生が思わず口にした「この子供達は皆音楽家になるんですか」というコメントが心に残った。レベルの高い事を目指すあまり大切な事を忘れかけていた事に気がついた一言であった。

1990年～1991年にかけて科研が当たり、総額四八〇万円獲得。課題番号0251100「音楽科教育のためのDTMシステムの開発」を研究。

1980年茨城県より堀井紹子先生、徳島文理大より原井俊典君、北海道旭川より森定満智子先生、学部生美根有子さんたちがゼミに入る。

この年2年ごとに行われるISME(国際音楽教育学会)の第19回大会がフィンランドのヘルシンキで行われる事を知り第20回ソウル大会で発表するため情報収集の下見旅行に全日本音楽教育研究会の荒川健秀先生と一緒にヨーロッパへ行くことになった。

1990年8月6日成田を出発。ロンドンのヒースロー空港で乗り換え白夜のヘルシンキに夜中に到着。ISME会場はホテルから歩いて15分くらいの所とヘルシンキ大学という二つの会場で行われたが、日本からの参加者も多



父鈴木進の描いたフィヨルド風景（油絵）

かった。現地では貸し自転車借りて移動することもあったが、何しろ石畳の街ではガタガタと振動が激しく手が痺れそうになる。唯一の日本料理の店も一軒あり、天ぷらなど食べたが、吃驚したのは人気のビールがトーゴービールでラベルに日本の東郷元帥の肖像がある。バルチック艦隊を打ち破った東郷はこちらでは未だに英雄なのである。しかし治安はそれほど良くない。荒川氏は交差点で立っているとき後ろからアイスクリームをかけられ、それ注意する振りをして財布を抜き取る掏摸にすんでの所でやられる所であっ

古い木造のオールドチャーチでのコンサートは近年実際に行われることのないラテン語典礼で、異国で母国を感じる懐かしさであった。ともかく学会の発表のスタイルや資料の準備の仕方、時間の使い方などを念入りにチェックし、ソウル大会に備えた。

5日ほどの大会を終え、土日を観光で過ごす事になり、スエーデンのストックホルムへ向かう、半日ほど市内観光の後オスロー経由でノルウェーのベルゲンに到着。翌日はフロム鉄道でフィヨルド観光に出かけたが、内陸部深く入り込んだそれでも海拔ゼロメートルの鏡のような水面のフィヨルドの景観には圧倒された。是非こんどは夫婦で再び訪れたいと思った。坂の街べ

父鈴木進の記事が載った地元の新聞



ルゲンは神戸のような港町で、平地の少ないノルウエーでは当たり前かも知れないが斜面にびっしり可愛い家が建っていた。

寛の両親はこのベルゲンの南の方のハウゲスンドという街に長らく滞在し、画家である父は多くの作品をノルウエーの風景画として残していた。そんな両親が写生をしている風景が地元の新聞でも報道されていた。その意味でノルウエーは寛にとっても想い出の多い国であり、フィヨルドは懐かしい風景でもあった。

土日をベルゲンで過ごして翌日は空路デンマークのコペンハーゲンへと向かう。チボリ公園の近くのホテルだったのでチボリ公園に行ってみた。日本庭園という安っぽい庭園や、蠟人形館など珍しいものがあったが、何より驚いたのは、レストランでちよつと軽く食事をしたときの事である。ビールとパンとサラダのような軽いメニューで食事を終え、日本では絶対に眼にしない光景に吃驚したのは席を立とうとしたときである。何と我々の食べ残したものを隣のテーブルの若者が全部自分たちのお皿に移してしまったのである。確かに食べ終わったのであるからもはや誰のものでも無いわけだが、日本では絶対にそんなことはしない。モノが溢れた日本では捨てる事が文化の高さや豊かさの象徴であろうが、兵役を経験した若者はひとかけらのパンも無駄にしない躰けを自然に身につけているように思われた。その意味では考えさ

父鈴木進の描いた風景（油絵）



せられた事件であった。捨てる豊かさより、無駄にしない豊かさという感じであった。

8月13日はオランダのアムステルダムへ移動。かつて文部省の海外視察団でも訪れた懐かしい街でもある。その時は駅前のホテル「アムス」に宿泊したが、今回はダム広場が見渡せるホテルである。相変わらず世界中から若者が集まってきて何をしているのか怪しい広場であるが、その近くの寿司屋に入った。この寿司屋はヘルシンキの日本料理店で紹介された店であったが、このオランダから我々の旅行に同伴してくれるドイツのアカデミーの会員タックス氏と会う約束をした場所でもある。アムステルダム訪問の大きな目的はシンセサイザーや電子楽器のコントローラーの研究で世界の最先端に行く。シュタ임と言う運河のほとりの会社の視察をすることであった。キーボード以外の電子楽器専用のコントローラーは意外と開発が遅れていて、そのことがシンセサイザーの一般化を遅らせている一因にもなっているからである。確かにそこで眼にしたものは斬新なデザインもさることながらその機能はいずれも大いに勉強になるものばかりであった。また、元ヤマハ社員の服部氏とも再会を果たし、彼からも多くの情報を提供して貰うことができた。彼の案内で夕暮れのデ・ハール城を訪れた時は絵本で見た西洋のお城そのものに感動した。

ドイツの音楽教育

8月15日ドイツのフランクフルト空港からマインツに向かう。ここでは前に述べたアカデミーという音楽の教科書や教材、楽器の開発をやっている財団を訪れる。理事長ツインマーシート教授は明石附属の最後の年に日本で一度面識があり、再会の握手をする。ハノーバー大学のヒンツ先生も加わり地元の小中学校の授業参観を二日に亘って行う。

印象としては小学校は「楽しむ」ことよりもそのために必要な基礎的知識や技術を系統的に学習させるという感じであった。確かに一昔前の日本の一斉授業そのものである。色々な場面でも感じるのだが、ドイツ人は日本人と同じDNAを持っていると感じることが多い。団地でゾロゾロ歩いているのは日本人かドイツ人が多いし、一斉授業が好きなのもそうである。

しかし、日本の音楽教育と基本的に違うのは、最初は集団的な彼らは高学年になるほど音楽が好きになりしかも個性的になることである。80年代の日本の調査では小学校の授業で一番人気が高いのは低学年では「音楽」である。しかし、高学年では嫌いや苦手教科のトップに躍り出る。そして中学以降は不要科目となる。

ドイツでは低学年では必ずしもトップの教科ではないが、中学以降はトップも狙う教科である。ドイツでは毎年ローテーションで夏休みの開始時期が州によって変わるため、8月15日から授業が始まっていたラインランドファ



ルツ州では最初の授業で「自分の最も得意とする楽器を持ってきなさい」という指示が前日に出された高校の授業を参観した。日本ならさしずめ「明日は全員リコーダーを忘れず持っていらっしゃい」ということになる授業であるが、それぞれの生徒がチェロやトロンボーン、リコーダーやバイオリンと様々な楽器を持ち寄って教師の与えたテーマで見事セッションやアンサンブルをやったのけたのにはやはり高学年ほど個性を大切にする教育風土があると感じた。コダーイのシステムによるハンガリー民謡をテーマにした中学の授業では参観者の我々も楽器を持たされ即興演奏を中心にした授業に楽しく参加できた。

僅か数校の参観でドイツの音楽教育を語ることはできないが、タイプ打ちの分厚い冊子を読めばその変遷の歴史を感じることができる。ナチズムの音楽教育は軍事目的に利用された。同じ事を戦前の日本の音楽教育が行ってきたことは周知の事実である。ISMEはもともとドイツが発祥の地であるが、皮肉なことに現在では多くのドイツ人の音楽教師はこのISMEから離脱し、ドイツ語によるドイツ人のための音楽教育システムや研究会を立ち上げている。

また土日がやってきたのでバイロイトヘワグナーの楽劇「ローエングリ



ン」を観に行くことにした。この切符は何ヶ月も前から日本でも売り切れていて、現地でも第三幕が終わる頃でも首から「切符を譲ってください」と書いたプラカードをぶら下げたファンが居るくらいである。我々はアカデミーの顔で当日のバックコーラスの一員から切符を入手するのに成功。マインツからバイロイトまでの列車はハンガリー行きの国際列車であったが、途中ニュールンベルグとかワグナーにまつわる都市を通過してその空気を呼吸することができた。

駅を降りると牧場特有のあの牛の糞の匂いのする街バイロイトであった。観劇のためのドレスを貸してくれる店が駅前数軒ある。ホテルの部屋にもタキシードを掛けておく人形型のハンガーがある。こりゃえらいことになったと思ったが、実際に行ってみると確かに着飾っている人もいたが、普段着の人も多かったので一安心。座布団持参の客も多く、粗末な板のシートは最近更新されたと聞いたがおよそ豪華というものはステージ意外には無かった。遅れて席に着く人のためにその列全員の何十人が立ち上がって通路を作るのに文句の一つも出ない。これは席を譲るとか立って待つという機会が様々な場面で日本より遙かに多い欧米の紳士の自然なマナーなんだと納得。ステージは予想以上に仰々しく、歌舞伎を見にゆく日本人とオーバーラップする。ヨーロッパでいつも感じることは髪の色や眼の色はアメリカ人と同じ

でも古いモノがそのまままだ生活の中に生きて居るのがヨーロッパなんだと言ふことである。それと「質素」が原則的な生き方であると言ふこと。

舞台が終わったあと切符を回してくれたミスターコーラス員をお礼のために市内の中華料理店に案内した。この店を選んだのは彼であった関係でドイツ語でオーダーをかけるのは彼であった。しかし、何ともショボイものばかりを注文する。そこで、気がついて今日はお礼の食事だから全部こちらのおごりですと言ったとたん山のように注文した。

これは我々と同行するタンクス氏も同じで夜ご馳走すると言えば朝から殆ど食べない。そして夜になるとご馳走を腹一杯食って後で胃薬は無いかと聞く。飾り窓に花を飾る彼らは往来の方に向けて花を飾る。

色々観察するとドイツ人は見栄を張るが質素でケチというのがどこにあるのかも知れない。見習うべき事も多いがやっぱりちよつとついて行けない。お陰で我が家のケチで有名な長女は「ドイツ人のようだ」と言われることになる。しかし、ケチの本家はお隣のオランダであることは知っているからそれ程傷ついていない。

バイロイトを後にしてこんどはジーゲンに向かう。この小学校のヴェーン校長先生が張り切って授業を見せてくれるというからである。ジーゲンの



駅まで迎えにきてくれたヴェーン先生は我々二人の重いスーツケースをいっぺんに両手で持って車まで運んでくれた。翌日、市の中心からやや離れた高い丘の上の小学校には新聞社まで来て仰々しい授業参観であった。四年生の授業は日本ではもう観られないいわゆる「教師主導型」の一方通行の授業で、最新の日本製電子キーボードを人数分だけそろえた授業であったが、ここでも日本のアンサンブル・オルガンの思想はまだ普及していない。アカデミーで試作されていたアンサンブル・オルガンは日本製のミニキーボードをただ六人分一つのユニットデスクに収容しただけのものでまだ実用の域には達していなかった。取材に来ていた新聞記者もあまり感動していなかった。

ここジーゲンは観光地としては見るべきものは殆どないが、近くにフロイデンベルグという集落全体が木組みを露出した面白い建造物でできている村に連れて行って貰ったり、ヴェーンさんの家で昼食をご馳走になった後、犬も連れて近くの357mの山に登るとドイツ全体が見渡せるほどの素晴らしい景観だったことを思い出す。犬と言えばマインツの側を流れるライン川の岸辺を散歩していたラブラドル・レトリバーが河に飛び込んでボールを咥えてくる。あまりにも可愛いので飼い主の側に行って名前を尋ねる。Was ist der Name des Hundes?のドイツ語は何も考えずにスラッと出たので自分でも驚く。彼のドイツ語は二十歳までに終了していて、その後三〇



年以上話す事も聞くことも無かったものであるが、何の努力もなしに自然に思い出せる。結局はそう言う環境になれば自然に思い出せるのだと自分でも驚く。翌日はヴェーン先生がオランダ国境に近いケヴェラーという街で模擬授業をやるというのでアウトバーンを一五〇kmでぶっ飛ばす。このケヴェラーからそれほど離れていないエッセンに住むマルグレットさんという友人からプレゼントがホテルに届き、後で電話もかかってきた。見知らぬ異国で身内の声を聞くような懐かしさがありホッとする。電話はドイツ語だったか英語だったか忘れたが2、3分話した。

このケヴェラーの中学校の授業は、コンセントを多く必要とする電子キーボードのため、音楽室ではなく家庭科室で行われた。結果は同じ教師主導型ではあるが、寛も授業の一部を手伝わされて良い経験にはなった。

フランクフルトに戻って最後の訪問地ベルリンに向かう。ここでは丁度東西の壁が壊されつつあったので、寛もハンマーを借りて(有料)自分でかけらを集める(無料)。こここの東ベルリン側のレストランで現地の教師との情報交換の食事会を持った。持参したビデオを見せると未開の土人が初めて文明に接するような反応であった。ブランデンブルグ門の側の楽器店では電子

シンガポールへ

(1990年8月29日)



キーボードが山積みされているにも関わらずである。

8月23日成田に帰国して僅か6日後の29日大阪空港からシンガポールマラッカ クアラルンプールに旅立つ。夏服バージョンのこの旅は全部講演又は研修会の指導である。対象は現地の音楽教育関係者であるが、マレーシアではこれらの研修会はすべて夜の8時頃から開始され、終わったときは日付が変わり「グッドモーニング」という挨拶で終わるといいうのもであった。暑い日中を避けてやや涼しい夜を研修会に当てるといいうのも一つの文化であろう。長い間イギリスの文化圏であった彼らがルックイーストで最初に注目したのは日本であり、特に戦前の日本の教育の名残が文部省唱歌などまだ残る彼の地では、新しくオリジナルの自国文化を確立しようとしていたのである。やや哀調をおびたロマンティックな曲が多かったがその曲を使って寛は講演を持った。9月6日大阪に帰ったのはヘルシンキに出發して丁度一ヶ月であった。長い夏休みではあったが、殆ど家には居なかった。この間にも新築中の自宅の工事は進んでいたが、この年の大所帯のゼミ生を新居に招待することはできなかった。

秋からは揖保小学校の指導が本格的に始まり、岸本校長に引率された揖保小学校の先生が定期的に寛の研究室を訪れることになる。この指導は21世紀

教授昇任

(1991年1月1日)



の会の研究助成校に選ばれて全国発表をする93年11月まで続いた。この損保小学校には何と音楽専科教員がいない。にもかかわらず岸本義博校長は敢えて研究課題を音楽に絞り、全校上げての取り組みをした。寛が関わったのはシンセサイザーとかコンピュータというハイテクではなく、指導案の書き方や授業の進め方などの指導であった。少子化の進んだ何処の学校でも教室は余っている。その余った畳敷きの和室での勉強会はいつも全職員が熱心に参加した。結果的に21世紀の会の助成を受けることになりアンサンブルオルガンやピアノプレーヤーを買い取ることができたのでそれを駆使した研究発表となったが出発点は違っていた。

12月の教授会で寛の教授昇任が決まり91年1月1日付けで教授になることが決まる。

1991年1月教授昇任。2月には南紀ゼミ旅行。3月には元ゼミ生の徳永都さんの結婚式の仲人をつとめる。

多くの学部生と院生を卒業させ1991年4月現住所の新居に帰った年は学部生池田千代さんだけが新しくゼミに入った。

この年4月21日大阪空港からシンガポールへ5日間夫婦で旅行できたのは長女綾さんのプレゼントであったが、この年の本格的な海外旅行は10月17日

話をした相手（ICMC）

Bluce Pennycook/Dales Stammen(McGil)
 ,Michel Century(Banf CTR)Barry
 Vercoe/Tod Machover(MIT) Zack Settlet
 (IRCM)Max Mathew(Stanford),Roger
 Dannenberg(C.Melon)David Wessel(UC
 Berkeley) Dave Smith(Korg)Robert
 Zielinski William McGee

ICMC 91に参加
 (1991年10月)

成田出発のカナダと北米の旅行であった。

モントリオールで開催されるICMC（コンピュータ音楽国際会議）に出席するのとアメリカの大学のハイテク事情を視察するのが目的で、約二週間の旅である。手助けをしてくださったのは前述の長谷川昌治氏（現地ではジョージと呼ばれる）であった。バンクーバーでトランジットのため少し市内観光をしてその日の内にモントリオールに移動した。

Delta Montreal というホテルは会場のMcGill大学まで歩いて数分の距離で便利な所であった。このICMCは毎年開催される学会であるが、当たり外れがあることでも有名で、このモントリオール大会は当たりであるという前評判だった。ここでも多くの人々と握手を交わす。その中でもペニーカック教授は75年にトロント大学を訪問したときの助手だった。16年ぶりの再会である。

パターン認識が目玉と思って参加したが、それ程大した発表は無く、リアルタイム・ピッチ・トウ・MIDIのデモンストレーションも未完成くさい代物であった。ダンネンバーグとは二度目の握手であるが単音レベルでのピッチ・トウ・MIDIはほぼ実用の段階を示し自動伴奏システムとうまく連動していた。マックス・マシユのレディオ・バトンは唯一実用の生演奏を

やっていたが曲が難解でやや残念。現地の日本人院生藤永一郎氏が楽譜認識プログラムをほぼ完成させていたのが印象的であった。まだこの程度かという印象とここまで来たかが入り交じっているが総体的には翌年（サンノゼ）に参加する必要を感じたので、50ドル払ってICMAに入会した。寛が開発に携わったピアノプレーヤをハイパーカードのスク립トでコントロールしていたのが結構人気を集めていた。開発者のロバート・ツイレンスキーとはそのソフトを送ってくれると約束してくれた。この大会を支配していたコンピュータはマックとネクストであった。ウインドウズは誰も使っていなかった。ハイパーカードは初心者でもBASICより簡単にプログラムを設計できるオブジェクト指向のソフトであり、それを駆使できるMacがコンピュタミュージックの定番であることを感じさせる会でもあった。今でもやたらと面倒くさい音楽用アプリはウインドウズ対応のモノが多い。

カナディアン・メープルの見事な紅葉を後に20日ボストンに移動。日曜日だったのでシーフードの旨いヨットハーバーの側の天皇夫妻も来られた店でディナー。ボストンではMITでネグロポント博士やトッド・マッコイヴァーと会うのと、バークレー音楽院でロジャー・ブーレンジャーやデイヴィッド・マッシュに会うのが主たる目的であった。日本での講演会の参加



料が五万円だったネグロポンテ博士は気さくに迎えてくれて、その後メディアアラボまで案内してくれた。レゴを使ったロボット制御言語が面白かった。パークレーは専門学校と全く同じ雰囲気で、こんな環境で音楽の勉強なんかなできるのかなと疑問に思った。しかし、多くのジャズプレーヤーを輩出しているのだからやはり大したものだ。

翌日は16年ぶりのニューヨークへ。ここではコロンビア大学とジュリアード音楽院を訪問するのが主たる目的である。コロンビア大学と言えば当然あのピアノのペースメソードで有名なロバート・ペース博士に会うことが目的で、ジュリアードの方は寛の教科書となった本の著者であるハーバート・フウ博士とハワード・キャス教授に会うのが目的であった。超VIPなこれらの人々は気持ちよく寛を迎え接待してくれた。ペースメソードは日本ではよく判らなかったが直接本人から話を聞くことが出来てよくわかった。ジュリアードではジュリアードのロゴの入ったボールペンをたくさんお土産に買い込んだっけ。

翌日はMIE^{*}（アメリカで開発された電子鍵盤楽器とコンピュータを結んだCMIシステム）の会場シカゴへと飛ぶ。空港近くのホテルが移動に便利なのでオヘア・マリオットを拠点とする。ハワード・マッシーとあのワル



ターカールロス（現在性転換してウエンディ・カールロス）が出迎えてくれるはずだったがカールロス嬢は来なかった。翌24日朝6時20分の飛行機でグラントラピッツの学校見学に行く。小学校と中学校を參觀したがCMIとしての設計のうまさとハイパーカードのスク립トだけで動いていることに感心。ただナングレーディドの選択教科の音楽の授業であるため将来エリート進学コースを考えて居ない黒人の生徒が目立ち、多くのアメリカの高学歴者が音痴的傾向が強いことと関係があるような気がした。小学校の方は私立校で白人の子女ばかりである。ここでは専科教員が将来の教養となるような教育をMIEでしていたような気がする。周知の通りアメリカでは義務教育の必修科目に音楽は無い。部活動のような課外活動をするスクールバンドのようなものはたくさんあるが専任の教師が関わっている例は公立校では殆ど見られない。アメリカは音楽教育の反面教師である。開発者であるジェフ・キムプトン博士は教育出身であるが寛のようなアンサンブル教育には否定的である。悪天候で遅れた飛行機がシカゴに戻った時はあらゆるサービスの終わった11時すぎであった。電話にでてくれたボーイの奥さんの手作りサンドウィッチで飢えをしのいだ。

翌日はミルウォーキーの有名な音楽出版社ハルレオナルド社を訪問する。夜



はノースウエスタン大学も訪問。夜はシカゴ大のハワード・サンドルフ教授のお宅に招かれたが食事は外食のイタリア料理でうさぎか鹿の肉を食べたような気がする。

次の日はスポケーンというカナダ国境に近い町に飛ぶ。ここで平部やよいさんのエレクトーン・コンサートが開かれるので現地人の反応を見るために行った。予想違わずお客の九割はシルバーで、昔のハモンドやウィリツァーオルガンの経験者であるが、みんな平部さんの演奏とそれが重ならないようであった。平部さんの使用したエレクトーンは予めコード進行やリズムパターン、レジストレーション等がカートリッジで用意されているため、何処までが彼女の生演奏なのかが判然としないのである。電子オルガンがプレーヤーからオルガンの楽しみを奪ってしまった皮肉な結果を見た気がした。今の電子オルガンは全部シンセサイザー音源である。コントロール（演奏）部分をプログラムに助けて貰ってまで人前で演奏するのかという顔でお客は帰っていったような気がした。

残る四日は西海岸を駆け抜ける。サンフランシスコに移動してユニオンズケアーのホリデーインに泊まり、まず早朝からスタンフォード大学に行く。ここでの面会者はあのDX7に使ったFM音源の開発者ジョン・チョーニング博士である。お昼の食事を一緒にしながらマックス・マシユー教授とも再



会。午後はパスポートデザイン社を訪問。音楽ソフトの最先端を見学。夜はジョー・カバコフ博士と意気投合。翌日はロスへ移動。MIEのソフトを書いた若い菜食主義者のケヴィン宅をハリウッドに訪問。夜は玄米すしを付き合わされる。翌日はカバコフ博士の運転でメキシコ国境に近いUCサンディエゴ大学にダイアナ・ドイチ博士を訪ねる。数々の聴覚イルージョンの発見やパラドックスを論証したあのドイチ博士は気さくなおぼちゃんだった。ジョン・ケージの作品を生きた楽譜で見ることができたがチャンス・オペレーションの彼がまっとうな弦楽四重奏を書いているのを見てやはりあれはインチキではなく本物だったんだと、ピカソの再認識のような感動を覚える。ロスに戻ってキャルアーツを翌日訪問したとき興奮したのは先駆者モートン・スポトリック博士とも握手ができたことであつた。若いマーク・コニグリオが熱く語るインタラクターというソフトも勉強になった。お世話になった人々に別れを告げ一人で帰国する寛はやる気満々だった。11月2日成田から大阪。

1992年 この年は滋賀県の中学教師吉田正信君が入ゼミ。とにかくタレントである。熱心でそれでいて暖かくテンションは高い。お酒も強い浄土真宗

ソウルでISME
(1992年7月)



の住職である。従ってニックネームは「ごえんさん」。

7月はいよいよソウルでISMEが開かれる。通常の学会発表であれば一人の持ち時間は15分から20分であるが、演奏を交える寛の発表のために30分という時間と広いホールが与えられることになった。その演奏をやってくれるのが仁田悦朗先生の生徒達と、東京の目黒を中心とする複数の中学からヤマハ音楽教室に通う上原まなみさん、青目博子さん、星野奈穂美さん、澤田香織さんの女子中学生四名である。六月と七月は毎週末に東京に出かけ中学生の指導にあたる。合計七回の指導で彼女たちは完全に曲をマスターした。しかもシンセサイザーは初体験の生徒ばかりである。

7月26日。現地会場となるホテル新羅で東京からの生徒と合流。リハーサルを行う。演奏は完璧すぎるくらいであった。

翌日、本番は朝9時から10時半まで。会場はエメラルド。演題は「Using Electronic Instruments as an Effective Approach to General Music」である。同じ時間帯の他の会場では現代(現代音楽)コードもオーケストラの発表もあったようであるがこの寛の会場は定員二三百のほぼ7割を埋め尽くして開始された。その後着々と数も増え韓国のNHKに当たるKBSが取材していたこともあって最後は満員となった。シンセサイザーの歴史からその新しい使い方

サンノゼICMC 92
(1992年10月)



としての教育的利用を、小アンサンブルからフルオーケストラまで、雅楽演奏も含めてその可能性の大きさを訴えた。最後の30分は仁田先生がビデオと実物を使って発表し、高萩先生が通訳をされた。会場を埋め尽くした音楽教師達からは発表終了後も質問や触らせて欲しいという希望がかなりあった。終了後、慶州や釜山の観光をしながら1週間ぶりに大阪空港に降りる。

吉田正信君に留守を頼んで、10月13日 成田からICMC 92に出席するた
めサンノゼに向かう。14日(水)朝8時サンノゼ総合教育出張所に向き出
張所におけるハイテクの利用状況の説明をケン・ヒギナ氏・ロバート
ソン女史より受ける。所長のジェームス・バウグマン博士は学歴詐称の疑い
で役所に呼ばれて不在だった。さらに詳しい説明は彼に代わってウイリアム
ス・エルレンドソン博士とデイブ・ドウズ氏からあった。その後リンカー
ン・映像表現芸術高校の午前中の授業を参観させてもらってサンノゼ・テク
ノロジー博物館に行き昼食を一人とする。翌15日長谷川氏と合流。二人でサ
ンノゼ・ハイ・アカデミーを視察。午後はサンノゼ州立大学音楽学部でアレ
ン・ストレンジ教授と握手。午後は映像美術学部のジョエル・スレイトン教
授と面談。夜は彼らと夕食。ICMCの方は今年は外れのようで、∞月末で
プログラムが3分の1も埋まっていない状態で、あまり期待はできそうにな



い。ここでの発表は昨年のモントリオール大会の二番煎じが多いという印象であった。ヤマハの宮永氏や東儀氏は熱心に各会場に顔を出していたがやはり企業戦士は違うなあと感心。サンノゼから目と鼻のサンフランシスコまで出かけてハイパーMIDIのソフトを物色。遂に現地楽器店のオーナーとの接触到成功。翌日ICMCの会場で現金70ドルで譲ってもらった。これが今回最大の収穫という感じ。来年早稲田大学が会場となるので大照教授等が盛んにアピールしていた。

19日(月)にはシカゴに移動。20日シカゴ大、ノースウエスタン大でモーグの新しい純正調キーボードを試奏する。翌日はグランドラピッツで昨年見学した中学を再び見学。同じ先生の授業だったが、格段に機器の操作がうまくなっていた。この時ソウルでの記録ビデオをMIEのキムプトン博士に見て貰ったが反応はさっぱりだった。やはりMIEはアンサンブルには興味が無いことがはつきり判った。22日はシャンペインに日帰りでイリノイ大訪問。この帰りの飛行機がオーバーブックキングで乗れなかった。そうすると係員が隅っこに手招きしてそっと渡してくれたのがアラスカを除く北米乗り放題の無料チケットだった。残念ながら使うヒマも機会もないままになったが、そんなこともあるんだと知った。23日ミネソタ大、24日は今回のシカゴ訪問の主たる目的であるピアノ・ペダゴジー学会への参加である。ヤマハは



ゼミ一〇周年
(1993年)



デイスクラビアの名前で自動ピアノをここアメリカで販売しているが、それをどう活用するかという発表を観るためである。『II』のトッド・マッコバーの母親がピアノ教師なので親子で来ていたが複数のピアノの共演(一台は無人)というデモンストレーションが面白かった。ここでジョージ・リタースト氏と握手をかわした事が後に寛に大きな影響を与えることになる。シカゴで長谷川氏と別れ、10月25日大阪帰国。この留守中に長女綾さんに彼氏ができ、婚約。翌93年3月に結婚した。

1993年は学部一期生だった野崎宣器君が院生としてゼミに帰ってきた。前田圭子さんも入院。学部は岡朋子さん、寺田英子さんと活況を呈してきた。そこでゼミ一〇周年を期してゼミ研究紀要を創刊。またそれを記念して初のゼミ10周年同窓会を大学近辺の東条湖湖畔で行った。これには鹿児島から岩戸夫妻が車で駆けつけた。

9月10〜15早稲田大学でICMC93開催。これには吉田正信君も連れて行く。

このICMCこそ寛にとってエポックとなることが起こった。長谷川氏から予めインフォームされていたが、フランク・ワインストック (WeinstockFrank)

早稲田大学ICMC93
(1993年10月)



というシンシナティ大学の助教授が自動伴奏のデモンストレーションをやるという事だった。自動伴奏についてはロジャー・ダンネンバーグ（この会場でも再会）が一番前を歩いていると思っていたので大したことは無いだろうと高を括っていた。ところがである。何とピアノの右手や左手の演奏を認識したコンピュータがコンチェルトのオーケストラ部分を伴奏するというのである。満員の会場の後ろにはそつと隠れて見ているダンネンバーグの姿もあった。いよいよデモンストレーションが始まるともう驚きの連続である。演奏者の自由なテンポ変化に追従する位は当たり前で、長いカデンツアの間も認識するし、急に曲の途中から演奏してもその場所を認識する。ヤマハがピアノプレーヤを提供しての発表であったが、多くの参観者はこの発表に秘められた重大さに気が付いて居なかった。従来のカラオケ型の伴奏ではオーケストラに自分が合わせなければならぬし、カデンツアなんぞは絶対に不可能だった。従って多くのモーツァルトのコンチェルトの第2楽章のようにオーケストラではなくソロから始まるような曲は不可能だったからである。今でも多くの酔っぱらったカラオケマニアは伴奏にお構いなしに自分のテンポで歌っているが、それが無くなるのである。勿論ダンネンバーグのものでそれも可能であったが、ピッチ・トウ・MIDIの原理は単音レベルでしか今でも技術的にはできなくて、ピアノのように同時に複数の音が鳴るものでは



フランクさんと鍋を囲んで

(1994/12)

フランクさん来日 (1994年12月)

不可能だったからである。まさにこれはピアノプレーヤーが複数のMIDIデータを同時に出力できることに目を付けたグッドアイデアである。しかもこれを開発したのはシンシナティ大学のピアノ科のFrank Weinstock助教というれっきとしたピアニストであるから驚きである。この日を境として寛のその後の研究の方向が決まる。

早速フランク助教に接触。翌年12月もう一度彼を日本に呼んで兵庫教育大学に来てもらうことになる。

年が明けて1994年一月。84年以来続けているMBSこども音楽コンクールの審査員の全国大会であるTBSこども音楽コンクール審査員を引き受ける。ここで宮城教育大学の日暮教授と再会。その年から兵庫教育大学に入院する丸中新一先生のことを頼まれる。そして、丸中新一以下青井雅人、来嶋英生、佐藤大二、の各先生、洲脇範子、藤田貴子、藤本真規子の三学部生を得て鈴木ゼミは総勢院生六名学部生五名の11名の大所帯となる。

やがて12月4日 第一回フランクさん訪日が実現する。10日ほどの滞在であったが退官された岡田教授の部屋を使って貰って毎日寛の車で大学に通ってくれた。学生と鍋をかこんでのコンパやマエストロと名付けた彼のソフト

**1995年1月17日
阪神大震災。**

のデモンストレーションなど学生にとっても良い刺激だったと思う。寛の家にホームステイをしていた彼は、日本間で畳と布団、日本式入浴その他の難しい課題を次々とこなした家族ともわけ込んでいた。

身体が宙に舞い、ロックした窓が勝手に開き、家中あちこちでガラスの割れる音がして、「シーン」となった。突然たたき起こされたカラスがギャーギャーと騒ぐ以外は何も聞こえない。停電でテレビもラジオも点かないので状況が把握できない。そうだと思い出して車のテレビに気がついたのは一時間以上たってからだった。画面には倒壊した阪神高速の高架の姿。外にはその映像を撮影しているヘリコプターが遠くに見える。その間に掃除機が使えないのでモップか何かで床に散らばったガラス（殆どがグラス）の破片をかたづけていた慶子夫人がコーヒーの濾紙で何やら濾し始める。何と食器棚から飛び出して割れた酒瓶の底に残ったウイスキーを集めていたのである。それが彼女の最初の復旧活動であった。

この日は現地16日のフランクの誕生日であった。ニュースを見た彼が国際電話をかけてきたのはお昼前だった。まだ、窓の外は真っ黒な煙があちこちからあがり、被害全体の様子は把握されて居なかったが全員無事だと伝える

と良かったと言ってくれた。その直後こんどはドイツのマルグレットさんからも国際電話が入る。彼女の友人の安否を確かめる電話だったが、その友人の住んでいた当たりの「六甲道駅付近は高架が崩落倒壊するほどの激甚被災地だったので窓から見る限り無事とは思えなかった。勿論電話は不通だったので確かめようがないのでまた連絡すると電話を切った。午後になって無事が確認できたのでドイツに電話。後で判ったことだが国内よりも国際線を優先する電話のシステムなので国際電話だけがかったようである。国内でも番号の頭に国番号から付けるとかかったと言う話も後で聞いた。海抜一二メートルの寛の自宅からはあちこちから炎や煙の上が大変な様子が見えたが、家は家具が走り回ったり、食器が割れたりという被害はあったが昼前に電気が復旧してからは暖房や冷蔵庫が使い一枚の窓ガラスも割れなかったのを助かった。研究室も色々なモノが落ちて大変だったらしいが丸中君から片付けて置きましたと連絡が入る。後で判った事であるがその時大学当局は学生や職員の安否よりも設備備品の損害状況の調査の方が大切で走り回っていたらしく、中には平常通り授業をしていた教官もあったと聞く。そう言えば大学から如何ですかという電話は無かった。寛の近くの神戸大学は登校途中の学生がナップを背負ったまま、停電で消えた信号の代わりに交差点で手信



号の交通整理を自発的にやっているのを見たし、既に学生の被害を把握した神戸大学当局がボランティア組織を作って救助に向かっていた。兵教大がボランティアを組織して神戸商船大学へ派遣したのは随分後になってからである。思い出しても恥ずかしい。

水道は復旧まで一ヶ月ほどかかったが、寛の家の近くの祥龍寺の井戸からは「六甲のおいしい水」がいつでも手に入ったし、近くの川から汲んできた水で水洗便所のタンクを満たしておくことはできた。4月頃には殆どのインフラは復旧したが、ガスが最後までかかった。と言うことは風呂には苦労したということである。しかし、有馬温泉をはじめ温泉には事欠かない兵庫県はちよつと車で一時間も走れば当時全部無料開放だった温泉には贅沢に入れた。日頃からアウトドアが大好きでキャンプ用品は殆ど持っていたのでインフラの不備には強かった。被害の少なかった我が家には一時4家族程が頼って来ていたこともあったが、食料品の調達だけは苦労した。給料日に被災したのでそれを引き出したくても銀行が駄目で、現金も底をつきこどものお年玉を回収してなんとか切り抜けた。やはり塞翁が馬である。空調が変な音を立てるようになった講堂で定期演奏会では3回生がシンセ合奏でガーシュインの「パリのアメリカ人」を演奏。その後卒業演奏会も無事に済ませること



第二回フランク来日
(1996年)



ができた。

四月には元学部3期生の橋本里美さんが現職派遣でゼミに帰ってきた。学部生桑名成典君を加え、品木下美華さんや間もなく受験入院する大熊藤代子先生も加えた総勢11人で愛媛大学（道後温泉）での学会出席も秋には挙行された。

揖保小学校の研究も出版にこぎ着け、音楽の友社から「やさしいコンピュータ活用法」というタイトルで、付録に寛がプログラムを書いた「ハイパーMIDIレッスン」もフロッピーで付けた。しかし、時代はMacからWindowsへと傾斜し始めていた。残念ながらハイパーカードは非常に優れているのに今では一部のMacファンの語りぐさになりつつある。

翌1996年の学会は金沢大学であったが、新に学部ストレート院生の谷口葉月さん、和歌山県現職の中野千恵先生、それといつもの木下美華先輩、大学祭実行委員だったため留守番となった伊藤正子さんを置いて参加。

10月末第二回のフランクさん来日。教授に昇任した彼は今回は八角堂でのデモンストレーションもあり、鈴木宅でのゼミ生を交えて楽しいパーティも催された。その時の顔ぶれが上の写真である。淡路の震源地や福良の人形浄瑠璃などへ案内したが、心から哀悼の意を表してくれた。



1997年約束通り大熊藤代子先生入ゼミ。それとこれも予約済みの山梨県現職の葉袋貴先生、学部は松阪育美さんが入ゼミ。この年カナダやヨーロッパの音楽大学関係者が研究室を来訪。折角の機会なので院生も交えて研究協議会を行った。この辺りから逆転して海外からの視察が増え、寛の海外旅行は減る。

1998年3月明石大橋開通に伴う行事で親子三代渡り初めに選ばれ両親と寛夫婦と娘夫婦が本州側から渡ることになっていたが、当日悪天候のため徒歩での渡橋は中止となりバスで折り返す。しかし一応新聞には載った。この明石海峡大橋は片道5km以上あるが、これを歩いて渡る行事に応募して抽選に当たる。記念のTシャツは未だ取ってあるが何しろ徒歩で渡るのは今後何かの事故で車が通れなくなる時以外には無いので夫婦と次女で垂水駅から歩いて舞子駅北側から橋に入る。岩屋サービスエリアで町に降りて休憩後再び歩いて戻り朝霧駅で万歩計を見たら23kmも歩いていていた。

4月には茨城県から内田有一先生、ストレートで香西久美子さん、学部生岩田明君、家尾谷直宏君が入ゼミ。

第三回フランク来日 (1999年)



久美浜海水浴の帰り(出石で)



1998年6月以前シカゴで開催されたピアノ教育学会が京都で開催されるのに合わせて第三回のフランク訪日があった。今回は表敬訪問なので大学には行かず鈴木邸に連泊。それでもマエストロの最終チェックを共同で研究した。1998年のゼミ生は京都の尾崎公紀先生。学部は片井俊男君、吉田雄一郎で男性が6人の女性一人の「おっさんゼミ」になった。片井君の卒論には必要なデータを集める時間がなかったのを尾崎先生が自分のデータを使っても良いと言うことで協力してくれてデータ処理の目的や方法は異なるので何ら問題は無く、麗しいゼミ生間の友情を見た気がした。

2000年7月久々に長男聡君の結婚式でハワイへ。この年の入ゼミは裏ゼミ院生井上久美さんだけでややバランス不調。この井上さんは発足したばかりの総合コースへ変更が許されたため、裏ゼミとなるも、「MID」の研究に熱心に通い、同じ時期スエーデンから音楽で留学していたカーリナ嬢とも仲良くしていたため音楽棟に出没する方が多かった。

2001年は岩手県現職の名須川博先生と学部生橋本澄子さんが入ゼミ。一挙にゼミ生が減った研究室の細かいゴミ捨てや食器の始末、掃除などをまるで女性のように寛の世話をやってくれるので翌年入った女性のゼミ生に「マダム」と言うニックネームを頂戴した。夏休みには初めてゼミの海水浴を京都久美浜海岸で実施。9月には次女の淑さんの結婚式でバリ島。

この頃の寛の研究は日本の音楽教育がどこがおかしいということから、その原因を移動ド唱法に対する誤認では無いかと考えた研究に入る。名付けて「音痴研究」である。すでに99年のテレビ番組「特命リサーチ200X」という番組に出演してその前哨戦はやったが、2001年3月にBS朝日のハイビジョン番組「バラの舞踏会」で再び取り上げられるに至ってついにその研究が本格的になった。今までの研究は電源装置を必要とする物であったが、この研究は人間の認知のメカニズムや心理学という電源装置の要らない謂わば座学なので結果のプロセスで電源装置の必要な場合はあっても結果は論文と云ういう形式で発表することになる。従って一握りの学会誌愛読者かマニアにしか結果は広がらない。そこで寛はインターネットホームページにコーナーを立ち上げたのである。当時でも一日に数百ヒットがあり一躍そちらでは有名になったお陰でのテレビ出演であった。2003年には自分の音痴が治るかという人体実験を申し出る新聞記者が社までやってくる。読売新聞の科学部本間雅江記者である。3時間で「柔」を歌えるようにすると言った手前大変だったがその成功記は4回に亘って全国紙上を騒がす。

不本意ながらオンチ治療の大家というレッテルを貼られてしまったが、勿論素人ではないにしろ大家では無い。

寛が最もこだわっているのは「絶対音感神話」である。インターネットで

「絶対音感」と入力して検索すると五七万件ヒットする。その中でもウイキペディア版は最も信頼できるのでここに紹介する。

絶対音感とは音の高さに対する絶対的な感覚。一般に、西洋音楽を学習した者は、二音間の音の高さの違いの大きさ（音程）に対して一定の感覚を保持する。これを相対音感という。これに対して、絶対的な高さの感覚を保持する場合、この感覚を絶対音感と呼ぶ。

絶対音感とは、絶対的な音の高さに対する記憶であると言い換えることもできる。

絶対音感とは、必ずしも機械のように「完全」な精度を持っている能力というわけではなく、その能力の範囲に当てはまる絶対音感保有者の中でも高精度であったり、高精度の者よりも僅かに精度が落ちるという絶対音感保有者がおり、感覚そのものは決して不変ではなく、その能力を形容する言葉が普遍的になっている向きもある。

ただし、おおざっぱな高い、低いについてはだれでも絶対的に言い当てることができるのであって、絶対音感のある者、とは、そ

の精度が高い者、おおむね半音以内の精度を持っている者、と言うことができる。

また、絶対音感のある者が相対音感を持っていない、または相対音感が劣位にある、といわれることがあるが、そのような研究報告は知られていない。

絶対音感の習得には臨界期があり3歳〜5歳くらいの間に意識的に訓練をするとかかなりの確率で身につけることができるが、それを過ぎると習得は困難である。また、身につけると便利ではあるが、音楽的才能とは関係がない。

絶対音感を持っていたであろう著名人の代表例として、ヴォルフ・ガング・アマデウス・モーツァルトがよく挙げられる。

絶対音感のある者の多くは、音を、絶対的な音の高さに付けられた音の名前（音名）で感じ取る（そうである者であっても必ずしも始終そうであるとは限らない）。それはイタリア音名（ドレミ）であることが多い。このため、絶対音感を持つ者には固定ド（音名唱法。ドレミを、調にかかわらず、楽譜上の位置に固定して歌うこと）の者が多いと言われる。

（以下略）

絶対音感保持者の音楽的能力は本当に優れているのか？

最相葉月の『絶対音感』と言う本が2002年発表されてから、あたかも絶対音感が優れた音感であるかのごとき一種のブームが起こつたのである。もしも、絶対音感が優れた音楽家になるための条件であるなら所謂名演奏家や作曲家は非常に高い確率で絶対音感を持っていたはずである。しかし、皮肉な事に絶対音感売り物にした演奏家や作曲家は所謂現代や前衛と呼ばれるものに集中し、19世紀までの大家はほぼ全員非常に優れた絶対音感に基づいてその音楽活動をしていたことが判っている。

そこで寛は学生全員を対象にその音楽的能力と音感の関係を調査した。約5〜7パーセントの割合（欧米に比べると高い）で存在する絶対音感の学生と71パーセントの相対音感の学生（残りは未熟音感や不明）の間に音楽的能力の有意差があるかどうかを検証して最相葉月がでっち上げた絶対音感神話を崩そうと試みた。女子学生の方が若干絶対音感保持者が多いのはピアノ等のお稽古ごとをやっている比率が高いからである。

以下の12項目は音感が必要とする音楽的能力である。これらの能力が高いほど才能ある音楽家に近い音楽的行動が可能になる。これを音楽的聴覚と呼ぶ人も居るが、音楽的聴覚には実際には鼓膜を刺激しない内的聴覚も存在するのでこれを含めないものとする。

- 1、単音の識別
- 2、旋律から主音を抽出
- 3、旋律の構成音を抽出
- 4、旋律に合う和声を考える
- 5、旋律を移調する
- 6、和声を移調する
- 7、CDから音を聞き取る
- 8、楽器から音を思い浮かべる
- 9、無調の音楽が楽しめる
- 10、調性音楽の情報がわかる
- 11、即興でセッションできる
- 12、旋律を変奏する

◎が多いほど優れた音感と言えるわけだが未熟・混乱音感(殆どの音痴と言われる音感)を除けば、絶対音感(4つで相対音感の6つより少ない。○や△もカウントすると「単音の識別」と「CDから音を聞き取る」等の絶対音高認知の能力以外は相対音感より劣ることが明白となった。英語でパーフェクト・ピッチと呼ぶ音感があるがこれは全部◎となる。たった単音の音当て

	未熟・混乱音感	絶対音感	相対音感	完全音感
単音の識別	×	◎	△	◎
旋律から主音を抽出	×	×	◎	◎
旋律の構成音を抽出	×	△	◎	◎
旋律に合う和声を考える	×	×	◎	◎
旋律を移調する	×	△	◎	◎
和声を移調する	×	△	◎	◎
CDから音を聞き取る	×	◎	○	◎
楽譜から音を思い浮かべる	×	◎	○	◎
無調の音楽が楽しめる	×	◎	△	◎
調性音楽の情報が分かる	×	×	◎	◎
即興でセッションできる	×	×	○	◎
旋律を変奏する	×	△	○	◎

ができるだけで、それができるからどんな音楽的能力と関係があるのか判らない絶対音感を優れた音感であると神話化したり、絶対音感の能力を開発すると称するホームページや教室がわんさか出現する有様。

養老孟司先生もはっきりとこう述べている。

「あらゆる高等動物は、生まれつき生きるために絶対音感がある」

これは非常に正しい。子供のペンギンが親の鳴声の絶対音高を認知できなければ親子は離ればなれとなり、餌に有り付くことはできない。言語という高等なコミュニケーション手段を徐々に身につける人間は絶対音感に依存しなくても音声によりバリエーションの豊かなコミュニケーション手段とすることが出来る。この絶対音感に対する依存を解消する音感が相対音感である。つまり、単音に意味があるのではなく、音と音の組み合わせや音程、機能などの情報を認知することばの学習に似た発達が始まる5才前後を機に絶対音感はその役割を終える。

役割を終えずに、依存を続ける5%の人たちは、「音階」「調」「和声」という音楽情報を膨大な単音の組み合わせとして理解するしか方法がない。そのような音楽愛好家がピアノという楽器の普及に伴って増加したのが20世紀であった。ピアノのキーの名前を欧米ならC D E F G Aのようにアルファ

ドレミで歌うキーボード？

ベツトでラベリングする。戦前の日本でハニホヘトという音名唱を用いたのと同じである。しかし、戦後の音楽教育の標準となったのは「移動ド」で歌う相対音感によるドレミファソラシである。やっかいなのは鍵盤楽器を習うとき初心者ほど黒鍵の少ない曲から入る。やがて#やb等の調号が書き込まれた「平行移動したドレミ」へと曲が変わっても相変わらずハ調のままのドレミで言うのが「ハ調読み」又は「白鍵読み」と言われるもので、音名も階名も同じ名前のフランスやイタリアと同じで困ったものである。

寛はこのことを音楽教育の最重要課題と考えている。ある時「ドレミで歌うキーボード」という謳い文句の楽器が誕生した。広告を見て寛は直ぐに社長にメールを打った。「日本の音楽教育は移動ドを原則として戦後やってきました。確かに一部の鍵盤奏者にはこれが理解されていません。その結果一流のピアニストのくせに移調して演奏するとか、即興的に伴奏をつけるとか言う能力を欠いたままの人がいます。本当の音感は相対音感で、名曲の99%はそのコンセプトで作曲されています。貴社ほどの会社がかかる重要な問題を考えないで製品を企画されたことを大変残念に思います」

全商品が撤収され、改良の末「ハ調で歌うキーボード」と装いも新たに発売されたがそんな訳のわからんものが売れたとは思えない。3億円の損害が出たと後で聞いて、気の毒だとは思ったが音楽教育の根幹に関わる事であっ

ファとシを教える

たので寛は譲れなかった。

鍵盤を弾く人は平気で「ファの#」とか「シのb」などと黒鍵をさして呼ぶ。彼らとて音大受験ではちゃんと「Fis（フィス）」とか「B（「ベー）」と回答したはずなのだが、ついやってしまう。このフィスとかベーは単なる黒鍵ではなく、いくつか付く黒鍵を必要とする調号の、シャープでは最後に付いた高さを「シ」と読む新しいドレミに平行移動することを大学生に教えてやると目から鱗で、一瞬にして調の概念が形成される。同様に最後に付いたbは「ファ」と読めば良いことは直ぐに理解出来る。

このファやシは音階では導音と呼ぶ機能があり、属和音や下属和音にも含まれることが理解できた学生は指だけが器用に動く音楽専攻の学生より良い音楽教師になれるかも知れない。機能と声とは本来このような導音と主音の関係から生まれたものであり、Fのコードをファラドと教える馬鹿教師には判らない世界である。

中学校の教諭時代からずっと寛はこの「移動ド」と「相對音感」をメインテーマとして音楽教育の中核に据えてきた。なのに、目障りな「絶対音感」が目の前を五月蠅くチョロチョロするようになったので、院生の修士論文もこのテーマを必ず含めるように指導した。世間では鈴木ゼミはシンセサイザーやコンピュータの研究をしていると思われがちであるが、実はこのこと

鈴木寛の S M L 理論

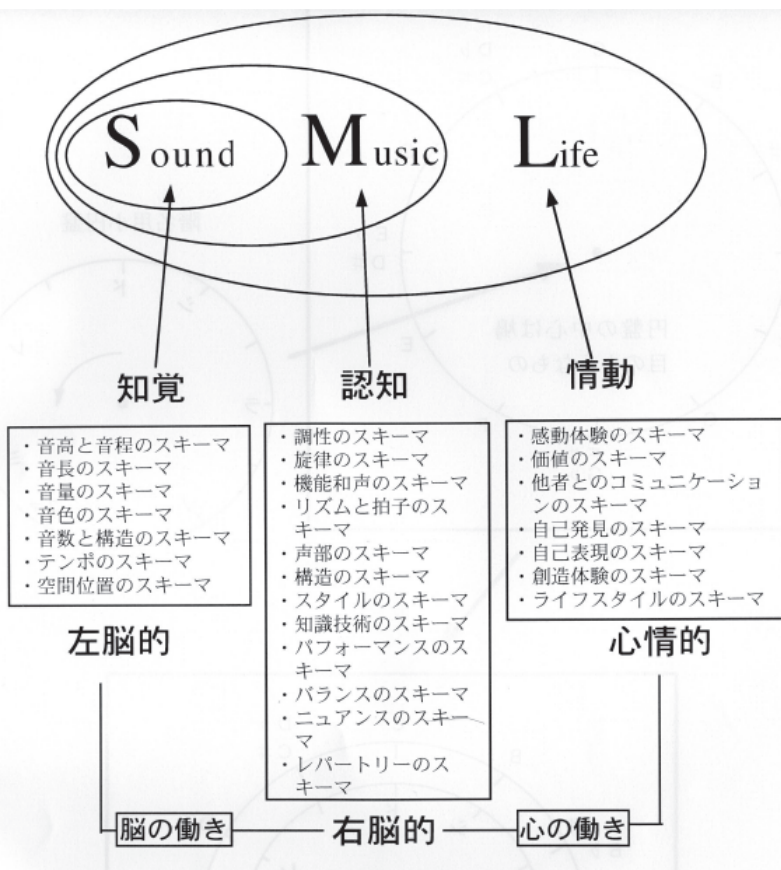


をずっとテーマにしてきたのである。

中学校では移調の概念を教えるため、上下にスライドする黒板にドレミを書き、動かない黒板の枠にハニホへを書いたままにしておくとか、首からドとかレとか書いたふだをぶら下げて任意の高さのドに対して自分の笛や声で札に書かれた高さを表現するとか、数え上げれば限がないがあの手この手でこの教育を徹底した。巻末に掲げた二人の男子学生からのメールはこの授業を受けて感動した彼らがその日の内に自発的に寄越したメールである。

この移動ド教育の普及に貢献したのがシンセサイザーの移調機能である。ただ移調を任意の調に設定するだけで何調にでも簡単に移調でき、手元はハ調でよいので何の説明もなく移調や調の概念が理解できる。アンサンブル・オルガンや学校用シンセには絶対必要な機能としてこれを付けた。

このような機能を持つアンサンブル・オルガンの指導者講習会（於相模原市）の最中このアンサンブルオルガンをM Lですかと質問した先生がいた。いいえS M Lですと答えたのが最初の「鈴木寛のS M L理論」である。相対音感を始めとする音感教育をS（サウンド）の楕円で、それを使ったM（ミュージック）の楕円はSを含め、それはL（ライフ）に含まれるという概念である。



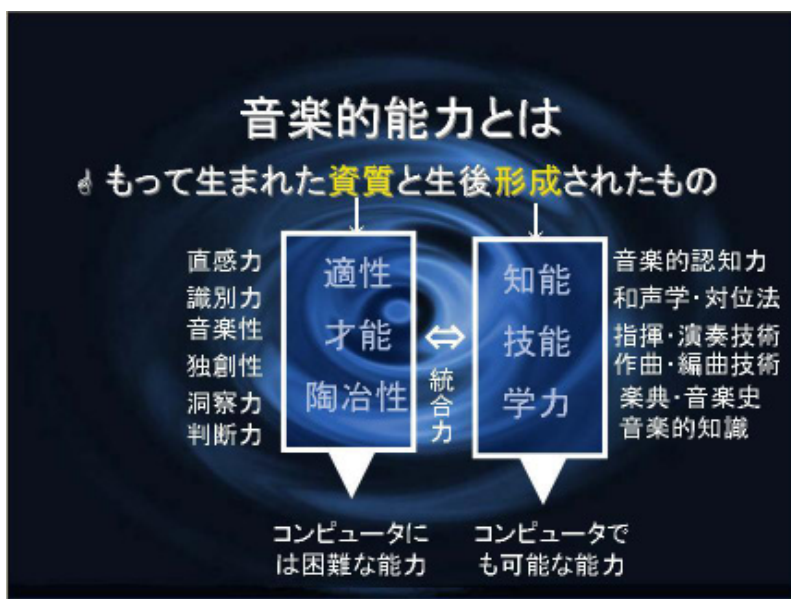
それがたまたま服のサイズの分類と同じアルファベットが使えるのでこの講習会以後寛の講習会のキーワードはSMLとなった。

この理論は音楽教育をS即ち音の認知や表現の教育と、M即ち音楽としての秩序や表現を学習するのと、それらを包含し得るL即ち生活や価値観の文化の教育に指導項目や評価の観点を設定し、ゲシュタルトである音楽ではあるが指導者の理念として今何を教育し何を評価しようとしているのかをはっきりさせるといふ理論である。それぞれのエリアに必要とされる脳の部位や学習内容は異なるという大胆な仮説でもある。今日ポートフォリオ等と尤もな名前で呼ばれる評価項目表は附属中時代に既に「大マトリクス」という名前で研究発表していたのでこの方面の研究でも寛は一步先んじて居たようである。

特にL即ち生活や価値観の形成と密接な関係がある「情動体験」は多くの院生に研究対象として興味を持たせた。自己発見や自己表現という情動を左右する行動は客観的評価が難しい領域ではあるが、ある程度数値化することにも成功した。

また、寛は音楽の進化に対して「歴史的輪廻」を提唱する。これはあらゆる音楽が石器時代の昔からあったわけであるが、それが一直線にダーウィンの進化論の系統樹のように進化してきたのでは無く、小さな輪廻を次第に大

教えなくても伸び
る音楽的能力



寛は「音楽的能力」を上図のように可能性（左側）と現実性（右側）に分けて説明する。多くの音楽教師が右側の「訓練」を一生懸命やるのに対して、寛は左側の「適性・才能・陶冶性」の掘り起こしを目標とする。このことが寛と他の音楽教師との決定的な違いであり、恩師中村茂隆氏の影響は少なからずある。画家の父と音楽にそれ程堪能では無かった母に育てられ最初に買ってもらったハーモニカにもおもちやのピアノにも黒鍵に当たる音が無かった。従ってあらゆる曲は一度ハ調に直さなければ演奏できなかったの



である。この経験こそが相对音感形成そのものであり今日の寛の音楽的能力の基礎になったわけだから父や母のお陰と言うより他はない。

しかし、ここで両親の影響に触れるなら兄から受けた影響の大きさに触れなければならぬ。二つ年上の兄の後ろをいつも付いて歩いていた寛は、小学校に入るや色々な人から「あのメーチン（^{シメ}肇のメをとって付けられた）の弟さん」と言われる程兄は有名人だった。その兄が小学校高学年時代にピアノを習っていたので、遅れて寛も習うことになったのである。しかし、兄のレパートリーは殆ど憶えてしまっただけで習いもしないトルコマーチ等は楽譜なしで弾いていた。学芸会の器楽演奏の指揮者を務めた兄は、六甲中学に入学すると迷わず音楽部に入部してパーカッションを6年間高校を卒業するまで続けた。浪人せずに神戸大理学部に入った兄は直ぐにオーケストラに入部。チェロをバイトで購入してコンサートマスターで卒業するまで続けた。そこで久子夫人と結ばれたのも音楽が縁である。こんな兄の楽しそうな音楽活動が寛の音楽への憧れを形成したことは言うまでもない。定年退職後も楽しそうに夫婦で続ける音楽活動は寛にとっても行く手の灯火である。下手なプロよりも豊かなアマチュアを目指せと常々生徒や学生に言う寛の価値観はこの兄の影響以外の何ものでもない。この兄弟は楽譜無しで何処でも即興的にハモれる特技がある。どちらかが歌い始めるともう一方が自動的にハーモ

ニーを付けるのである。この兄は音楽を聴くと自動的にベースを歌い出す。普通の人ならメロディを歌うものを、必ずベースを即興的に付ける。

なまじ和声学を勉強した寛とは違って正確にI・Vだけのハーモニーであるが学校教育で身につけたとは思えない。この家庭環境は寛の教育現場での大きなヒントになったのである。相対音感とは絶対音感を捨てなければ付かないことも、移動ドでなければ即興的なセッションは不可能なこともすべてこの家庭環境から得たコンセプトである。音楽家の両親からその夢を受け継いで音楽家を目指す人とは違う経験をしたことは確かである。正確に演奏することも一つの価値観であり我々が演奏家に期待することであるが、台本に頼らず個性やその場の雰囲気表現できることも一つのパフォーマンストと思う。寛の視野にいつも入っている音楽家はフランソワ・グロリューのような柔軟な音楽観を持ちそれで居て正確な技巧を持つ人である。多くのジャズ・ミュージシャンはそれを目標としているように思えるが、多くの音大卒業の演奏家にはそれは期待できない。兵庫教育大学においても「ただピアノが上手い」だけの音大もどきの中途半端な学生に対して音楽教育者という別の目標を持って貰いたいと願う寛である。

高校で英語スピーチコンテストに代表で出場した兄はまた語学の天才でもあった。習わない国の言葉を語源から推察してほぼ理解してしまう。これも



習う習わないに関係なく自学するという姿勢を寛に教えた事実の一つである。

教会に最初に行って結局家族全員が洗礼を受け、聖歌隊に入り寛にクノール師を寛に紹介したのも兄である。その聖歌隊が若者が集まる一つの集団であつたが、倉沢先生もそのメンバーだつた。そして、慶子さんもそうだったのである。慶子さんがオルガンを弾く寛の格好良さに惹かれたのかどうかは知らないがこの聖歌隊での経験がオルガニストの宿命である即興演奏の訓練になったことは間違いない。典礼オルガニストにはいくつかの能力が要求される。その一つはどの調で歌い出すか判らない司祭に合わせて瞬間的に調を把握してその調で伴奏をすること。そして、BGMとして演奏する曲は典礼に合わせてそのサイズを自由に換えられること。そして何よりも「弾いてはいけない。祈ること」が演奏に直結すること。こんな経験は音大ではできない。多くの巨匠は殆どこの道を歩んだのであるが・・・

残念ながら今のカトリック教会にこのような典礼音楽は無い。従って寛の出番はない。教会を覆う民主主義の嵐はかつての敬虔な信者にはついて行けないのである。モーツアルトがフォーレがそしてブルックナーやフランクが築いた教会音楽は悲しいことだが、今では教会ではなく演奏会場に



行かないと聞くことは出来ない。

その教会を通して知り合った多くの友人は寛の宝である。よく学生から「先生はどうしてそんなに色々な職業の人とお友達なんですか?」と聞かれたものだが種を明かせばそう言うことである。子供の幼稚園のPTAとして知り合っているの間に子供は成人しているのに親だけがまだそのまま仲良く付き合っている。そんな仲間の一人が本下稔、比呂美夫妻である。もう彼らとの付き合いは30数年になるが、家族ぐるみの付き合いである。夏の京都・久美浜での恒例のキャンプは30数年続いている。最近は春や秋にもキャンプするので周囲から好い歳をしようとされる。

キャンプ以外の仲間も集まって「芋煮の会」や様々なアウトドアライフを楽しむ。

この芋煮は眞篠先生の故郷山形ではとても盛んで眞篠先生直伝の行事を是非神戸でもと近くの六甲山系の渓流で毎年行ってきた。

キャンプに行くのもアウトドアも普通のセダンで行く。わざわざそのためにワンボックス車を買う事もないし、クラウンでキャンプ場に行っても恥ずかしくない。ネクタイと背広でキャンプ場に行くよう



左足を骨折
(2001年)

な気もするが、その装備たるや半端ではない。ビールサーバーまで持ってゆくのだから推して知るべしである。最近は暑い夏の久美浜もちょっと辛くなっている。春や秋に十津川のキャンプに^{はま}嵌っている。ここ三年は愛犬黒ラブのサリーもメンバーに加わった。

「大人の遠足」もとても楽しい行事で、温泉の大好きな仲間の楽しい行事であるが、日曜大工の腕を上げた寛が作った屋上デッキでの飲み会も、近所迷惑を顧みずやっている。この日曜大工は様々な電動工具を揃える楽しみもあってやっているが、上の写真は最近の力作で工務店に頼むと50万円以上かかるところを7万円位でクソ暑い真夏に仕上げた。秋の月見に間に合わせたかったからである。退職後はこのデッキに帆布で屋根を付ける予定である。このように大学と言う職場ではそれほど友人に恵まれなかったが、それ以外の所での友人に恵まれ、家族ぐるみで付き合えるお陰でこれからの生活に何の不安も無い。

12月25日孫の誕生日に招かれ出がけに家の階段を踏みはずし左足裏を骨折。明くる日はMBSの西日本大会であったが、松葉杖とギブスで吹田のメイシアターホールまで自分で運転して行った。さらに恒例の年末家族旅行も長男聡君の運転で田辺まで出かけた。



2002年1月はこれも恒例のTPSのコンクール審査であった。松葉杖がうつとういので医者に圧力をかけてギブスを外して貰った。6週間は外せないものを外したから地下鉄赤坂駅の階段は辛かった。内田君と出版記念会についてホテルで打ち合わせ。2月神戸の六甲荘で行われた内田・大熊・葉袋三先生の出版記念パーティーには無理をして松葉杖なしで参加したがまだ痛かった。

この出版「危機に立つ音楽科教育」は学年の違う3人がそれぞれのゼミでの研究成果を一冊にまとめたもので、指導教官にとっても名誉なことなのでホームページでも宣伝をした。

4月には埼玉県の高校現職大串和久先生が入ゼミ。相愛大学からのストリート河合由佳さんも入ゼミ。学部生は松井愛子さんが入ゼミ。この年の夏の久美浜海水浴(第2回)実施。

2003年3月で仁田悦朗氏が教頭を早期退職してイオンド大学教授となったのには驚いた。イオンド大学から名誉博士号をとった話は聞いていたが、教頭職は向かないとか好きじゃないみたいなのを言いながら出版もする努力家だ。ゼミで退職者は他に青井雅人君もいる。その勇気が羨ましい。

4月姫路市の現職市原智子先生と相愛からのストリート北川智子さんが入ゼミ。

父の葬儀でオルガンを演奏



第四回フランク来日 (2003年)



ミ。学部は多木久美さんが入ゼミ。新歓コンパは瀬戸内海の見える御津の近くの魚の美味しい「堀いち」でバーベキュー。その後は赤穂御崎へ行く。帰りは相生のペーロン倉庫の側の温泉に入って解散。

松井愛子さんが教育実習なので実施校に挨拶に行った6月11日父親が夜急逝。93才。しかもその日は田崎真珠のスワンクラブの招聘で第四回のフランク来日が実現しポートピアホテルで打ち合わせをするはずであった。結局打ち合わせは翌日父の通夜の前にやり、その日の彼の練習は通夜に出かけて留守の寛宅でやってもらった。13日の葬儀では、父のために即興でオルガン演奏をした。いざ何かを弾こうと思ってもベーターベンやモーツァルトでは父の葬儀にピッタリのものは無い。父の故郷の能登の久江村の光景を頭に描きながら演奏した。自分では父への最高の供養ができたと思っている。

無事葬儀を済ませ翌日の本番に向けて父の遺骨が帰ってきた寛の自宅でフランクと最終打ち合わせをやった。お陰で14日の本番は上手く進めることができた。

本当は寛がステージ通訳をするはずだったが、突然の事で、プロの通訳に來て貰ったが専門用語はやはり事前に寛がチェックをした。ここでもピアノの自動伴奏にHome Cocerto 2000と名を改めたフランクのソフトが人々を驚かせた。翌15日にはもうアメリカに帰ってしまっって今回は何も話す暇がな

寒翁が馬大暴れ

左手指2本大怪我！

(2004年6月)

7才	左鎖骨骨折	剥離
13才	左手第2指爪	骨折
30才	左肋骨骨折	挫
34才	左肋骨骨折	挫
43才	左足首捻挫	挫
50才	左膝故障	挫
58才	左座骨神経痛	挫
60才	左足裏骨折	挫
62才	左指切断	挫

終わり良ければ・

かったが、一晩だけ鈴木宅の夕食会には参加してくれた。

2004年6月20日庭で台風の後始末をしていて電動チェーンソーで誤って左手指2本の第2関節を骨まで切断。皮一枚でぶら下がる左手の人差し指と中指を見て、やっちゃったーという感じだったが、これで小1の左鎖骨から始まった左側トラブルの極めつけが来たとも思った（右側は無傷）。幸い近くの海星病院に緊急で飛び込み指をつないでもらった。ピアノが弾けるようになるかは執刀医も首をかしげていたが、慶子夫人の必死の頼みにもう帰ろうとしていた辻本先生が手術をしてくださった。入院中もパソコンを持ち込み右手だけで学生とグレードテストについてやりとりをしていた。現在もリハビリ中であるが多分ギターやバイオリンは生涯演奏できない（元からできない）であろう。

2005年神戸大での先輩である田村先生の武庫川女子大での生徒植山恵里さんを最後にゼミは幕引きに入る。

2006年講座が解体され、実技教育研究指導センターは専任教員の居ないセンターになり、寛は体育・芸術教育学系の教員に異動となる。23年に亘りセンターを差別した学内組織はこれで解消された。肩書きも法人化した時点で「兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授」になる。また法人化に伴って身

運命のイノシシの年

分も準国家公務員となり、「教官」から「教員」に代わった。従って、退官記念行事ではなく退任記念行事となったのである。

色々あったが、大きな事のすべてが「亥の年」と関係が深い。

一九四七年頌栄幼稚園へ入園したのがイノシシの年
進路を音楽に決めたのが一九五九年のイノシシの年

神戸大の附属明石中学で辞令をもらったのが一九七一年のイノシシの年。

兵庫教育大学の助教授として異動したのが一九八三年のイノシシの年

阪神大震災が一九九五年のイノシシの年

そして定年退職（65才）が二〇〇七年のイノシシの年

次の二〇一九年のイノシシの年が「〇〇」の年になるのかな・・・

8月14日母が肺ガンで逝去（94才）。これで親孝行も退任となる。



本来ならばここには長い謝辞が入るが入りきらないので割愛する。振り返れば、誰もが迎える定年を、悔しい思いの多かった時期に自分の中では随分前に迎えていたような気がする。諂^{へつら}わらず惑^{まど}わず頑固で不器用な生き方をしたと後悔していない。会議や多数決に縛られないこれからの快適な人生を夫婦でもっと楽しんで自由に誇らしく一層不器用に生きたい。

規格外れのマイペース人間



親のことを、「思いつきママと取りあえずパパ」と呼んでいた。とにかく即実行の母と、まあ取り敢えずそうしておこうという面倒臭がりの父を見て育った。小学生だった頃、気象の事を習っていると云えば海洋気象台に、郵便の事を勉強していると云えば郵便局に交渉して寛を見学に連れて行った母。ハーモニカの上手かった父。学歴が無いと男は駄目と父を反面教師にする母と学歴なしでも独学で肖像画日本一の父の狭間で育った。両方の影響を受けたように思う。



格は、社交家で好長族の兄と反対で、友人を選び、「長」と名がつくものになりたくない。モノを買うのが好きで捨てるのが嫌い。従って身辺が片付かない。相手のペースについて行くのが苦手なマイペース人間。遅刻が嫌いで時間をよく守る。几帳面にメモをとらない。お金はじっと持っておられない。洒落は父譲り。愚痴は母譲り。



味は壊れたモノの修理。頼まれなくても買って出る。コンピュータのトラブルに滅法強い。アウトドアは大好きであるが独りではやらない。常に仲間と楽しくやる。ここ数年は日曜大工にはまっている。油絵もかなり上手い。勝負事はやらない。順位や勝ち負けの決まるスポーツはやらない。



技は「独学」。習った方が安く付くのに習わない。結果、パイプオルガン、シンセサイザー、大型免許、コンピュータ・プログラミング等をものにした。ゴルフはシングルの腕前（やった回数）。本を読むのが滅法早い。文庫本は一冊1時間以下週刊誌なら15分。しかし、ダヴィンチ・コードには難儀した。早生まれの宿命として運動に関する特技は無い。今日までメモを持たずに生きてこれたのも特技？



きな食べ物は「和」「洋」「中」は問わない。デザインで車を選ばない。慶子夫人は決して人の欠点や悪口を言わないので大好きであるし尊敬もしている。阪神タイガース（エースに値しない井川以外）。スピード、スリル、サスペンスの映画やドラマは大好き。



いなものは「会議」「役職」「多数決」である。それと「書類」。こちらの都合も考えずいつまでに記入して提出というアレに弱い。HG、美川憲一、お杉、ロンドンブーツ。「全然面白い」みたいな変な日本語。「○○と言ったらセクハラ」と決めつけるマニュアル人間。

(写真は当時の姿)

この師と出会えなかったら今の彼はなかった



故入江康之先生。慶子夫人と共通の小学校担任。厳しかった。難しい四文字熟語は全部この先生から習った。厳しさと優しさは同じであることを教えてくれた。最後は長男聡の母校美野丘小学校校長。



故脇坂修次先生。龍野の城主の末裔。最初のピアノの先生。楽譜を殆ど使わないで教えてくれた。そのお陰で即興演奏ができるようになった。アコーディオンが弾けるのもこの先生のお陰。



Robert.M.Flynn イエズス会士。アメリカ人。プログレス英語の著者で寛の英語の師。師から洗礼を授かった。弟さんの Leo のお陰で Moog 博士に会えた。



故 Sebastian.Knorr. イエズス会士。頑固でいぶし銀のようなドイツ人。音楽に対する態度を教えてくれた。オルガンの師匠。聖歌隊のボス。ガッツとは何かを教えてくれた。眼鏡の奥で優しい眼が光る。



故倉沢豊治先生。三木市の教育長もされたし、叙勲もされたけれど、そんなに偉くなくても寛が教師になろうと思ったのも音楽に進んだのもこの鬼と呼ばれた先生の影響。仲人もしていただいた。



中村茂隆先生。神戸大学名誉教授。何と言っても寛の音楽の先生。政治も語る、本も書く。一緒に飲んだことは無いけれど、誠実で熱心な大学教員の見本。直球以外に変化球も多く教わった。一緒に歩くとご兄弟ですか？とよく聞かれた。

授業やゼミで一度は聞いた懐かしの語録百選

すずかん語録

1. 教育に「学」はない。有るのは「論」と「術」だけである。
2. 車も買った、海外旅行もした、エッチもした。後は「余生」という今時の学生さん。
3. 人間は常に変化している。「良くなる」か「悪くなる」かのどちらかに。
4. 「今時の子ども」を育てているのは「今時の教師や親」である。
5. 勉強は「分母」。研究は「分子」。
6. 研究において「興味」の無いものは持続しない。「課題意識」が無いと進展しない。
7. 「How to」を言う前に「Why to」。
8. 「脳細胞」のスポーツとしての音楽より、「心」の糧となる音楽を。
9. 「視覚情報」は「聴覚情報」をさえぎる。
10. 「ハ調読み」では「音楽」の教育はできない。
11. 「真実」は短い言葉で言える。
12. かけ持ちの得意な人に誠実さは期待できない。
13. 「女生徒」を制する教師は、「クラス」を制する。
14. 「自分の可能性に挑戦したい」人は、ただ「わがまま」なだけである。
15. 音楽には「趣味」・「専門」・「道楽」以外に「極道」の世界がある。
16. 人は同時に二つ以上のものに情熱をそそぐことはできない。

17 「ほめる教育」は「ほめらることしかない子ども」をつくる。
18 「叱る教育」は「叱られないことしかない子ども」をつくる。
19 ほめられることが目的の子どもは自己中心の「悪い子」である
20 「叱るより怒れ」。怒っていることを伝えよう。それがコミュニケーションの学習。
21 「家庭」は「教育」の原点である。
22 芸術において「知性」と「痴性」、感性」と「慣性」はほとんど同義語である。
23 マイペースと言えば聞こえが良いが、我が儘のこと。
24 「非婚」も「不婚」も「未婚」であることに変わりはない。
25 音や音楽は「聞かない権利」が「聞く権利」に優先する。
26 「車間距離をとれば安心」は迷信である。前の車が突然速度ゼロにならない限り。
27 人生は長い長い「暇つぶし」ではない。
28 「新しい」ものが「善」であるとは限らない。
29 細かい約束がいっぱいある宗教は怪しい。
30 神様は「悪いことをする人」を罰するほど心が狭くないしサディストでもない。
31 神様は「自分を敬う人」だけを愛するという心の狭い支配者ではない。
32 「愛する」とは「相手の幸せを願う」ことである。

33 可愛い孫も目に入れたら痛い。

34 「サボリ」はどんな職場にも居る。

35 職業なんてものは結局は「飯の種」である。食えなきや好い仕事はできない。

36 言葉数を少なく、落ちついて喋れるようになって、人はあなたの言葉に耳を傾ける。

37 何でもメモする人の頭の中は空っぽである。

38 究極の安全運転は車を動かさないことである。

39 罪人にならない一番の方法は何もしないことである。しかし、それも罪になる。

40 女の中には「人間」のふりをする女と、「女」のふりをする人間がいる。

42 文化は「変わる」。革命は「変える」。

43 結婚に踏み切るには相手がいるが、離婚に踏み切るには相手は不要である。

44 「良い酒」と「良くない酒」を混ぜると「良い酒」の味になる。（良酒効果）

45 「勉強」と「研究」はちがう。

46 子どもに「変容」が起こらない教育は、時間の無駄である。

47 「やればできる」は嘘。できるならやっている。

48 「わかる」とは、たとえ話で説明ができることである。

49 半人前の「男類」と「女類」が一緒になって「人類」。

50 会議とは何かについて話し合ったというアリバイをつくる儀式である。
51 コンピュータは記憶や計算、検索は人間以上だが、感情や意志は無いし芸術とは無縁。
52 民主主義で天才は育たない。
53 アカンもんはアカン。いいわけは自分をだめにする。
54 人生はパンツのゴム。緩すぎてもきつすぎても駄目。
55 蟻は「生きる」ために働き、キリギリスは「生きる」ために遊ぶ。
56 母は「生かし」、父は「活かす」。
57 音楽には「もっと聴きたい」「印象が残らない」「二度と聞きたくない」の3つがある
58 「わかる」とは、定義や分類ができることである。
59 所詮男は女の持ち物の一つ。ルイビトンか粗大ゴミみたいなもんです。
60 「文化」とは「生き甲斐」のことであり、それを伝えるのが「教育」。
61 喧嘩が成立する条件は「売り手」と「買い手」が揃うことである。
62 教育とは生き方を教えるのではなく、何故生きるのかを教えることである。
63 男女は同権であるが同質ではない。
64 若さとは限りなく夢があるのではなく、限りなく夢を失うことである。
65 意欲の5つの側面は、「楽しむ」「工夫する」「協同する」「耐える」「冒険する」。

66. 「音」は「耳」で聴き、「音楽」は「心」で聴く。
67. 「Player」は「自分」の為に演奏し、「Performer」は「聴衆」のために演奏する。
68. 「音」には「持続音」と「減衰音」があり、「持続音」は誘導型、「減衰音」は誘発型。
69. 人間の基本的欲望は「生存欲」と「行動欲」である。
70. あらゆる時間芸術は、前から3分の2の所にクライマックスが来るようにしなければならない。
71. 目的意識の無いガムシヤラは情熱とは言わない。
72. 「完全」であるより「完全であろう」とする方が大切である。
73. 「前例がない」は「やる気がない」と同じことである。
74. 「横並び」の思想は民主主義の欠点である。
75. 教師のV・S・O・PはVitality (活力)、Sensitivity (感性)、Originality (獨創性)、Planning (計画性)である。
76. 女性には空から見た「地図」が描けない。男性は地上の事物を順番に記憶できない。
77. 悩める女性教師に一言。「自分のお腹を痛めた子ども」を最優先すべし。
78. 恋は相手の長所を占有し、愛は相手の短所を受け入れる。
79. 「恋」とはその対象を自分のものになりたいと願う心である。

80. 絶対音感は単音認知、相対音感は音程認知。
81. 現代音楽は絶対音感で聴く、古典音楽は相対音感で聴く。
82. コンピュータには名詞と動詞しかないが、人間には形容詞や副詞、感嘆詞がある。
83. 人工知能はできても、人工感情はできない。
84. 学習行動は「知る」↓「わかる」↓「できる」。情動は「感じる」↓「おもう」↓「はまる」。
85. 世の中みんなが主旋律を歌いだしたら誰が対旋律や伴奏をやるの？ 皆が右手になったら誰が左手をやるの？
86. 「教育」は「教える」と「育てる」の2文字。「教えるばかりで育てない」馬鹿ども。
87. 「生活」とは「生きて」「活きる」こと。延命医学は「生かす」が「活かさない」。
88. 「健康」とは「生体数値」が示すのではなく、「活動数値」が示すもの。
89. 創造的学習と称していきなり「応用問題」をやらせ、基礎・基本を教えない教師は間違っている。
90. 女とは「こどもを生み育てる機能を有する人間」、男とは「女でない人間」（広辞苑より）
91. 絶対音感とは音楽のデータを正確に聞き取っているにすぎない。相対音感とは音を情報として音楽化して聴く。

92. 絶対音感では音楽のデータはわかってても情報はわからない。コンピュータと同じ。
93. 新しい通貨が出てても古い通貨が使えないわけではない。文部省唱歌は不滅か？
94. 文化は古いものを否定しても新しくはならない。
95. ニュースキャスターが居なければ情報化できない人にとってニュースは無意味。
96. たばこを止めない人は意志が強い。みんなが止めるご時世に吸い続けるんですから
97. 向上心の無いひとに限って、誰も教えてくれないと不満を言う。
98. データは情報の元であって、情報化能力がなければただの記号。
99. 半端なプロより、偉大なアマチュアを目指せ！
100. 多数決は民主主義の最大の罪である。

そして

一番好きなことば

「夢中」

こんなメールが来ます！

鈴木 寛 教授 様

突然のメール、失礼いたします。

M1 総合学習系コース〇〇〇〇 (M063xxx)と申します。

本日火曜日 2 限目に、初等音楽科教育法の授業を受講させていただきました。

大学での4年間、そして民間勤務の8年間、いろんなセミナーや講義等を受けて参りましたが、本日のような素敵なお話を聞くことができたのは初めてでした。

私たち生徒を惹きつける内容の授業、たくさんの情報や体験談をお持ちで、本当に聞いていてとても楽しく、また学ぶことも多く、あっという間の90分でした。

来週からも鈴木先生の講義を受講できるのを楽しみにしております。

勝手とは思いましたが、感謝と感動の旨をお伝えしたく、メールさせていただきました。

[illegible]

本日の授業での先生のお話を聞いていて、とても心地良かったです。音楽教育とは(音楽に関わらず他教科も)音楽であるはずで、音学ばかりではないことや、[はまること]の大事さなども確認できました。私事で恐縮ですが、僕は音楽CDを買うときは大衆がいくら期待している曲でも発売日には買わず、どこかで流れているのを聞き、気に入ったものだけを買うようにしています。というわけで、最近自分のお気に入りの曲だけで自分のベストアルバムを作ったところ、30分ももたないCDになってしまいました(笑)。でも選んだ曲にはそれぞれ強い思い入れがあるものばかりで、大衆に流されなくてこれはこれでいいかな、と思っています。 毎回このような形態でお話を聞いたらこの音楽の授業はすごく楽しいのになぁと思っています(笑)。

P.S.[break]には、[切り開く] という意味もあるんですね。 —

U 0 4 1 xxx 学部3回生 ○○○○

【著書】

- 1977年11月15日 1.「誰にでもわかる「シンセサイザー入門」 音楽之友社
- 1978年9月2日 2.「シンセサイザー入門」『レコード2枚 CBSソニー
- 1980年4月15日 3.「教育大学教科教育講座第11巻「音楽科教育の理論と展望」 (全12巻) 第一法規出版
- 1983年1月 4.「授業と評価／ジャーナル①特集 評価で授業を変える 明治図書出版
- 1984年11月30日 5.「アナログ図解によるFM音源シンセサイザー「DX7」徹底研究 音楽之友社
- 1986年2月25日 6.「コンピュータ・ミュージック最新技法 リットーミュージック
- 1987年5月 7.「子どもと音楽 (全10巻) 同朋舎
- 1992年5月 8.「音楽科教育実践講座「SORARE」 (全19巻) 第5巻「電子楽器の活用」 ニチブン
- 1993年7月 9.「現代学校教育大事典」 (全7巻) の第4巻「シンセサイザー」 ぎょうせい
- 1995年7月10日 10.「やさしいコンピュータ活用法」 音楽之友社

「コンピュータ・ソフト

1995年7月10日

【論文】

11.「ハイパーMIDIレッスン」 音楽之友社

- 1974年2月 1.「M・L・装置を使ったアンサンブル指導の研究 日本教育大学協会第三部会音楽科研究会年報第5号
- 1976年2月 2.「シンセサイザーを導入した音楽教育 日本教育音楽協会「教育音楽」 中学版第20巻第1号
- 1976年3月 3.「意味のある授業を創る。シンセサイザーの導入とT・D方式 日本教育大学協会第二部会音楽科研究会年報第9号
- 1978年3月 4.「音楽科における評価の方法と意味 全日音研「音楽教育」7月号
- 1978年10月 5.「PLAYされる音楽をねらう授業の設計」 日本教育大学協会第三部会音研年報 第8号
- 1979年3月 7.「鑑賞を軸とした音楽教育 日本教大協第三部会音研年報 第9号
- 1979年10月 8.「鍵盤楽器演奏練習の自動評価システムについて」 「シンセサイザー演奏のコンピュータによる計測と分析」

- 1980年2月 電子通信学会ET79-11
9. 鍵盤楽器の奏法指導におけるコンピュータ利用の演奏分析システム
- 1982年3月 昭和56年度科学研究費研究成果報告書神戸大学教育工学センター
10. 音楽教育とC M I
附属学校と教育工学センターを直結したリアルタイムC M Iの実用化試験
- 1983年4月 11. Der Synthesizer in der japanischen Musikerziehung - Musik und BildungHeft4.83+SCHOTT W.G
兵庫教育大研究紀要第5巻
- 1984年9月 12. 鍵盤実技能力のグレード化における考察と未来像
兵教大実技センター研究紀要第7巻
- 1987年6月 13. 音楽分野実技課題グレードに関する問題
兵教大実技センター研究紀要第7巻
- 1987年6月 14. The Synthesizer and its Possibilities in Music Education 兵教大学実技センター研究紀要第1巻
- 1988年3月 15. 本学における実地教育のあり方に関する研究
兵教大昭和59年度教育研究学内特別経費による研究プロジェクト
- 1988年6月 16. コンピュータによる演奏分析およびシステム構成の研究
兵教大実技センター研究紀要第二巻
- 1989年3月 17. 鍵盤実技能力とその物理的解釈
兵教大実技センター研究紀要第三巻
- 1989年3月 18. 本学の実地教育のあり方に関する研究II
兵教大昭和59年度教育研究学内特別経費による研究プロジェクト
- 1990年3月 19. 音楽実技指導における教師の言語活動
兵教大実技センター研究紀要第四巻
- 1991年3月 20. 音楽科教育の国際的動向について
兵教大実技センター研究紀要第五巻
- 1992年3月 21. 米国のコンピュータ音楽におけるハイテク事情と方向性
兵教大実技センター研究紀要第六巻
- 1992年3月 22. 初等教員養成課程における実技教育方法の検証と改善(1) 兵教大実技センター研究紀要第六巻
- 1992年3月 23. 音楽科教育のためのDTMシステムの開発
平成2年度科学研究費補助金 研究成果報告書
- 1993年3月 24. 米国のコンピュータ音楽におけるハイテク事情と方向性(2) 兵教大実技センター研究紀要第七巻
- 1994年3月 25. M I D I による音楽教育C M I ソフト制作の試み
兵教大実技センター研究紀要第八巻
- 1995年3月 26. S. M. L. の音楽教育(1)
兵教大実技センター研究紀要第九巻
- 1996年3月 27. S. M. L. の音楽教育(2)
兵教大実技センター研究紀要第十巻
- 1997年3月 28. S. M. L. の音楽教育(3)
兵教大実技センター研究紀要第十一巻

- 1998年3月 29. S. M. L. の音楽教育(4) 兵教大実技センター研究紀要第十二巻
- 1999年3月 30. S. M. L. の音楽教育(追補) 兵教大実技センター研究紀要第十三巻
- 2000年3月 31. S. M. L. の音楽教育(追補-2) 兵教大実技センター研究紀要第十四巻
- 2001年3月 32. 音感と音楽能力評価 兵教大実技センター研究紀要第十五巻
- 2002年3月 33. 音に関する物理的特性と心理的效果 兵教大実技センター研究紀要第十六巻
- 2003年3月 34. S. M. L. の音楽教育(5) 兵教大実技センター研究紀要第十七巻
- 2004年3月 35. 音楽科教育におけるFD 授業を失敗させる方法の研究 兵教大実技センター研究紀要第十八巻
- 2005年3月 36. ピアノ指導における「e-ラーニング」 実技センターにおける実践 兵教大実技センター研究紀要第十九巻
- 2006年3月 37. 鍵盤実技における指導能力育成プログラム 兵教大実技センター研究紀要第二十巻

【雑誌掲載論文等】

- 1976年2月 1. シンセサイザーを導入した音楽教育 日本教育音楽協会編集「教育音楽」中学版 通冊229号
- 1979年5月 2. 音楽教育のためのシンセサイザー講座(全24回連載) 日本教育音楽協会編集
- 1981年4月 「教育音楽」中学版 通冊268～278号
および同中学・高校版第24巻4号～第25巻4号)
- 1979年9月 3. 世界最初のシンセサイザー・オーケストラ 月刊 RAM 広済堂出版9月号
- 1979年12月 4. 未来に羽ばたくシンセサイザー・オーケストラ 月刊 RAM 広済堂出版12月増刊号
- 1980年2月 5. 幅広い用途を持つプラザ的音楽室 音楽之友社教育音楽別冊
- 1984年2月 6. 音楽を志す人に数学は不要か 雑誌 音楽通信 3月号
- 1987年2月 7. DX7IIとアンサンブル教育 ミュージック・トレード2月号
- 1987年7月 8. 「続コンピュータ・ミュージック最新技法」
- 1988年11月 Keyboard Magazine Professional 1～4 リットー・ミュージック

1988年9月
1990年5月～
1992年12月
9. シンセサイザーの音出しのブラックボックス CO出版社トランジスタ技術9月号
10. 音楽教育とDTM
(全36回連載)
ミュージック・トレード第28巻5月号～第30巻12月号

1998年1月～
2007年2月～連
載中
11. SML理論による「音楽教育とハイレク」
(現在連載中) 現在計一〇九回
ミュージック・トレード第36巻1月号～第35巻12月号

【学会発表等】

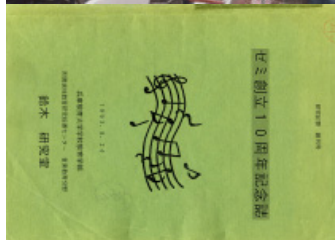
- 1974年8月
1976年8月
1978年10月
1979年4月
1979年10月
1980年2月
1980年6月
1983年8月
1984年6月
1. 「ML装置を用いての小アンサンブル」
2. ガーシュイン「パリのアメリカ人」演奏
3. 音楽教育におけるシンセサイザーのコンピュータ制御に関する基礎的研究
4. 「小組曲」ドビッシ「鳥」レスピーギの演奏
5. 「鍵盤楽器演奏練習の自動評価システムについて」シンセサイザー演奏のコンピュータによる計測と分析
6. 「鍵盤楽器の奏法指導におけるコンピュータ利用の演奏分析システム」
7. 「シェヘラザード」R・コルサコフの演奏
8. 昭和58年インターハイ開会式音楽の演奏
9. 「コンピュータ・ミュージックと音楽教育」

- 1985年3月 10. 昭和60年・科学万博「つくば博」開会式音楽の監督
1992年7月2日 11. The Synthesizer and its Possibilities in Music Education
1992年9月25日 12. 課題研究発表ハイパーメディアによる近未来の音楽教育(Ⅰ)「近未来の現在を实践報告する」
1997年10月 13. 創作活動のイメージ形成におけるレディネス
2001年5月 14. 音感と音楽能力評価

【テレビ等】

- 1976年8月 1. NHK.TV 全府連研究大会での演奏風景をニュースで
1977年4月26 2. NHK.TV 近畿の話題「我らシンセサイザーっ子」
1981年2月15 3. サンテレビ 神戸ニューアングル 第200回 「ハローシンセサイザー」
1981年10月 4. 関西テレビ
1987年1月 5. NHK.TV クローズアップ現代
1999年1月 6. 日本テレビ「特命リサーチ200X」
2001年3月2日 7. BS朝日「バラの舞踏会」







送り出すうた

ジェンカの手拍子で

作曲 YF80SL



原曲は附属中の卒業式のため寛が作詞作曲したものである

手を取り合って何年間
楽しい想い出貯めながら
今まで歩んだこの道は
明日へ続く道
ありがとう ありがとう
定年ごくろうさん
ありがとう ありがとう
定年ごくろうさん

初版 2006 年 12 月 30 日
第 2 版 2007 年 1 月 14 日
非売品

人が一番輝いている時は若さや体力のせいではありません。
それは「誇らしく」「理想に燃え」「人を愛して」「人から愛され
る」時です。

そんな時間をここに記し、さらにこれからも持てることを願って、
寛にかかわって下さった多くの人々に心から感謝します。
そして心ならずも傷つけてしまった人々に心から感謝します。

二〇〇七年二月 如月きさらぎ 寛一かんいち（鈴木 寛）